
魔法先生ネギま！の世界と銃器使い

むー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！の世界と銃器使い

【Nコード】

N1045R

【作者名】

むー

【あらすじ】

人災？で死んでしまった青年がある世界に転生するお話

注意点

- 1) 転生オリ主チートという厨二の二本柱。
- 2) 初投稿
- 3) 亀更新

以上の言葉に拒否反応がでるかたは回る右をされることをお勧め

します。

第1話 プロローグ(前書き)

この将来黒歴史確定な小説は進むパトスが生んだ惨事です。

第1話 プロローグ

少し話を聞いてほしい。自分は眉目秀麗、成績優秀、品行方正、スポーツ万能の神に愛されたような完璧超人が幼馴染で、何かあるとその幼馴染の厄介事に巻き込まれて死にかけることが年間日数の三分の一を超えることがあったりする。そして自分は平々凡々特に特徴はなく、巻き込まれまくるせいで多少身体能力がよかつたりするだけであるわけだが、まあ普通死にかけるようなことがあるならそいつから離れるのが普通なのだろう。だが、決まって自分がピンチになったりだとか、助けを求めたりすることがあればすぐさま駆けつけてくれたりするのでいまままで離れたりしなかったのだ。つまり自分が何がいたいかというところ……

「はいはい、現実逃避はそこまでしてくれないか？ そろそろこつちを向いてほしい」

「あ、はい。で、こいつどこよっ？」

「そうだな、人間ではただ一つの例外を除いて来ることが出来ない場所、と言っておこうか」

夢から覚める自分。いくら目が覚めたくなくてもこれはない。どこまでも真っ白な部屋に机とイス、自分とあいつがいるなんて。どうせ目が覚めたら頭に拳銃が突きつけられていたりするんだろうから、早く起きて命の危機を回避しなければならぬ。

「夢だと思って現実逃避をしているところ悪いがこれは現実だ。」

「え？ 夢じゃないの？ マジで？」

「ああ、マジだ。他にはガチだとか……」

「なんでお前がいるんだよ！」

認めたくないことを聞かされて無意識で返事を返しながら顔をあげるとそこには、いつもの見慣れた眉目秀丽、成績優秀、品行方正、スポーツ万能の神に愛されたような完璧超人の幼馴染がいた。

……アホらし。寝よ寝よ。何が嬉しくて見たくもない顔を夢で見なければいけない。

「君に一番親しい人間の姿を取らせてもらった。私には実体というものが無いからな。」

そろそろもう面倒だから結論からいこう。火陰陽介、君は死んだ。生き返ることはできない」

「……………死因は？」

「君に分かるようにすると出血多量によるショック死」

「何故？」

「君の幼馴染をスト キングしていた人間が彼の近くにいつもいた君を嫉妬して後ろからズブリ、だ」

「冗談じゃない。気がついていたら真っ白な部屋、幼馴染ホント冗談じゃない。でも、本当のようだ。拉致や誘拐は考えられない。あいつら絶対に拘束するから。自分だけ。」

「冗談じゃないと思われてもな、済まないが君のこの後は決まっている」

「どうなるんだ？ 地獄行きか？ それとも魂の消滅とかか？」

「君には別の世界へ行って貰う。」

「……………え？」

「君には別の世界へ行って貰う。ああ、安心してくれ。死ぬようなことはない。せつかく揉み消したのが台無しになるからな」

別の世界へ行って貰う？ 死ぬようなことはない？ 揉み消したのが台無しになる？

まで。少し待て。揉み消したのが台無しになる？

「どづいうことどころ？」

誰かがいました。『笑顔とは本来攻撃的なものである』と。自分の顔は今おそらく満面の笑みだろう。目を合わせただけでその道のような人に土下座をされたような眼つきで。

「う……………、あー、欲しいものは何でもやるから。特典も増やすからなっ？」

死んだのなら意味がないじゃないか。特典？なに言ってるんだこいつ。

「さあ、洗いざらい吐いてもらおうか」

指の関節を鳴らしながら睨みつける。

「えーと、俺の部下がストレスで暴走してな？ 人間の嫉妬をものすごく深くしたらどうなるのかと実験をしてな？ 君たちの世界でいうヤンデレだったか？ そんな感じになって君をズブリとな？」

「そうか。まあいいや。で？別の世界だったっけ？ 何すればいいの？」

「軽いな……。自分のことなのに。」

何をすればいいかと聞かれても、何をしてもいい。世界を滅ぼしてもいい。人を助けてもいい。何をするも自由だ。

とりあえず君には眼を渡す。遠見、透視、解析など、何でもできる眼だ。そしてその眼にふさわしい脳を与える。この脳には期待してくれていい。そのくらいないと発狂してしまう。さらに、不老不死に身体能力の限界突破。他にはそうだな……。何か希望はあるか？」

眼？脳？不老不死？限界突破？他の希望？ 何のことだ。詳しく説明してほしい。

「すまない、時間が押してきている。私が決めさせてもらう。君の脳を読み取って見たが……。随分と狡いな君は。まあいい。君の希望は分かった。」

チラツとどこか遠くを見るしぐさをすると急に早口になってとんだん決まっっていく。それに詳しく説明してもらってないし、どの世界に行くかもわからない。

「と思っていたら黒い穴に引きずり込まれるううう！！ ちよっと

待って待って待って!!」

「言い忘れていた。君に行つて貰う世界は『魔法先生ネギま!』の世界だ。君も少し知っているだろう?」

それに、原作を壊すと言つて遠慮する必要もない。君が世界に現れた時点でその世界は平行世界となる。さあ行け! 思つがままに楽しんで来い!!」

「無視かゴラあ!」

「ちなみに君に追加で渡した能力は、近代兵器についての技術と経験、知識がバグ級と、近接戦闘についての経験と技術、知識がバグ級だ。」

「……あ、しまった。転移時間設定間違えた。えーと? 原作の1500年前か。が、頑張ってくれ」

「ちょ、おま、おまえええええええ」

何故にそんなに焦つた顔をする。そんなにまずいことがあるのか。行きたくないぞそんなところ。それに、ネギまつて子ども先生がハ―レムを築く物語だろ?

「つてあああああ!」 もう体の半分以上がのまれたああ!」 助けてええええ! 誰かあああああ!

そんなかなで結構危険な予感がする新たな世界へ旅立っていった。

かなり理不尽だったけど。

第1話 プロローグ（後書き）

誤字、脱字などがあれば報告をお願いします。

感想や指摘を貰えると作者が狂喜乱舞します。

第2話 装備やら能力やらの説明とバトル

「やあ、唐突に転生？させられた俺だ。うん、自分でも何を言っているか分からない。でも真っ白い部屋から真っ黒い穴の中に突っ込んで周りが明るくなったから目を開けてみると、そこは生命の息吹が聞こえてくるような森の中だった。」

「そして目の前には自分を選んでくれと激しく光りながら自己主張をする手紙らしきもの。さすがに目が痛くなってくるので手にとつて……とはいかず、汚物を持つようにつまみあげる。」

「おう、無事着いたか。いやー設定間違えて失敗するかもしれなかったんだが成功したし良かった良かった。」

「うおおおお！？ 目がくく目があああああくくく」

「もともと目が痛いくらい光っていたのにさらに光りやがった。おかげで土の上を転がりまわるはめになってしまった。」

「お？ すまんすまん、光るのを忘れてた。そんじゃ、説明するぜ？ まずここは『魔法先生ネギま！』の原作1500年前だ。君に渡した能力はスーパーハイスペックの眼、ウルトラハイスペックの脳。不老不死、身体能力の限界突破。そうだ、不老不死は不死身の意味も兼ねてるからな。さらにバグ級の近代兵器に関する知識や経験、技術。同じくバグ級の近接戦闘に関する知識や経験、技術だ。近代兵器の能力は君の心の奥底にあった敵対する相手を見えない位置から叩きのめしたいというひっじょーに歪んだ願いを叶えてやったぞ。最後のはまあ、保険だ。そう簡単にやられちゃつまんねーからな。」

「なんでわかったんだよ……。誰にも言ったことがないに。」

でもさ、扱う物がないと持ち腐れなんだけど」
『それは問題ないぞ。今から送るから』

後ろからのフォントツという音に気づいて振り返ってみると縦がだいたい俺の身長倍くらい、横が俺の身長くらい、高さが1メートルの金属のケースが鎮座していた。

そろりと近づきふたを開けると中にあつたのは拳銃、サブマシンガン、スナイパーライフル、アサルトライフルなどの銃、銃、銃。申し訳程度に刃物が少し。とりわけ目を引くのがスナイパーライフル。この金属ケースの長さの原因でおよそ3メートルほどの全長に、とても厳ついゴテゴテとした姿。なんだこれ。これを使えと？いや、確かに叩きのめせるよ？でも、限度があると思う。

『リロードは弾倉を変えれば即座に補充されるから実質弾は無限だな。んー、後はなんか聞きたいこととかあるか？』

「何でこんなによくしてくれるんだ？」

一番の疑問点がここ。何故たかが人間一人ごときにサービスをするのか。俺は言われるまで死んだと知らなかったわけだし、此処まで肩入れするのか分からない。

「それは………試験の一環なんだ」

「試験？ なんの？」

「君が死んだ理由にしても最近不慮の事故で死ぬ人が多すぎて困っているんだ。だから人生半ばで死なせてしまったお詫びとして、転生させるという案がでただけけど、どうなるかわからなくてね。実験してみようってことになったところで君が死んだんでお願いして

みよつてことでこうなったんだ」

そういうことか………

ま、死んじまったもんはしょうがないし、前向きにいきるか。幸い死ぬことはないみたいだし、武器や知識もある。

「と、開き直ったところで早速この世界で生き残るために必ずしなければならぬことをやろうか。上を向いて見る」

急に影が差して雲が出てきたのかなと思いながら上を向くと鱗に牙、角、よだれを垂らしながら俺を見てくる二つの鋭い瞳。どう見てもドラゴンです。

『それすなわちバトルだ。テンプレすぎるか？ソイツを倒せない限りどこにも行けないからな』

「うわああああ、まだ死にたくない！！」

テンプレだとか関係ない。今しなければならぬことは死なないように逃げること！

『あ！待てよ、まただ言つとくことが………あーあ。行っちゃった。ま、すぐ分かるだろうしいいか』

手紙のそんな声を後ろに必死に俺は逃げていった。重要なことかもしれない？知るか。生き残るか死ぬか、それが重要なんだよ。

「ハアツ、ハアツ！！ 逃げ切れたか？ フウツ！！
さて、どうするかな」

素手で挑むとかはやべーし、絶対倒せないし。
武器は有ったけどおいて逃げてきたし……。しょーがな
いじゃん。あんな重そうなの持ったままにげれるわけないし。

ドスンッ！！

「んあ？ まさか……キタ！キタキタ！！ なんだこ
れ、どうなってるんだ？ 何でいきなり現れるんだ？」

ドラゴンが追いかけてきたのかと思ったら金属ケースが空から落
ちてきた。やったね、武器ゲットだよ！！

「よし、スナイパーライフルは……. ……とあつ
たあつた。かなりゴツいな。でも、こんなにゴツいなら威力もハン
パないだろうし、技術も眼もある」

早速ふたを開けてスナイパーライフルを取り出す。それを背負っ
て木に登る。

「ととと……. ……。換えの弾持つかないとな。それにちっさ
いのも持っておくか」

少し思い直してケースの中から弾倉と、適当に拳銃を取り出す。拳銃を持ち上げた瞬間、名前と扱い方などが理解できた。

「コレが知識とか言うやつか。便利だな、オイ。しかもなんだこれ、何で二つ同時に使えるんだよ、オイ」

しかもパンパンパンと撃つてみると簡単に扱えるというね、ドラゴンなんか余裕なんじゃないかコレ。

「さあ、やってみようか。」

今度こそ木に登ってスコープを覗く。

が、木が邪魔でドラゴンが見えない。透けて見えないかなーとか思っていたら木が透けてしまった。

………これ、透視？ これ使えばのぞきとかも簡単にできる気がする。まあ、これは後でじっくりとすることに、今はドラゴンを倒さなければ。

「眼を狙えばいいのかな？ 眼が堅い生物なんて聞いたことないし。よし、オツケー」

ちなみにこの狙撃銃、風向きとかは無視していらしい。しかも弾はでかくて、口径なんか50口径なんか簡単に超えている。そんなもんあっていいのかかと思いつながら引き金を引く。

ズドンッという音と共に銃身から巨大な弾が飛び出る。弾丸は一直線にドラゴンの右目に向かう。

陽介が息を無意識に止めて弾丸を追い、右目にあたる。

「ヨシッ！ 仕留めた!!! え？」

右目を貫き脳を破壊すると思われていた弾丸はガキンツという音がしたあとに粉々に砕け散った。スコープを覗き込み、スーパーハイスペックの眼を持っていた陽介は幸か不幸かその様子をしっかりと目撃していた。ただ幸いなことにドラゴンはなにが起きたか分からずにキョロキョロと辺りを見回し、陽介には気づいてないようだった。

「いや、いやいやいやいやいやいやいやいやいや。ないない、ないだろ、それはない。」

どの世界に目が弾丸を受け止めて粉々にする眼を持っている生物がいるんだよ。目って生物の急所だろ？ 急所が急所じゃない生物にどうやって勝ってっていうんだよ」

『だから待ってって言ったのにさっさと逃げるからこうなるんだよ』

「誰だ!!!」

即座に拳銃を握り、声のした方に銃身をむける。そこにあったのは光る紙だった。それを確認した陽介は拳銃を降ろす。

『直ぐにやられないためにここに飛ばしたんだろうが。次からはよく人の話を聴きやがれ。』

あいつにはちよつと改造しててな、弾を気、もしくは魔力で強化しないと倒せないようにしてある。生きていた頃と違う感覚を探せ。そうすりやすぐに見つかる』

「そうだったのか？でもしまったって言ってたよな？」

『キンスンナ』

「でもよ……………」

『キンスンナ』

「でも」

『キンスンナ』

「……………わかった。

生きていた頃と違う感覚だったよな」

木の枝に腰掛け目を閉じて集中する。

集中

集中

集中

集中……………

集中

集中

……………これか？なんか暖かい感じがする。

『お、できたな。……………それは気だな。気づいては自分で知識を漁れ。』

次は魔力だな。さあ、頑張れ』

「片方だけでいいんじゃないの？」

『バカやろうそれじゃ俺ががんばって魔力と気をチート級にした意味がないだろうが。それに両方使えたら便利じゃないか』

お前また変なことしやがって。確かに両方使えたら便利だな。よし、もう一度だ。

集中

集中

集中・・・

集中

・・・・・・集中

っと、これか。うん、気とは違うな。

「おい、できたぞ！」

喜びながら振り向くと激しくピカピカ光る紙。いびきも聞こえて器用にいびきに合わせて点滅している。

「燃やすか・・・」

ケースの中から火炎放射器を取り出して引き金に指をかける。
すりー、ツー、わん、ご………

『待った待った待ったあ！！ 起きたからいま起きたから燃やさな
いでー！！』

「見つけたぞ、魔力」

『お、おおそうか、それじゃ次は弾に気が魔力を込める。』

弾に込める？ こめ方知らないんだけど。あれか。気合なのか。
気合で何とか出来るってやつなのか？ ねーよ。気合で何とかでき
るとか聞いたことねーよ。

『でもよ、込めることが出来ないとのドラゴンを倒せないぞ。分
かってんのか？』

「やるよ。やればいいんだろ」

まずは気からいってみようか。体中にめぐっている気を引っ張っ
てくる感じで弾に込めようとする。

「……………爆発したんだけど」

『そりゃそうだろ。込めすぎだもの』

「どづいつことだよ？込めすぎって」

「弾の許容量を越えたからだよ。次は今込めた1割でいいぞ。大体

そんなに力まなくていいのによ」

「俺、全く力んでないけど？ ただ流しただけなんだけど」

『……マジか。おかしいな、なんでだ？ ちょっと待っててくれ。調べてくる』

それじゃあ武器でも見えますか。

この狙撃銃チートすぎるだろ。装弾数が50発って。しかも銃口が物凄いデカいから人に向けて撃つたら挽き肉になるぞコレ。さらに最大射程距離が30キロメートルとかこの眼と合わせたら見えない位置から理不尽なほど攻撃できるじゃないか。最高だ。あとは使っていないたら分かるだろうし次いこうか。

他の銃器は狙撃銃みたいに魔改造されてないみたいだな。弾倉はチートだけど。他にも壊れないとか、メンテナンス不要だったりする。

近接武器とかもあつたけど、これは壊れないようになってるだけけど、種類が多すぎる。ロングソードからチャクラムとか使う人がいないような武器もある。そうだ。ドラゴン倒した後今度は銃器を使わずに戦おうか。どうせ『ネギま』世界だから戦うこともあるだろうし。

『やっべえよ、やり過ぎちまった』

「どうしたんだ？ 何かまずいことでもあつたのか？」

『いや、なんでもない。なんでもないぞ、うん。』

それじゃさっきの1割で込めてみる。多分それでいいから』

よっしゃ、こんなのすぐに終わらせて外の世界に出てやる！

『あ、言い忘れてたけど1万発連続で成功しないとだめだから。気と魔力1回でもミスったら最初からやり直しな。ズルなんか出来ねえからな』

「え？」

第3話 自由だああああ

「よいしょ……っ。今日の分はこれで終わりか？ なんだかな、最初のころと比べるとなにか心の奥底にジーンとくるものがあるよな」

どうも、俺だ。ちょうど今口の中にもう一つ口がある魔獣？魔物？を倒したところだ。1VS1000で……

あの弾に1万発の課題を言い渡されて500年ぐらいたったのか？課題は1年で終わったよ。結構失敗したけどな。途中で妨害してくる奴がいなかったらもつと早く終わっただろうけど。なにが妨害してきたかは察してくれ。

そんなことより何故500年もたっているかだと？あいつドラゴンを倒した次の日同じ種類の奴を2体つれてきやがった。次の日は4体。その次の日は16体という感じで倍にしていきやがった。さらに同じ種類のを一定数以上倒すと別のに変えてきやがった。

しばらくすると倒すのが難しくなってきたから魔力と気を融合させて体の内外に纏う咸卦法とか言うのを（無理やりというか出来ないと死ぬ）習得させられた。このおかげで体中に武器を仕込んで近接戦闘をしかけたんだがダメだった。簡単に扱うことが出来たけど、俺は肉を切る感覚がダメっぽい。速攻で吐いた。

そこで、どこぞの修得すれば120%戦闘力が向上する格闘技みたいにならばサブマシンガンを2丁持って戦ったら吐くこともなく、今までより早く終わらせることが出来た。

それと、狙撃を完璧にするために気配とかの気付かれる要素を消すために必死に修行していつの間にか気配を消してドラゴンとか魔獣とかの目の前に立っても気づかれぬレベルになっていた。

そんなかんだでそんなわけで俺の武器は銃がメインとなっている。今の装備は腰に短刀2本、片足に拳銃2丁で両足で4丁。そんな中で狙撃銃を背負っている。

ちなみに俺の戦法は気配を消して狙撃もしくは、咸卦法で近づいて片っ端から撃ち殺すという戦法を取っている。

『んーそろそろいいかな?』

「何がだよ。つーかいきなりなんだ」

『そろそろ外に出てもいいかな　っていうこと。強さも結構逝ってるからな』

「誤字があつた気がするが?」

「というかやつとか。いつまでたつても出れないから自分で出て行くとしたらいつの間にか戻ってきてるし、そのたびに質量で押し殺されて死ぬし」

「いままでに出てきた奴らが一気にこっちに跳びかかってくるんだぜ?トラウマになる……」

『誤字にあらずだ。』

「ところで原作をまだ覚えてるか?　覚えてないなら教えてやるが?」

「覚えてない……けど、教えてくれなくていい。無理に原作にかかわるうとする気はないし。」

「というかどうせかわることになるんだろ」

『いいのかそれで?　まあ、かわらない様だったら無理矢理かか

わらすから安心しとけ』

「それどこに安心する要素があるよ!? かかりたくねーよ。あれバグとチートしかないじゃないか。」

あんな奴らがいたら俺絶対に脇役で俺を置いて先に行けみたいな展開になるじゃないか」

『そのために鍛えたんだろっが。刃物を使えないのは予想外だったけどな。』

まあ、頑張ってこい。発狂しない程度に。餓別程度に錬金術使えるようにしてやるから。ほら、あの手をパンっとか指をパチンっつてするやつ。これでチート認定だな』

「またいらぬ物がふえた!? チート認定とかいらねえよ!!」

いや、でも結構役に立つか? サバイバルとかで…… まあいいかなるようになるだろ。」

『それじゃ確認しとくぜ。ここは魔法世界、ムンドゥス・マギクス原作のだいたい1 / 000年前だ。

なにをしてもいいから暴れてこい。』

「ちょ、おま、今度は落ちんのかよ!!」

今度は来た時とは別に真っ黒な穴が足元にできる。当然重力は働いてるわけで……

「やっぱり落ちてるっつっつっつっつ」

『はっはっは、がんばれ』

あいつ次に会ったら絶対殴る！ 顔の原型がなくなるぐらい。そのくらいいいだろう？

「っとお、あぶなっ。常人だったら死んでるんだけど」

やあ、およそ1分間の自由落下を味わってきた俺だ。ようやく、500年の時を得て自由に動けるようになった。俺は今感動している！！

あいつはなにをしてもいいって言ってたけど今のままじゃ、絶対やられる。そんなことが無いようにもつと強くないといけない。もうすでに500年生きてるし、年下にはあまり負けたくないし。そんなことで強くなるう。誰にも負けないように。

銃器を使うものとしては、技術を技に昇華して何人たりとも真似することが出来なく、砕けぬ固い弾丸にならなくてはならない！！

.....だるっ

第3話 自由だああああ（後書き）

かなり短いです。

次の話もキングダムゾンじます。

誤字、脱字などがあれば報告をお願いします。
感想や指摘を貰えると作者が狂喜乱舞します。

第4話 国が出来た！！

やあ、久しぶりだな俺だ。

魔法世界に来て400年。キングクリムゾン！！あと100年で年齢が4桁になっちまうよ。なんか歳を聞かれて実年齢を答えたら精神病患者と間違われて勘違いされるのが怖い。ガクブルもんだよこれは。

それはそうと俺、国を作っちゃったよ。いや、望んだわけじゃねえよ。孤児を連れて歩いてたら丁度いい廃村を見つけて暮らしながら賞金首を狩って金を貢いでいたら村の人口がどんどん増えていつて廃村から村へ、村から街へ街から都市へとどんどん進化していつて……な？

しかもとんでもなく最初のころのやつらの中に天才がいてな、科学の。しかもマッド。そいつ遺伝子をいじる機械を作るわ、核分裂装置を小型化するわ、都市を空に飛ばすわ（ラピタになってしまった）、戦略級の滞空兵器作って空を飛ばしてるわ……な？もう大変なの。何故か知らんが俺が国王みたいになってるし書類とか大変なの。大事なことなので2度いいました。

そんななかんで超最新技術国になってしまいました。技術の流出とか防ぐのマジ大変。もし流出したら原作がハンパなく破壊されるので、超最新技術は都市内部でしか使えません。戦争とかが起こったときは問答無用で使いまくるが、それ以外では使う気はない。

「陽にい何処だー？ はやく出てきて仕事してくれよー 大臣が衛兵を総動員して血眼になってさがしてるよー」

あ、俺は今隠れてます。城の中の空き部屋の中にあるクローゼットの中に隠れています。

俺を探しているこいつはケビンだ。青い髪を短く刈り込み軍服をきた敵ついやつだ。こいつ剣の腕だけじゃなくて頭も回るんだぜ。信じられないだろ？

ちなみに最初の子どもらの一人だ。最初の子どもらは天才マッドのおかげで不老不死になってる。というか自分から進んで希望してた。

それと何故か知らんが俺は『陽にい』と最初の子どもらに呼ばれてる。いつからかは忘れた。

「ここか？ さーて楽しいお仕事的时间ですよー」

ちよ、おま、なんでこつち来るし！？ 気配消してんだぞ？ 認識阻害もかけてるんだぞ？ なんて見つけれる……ってあつー、扉をあけるなああああ！

「見つけたぞ、陽にい。おーい、みんな見つけたぞー！！」

「よ、よう。黙っててくんねーかな？ 頼むからさ」

「ダメに決まってるだろ。さあ、みんなとレッツお仕事だ」

ですよねー。で、なんで首を掴む？ そして持ち上げる？ はっはっは、これじゃあ逃げられないじゃないか。

げっ、大臣が駆け寄ってくる。この人頭がちよつと……いや、ダイヤモンド並みに固いんだよな。逃げたら仕事追加するし。

「陽介様！！ 何故いつもいつも逃げ出されるのですか！！ 探すこつちの身にもなってください！！」

「だいたいなぜ貴方様はいつもいつも……」

「さ、さあ早く仕事をしようか。大臣もそのために探しまわってたんだろ？」

大臣の説教はいつも長いので早めに切り上げるに限る。

「しかし最近暇だな……。この国が出来たときは周りの国がものすごい攻め込んできて1ヶ月はほぼ不眠不休で忙しかったのに最近では技術流出を企むアホの子が忍び込むぐらいで大したこともかもないなあ……」

「やっと来たわね陽にい。今日は結構速かったけど何かあったのかしら？」

「いや、何も無いよ。ちょっと計画を立ててるだけで……」

「どんな計画なの？ おしえてくれないかしら？」

こいつはリーナ。金髪碧眼の美女なのに常に首から目元までを覆面で隠している。服装は動きやすそうな忍者みたいな服。これはリーナが諜報などを担当している部隊の隊長だからだ。この国に攻めるような行動を起こしたらすぐに上げてもらおうようにしている。こいつも最初の内の一人。

「面白いこと企んでんだろ？ どうせ教える気はねーんだろうけど」

こいつはラック。赤い髪に赤い目でローブを着て何を考えてるかわからない顔をしている。役目は参謀ってところだと思う。趣味は人をからかうこと。しかもたちが悪い。こいつも最初の内の一人

「陽にい、資金がなくなった。追加でくれ」

「お前は口を開くとそれだなオイ。もつと喋ってくれないと俺泣くぞ？」

「知るかそんな事。俺は第二に研究ができて第一に陽にいたちと一緒にいれればいいんだよ」

「なんだ？ デレてんのか？ デレてるんだよなへブツ！！」

「デレてねえよ！」

こいつは不老不死に成功して国を空にとばした張本人リーシャ。一人称は俺だけどれつきとした女性だ。長い黒髪に黒目、長身、白衣、完璧なスタイル。

だけどマツド。けれども家族思い。優しい子。

こいつも最初の内の一人。

「それでどんなことを企んでるんだ？ 必要な物があるなら用意するけど？」

「いや、リーシャ今回は要らないよ。ただぶらぶらとさまようだけだから。」

前回抜け出したのはこいつらに負けそうになったから自分を鍛え直す旅と銘うってきつちり20年鍛えてきた。自分より下のやつに負けるのは悔しくないか？ だから鍛えた。おかげで年長者としての威厳が保たれた。

今回はただブラブラするだけだから特にいるものはないの。

それに今回だけのためにランダムに転移する魔法陣を組み上げた。

「だから最近部屋にこもりっぱなしだったのか。納得がいったぜ」

「あれえ？ ラック、俺声に出してた？」

「いや、そんな顔してた」

むう……………、そんなに感情が顔に出やすいのか？

それじゃあ、次の目標はポーカーフェイスの習得だな。こいつにぎゃふんと言わせてやる。

「ぎゃふん。これでいいか？ 陽にい？」

チクショウ！！ みてるよこいつ。

と、無駄話はこちらまでにしておくか。

装備を確認、拳銃4丁、短刀2本、狙撃銃、シールドが張られる指輪、テレポート用のネックレスなどを持っているかと確認して転移陣を起動させる。さっき説明したようにこれはランダムで転移する。しかも魔法世界だけじゃなく、現実世界にも転移可能。俺の国の技術すげー。さらに、この転移陣転移した人のそのまんまコピーを作ります。これで俺はフリーダム。俺の国の技術すげー。

「陽介様あああああ！ またどこかに行かれるのですか！？ 勘弁してください！」

「大丈夫だよ。コピーをおいていくから。政務に支障はないはずだから」

そこで、転移陣が光り、何も見えなくなる。それと共に浮遊感も出てくる。

転移陣が光ってしばらくの間浮遊間がしたあとに、足に感覚が戻る。

目を開けるとそこには金髪の傷だらけで血が出てる女の子を囲む30人ほどの男ども。男どもは多少は怪我をしてるけどどれも致命傷にならないような傷しかない。

.....え？ なにこれ？ 1000年近く生きてきたけどこんな事は初めてです。

なに？ こんな小さな子をいじめようとしてるの？

「おい、貴様何者だ！！ 早くそこをどけ！！ あと少しで仕留め

「られるんだ」

「くそ、新手か！」

「なして両方から警戒されてるの？　これはどうすればいいんだよ

……

「いや、あんたら何してんの？」

「こんな小さい子を追っかけまわして傷つけて。そういう趣味なの？」

「ふっ、ふざけるな！　こいつは真祖の吸血鬼だ、お前はそいつの仲間か！？」

「いや、それ以前の問題だろ。」

「こんな人形を持っている子どもを追いかけまわすとか。頭大丈夫か？」

「こいつっ、退く気はないようだな……」

「おまえらやるぞ！！　こいつを倒せばあとは瀕死の吸血鬼だけだ！」

「なんでこうなるよ？」

「瀕死で壊れた人形を持った小さい子と軽症の男たち、どう見ても男どものほうを敵視するだろ。」

「それに前世もこんな感じだったじゃないか、なんで俺忘れてんだ。ボケが始まってんのか？」

「リーシャに言ってなんか予防策でも作ってもらおうか。でも出てきたばっかだしすぐに戻るのはなんか恥ずかしいし……。でも忘れるのは嫌だし……。」

「なにを考えこんでるんだ！『来れ虚空の雷、薙ぎ払え。雷の斧』！」

「『魔法の射手・連弾・火の23矢』！」

「『魔法の射手・連弾・雷の33矢』！」

「『ものみな焼き尽くす浄化の炎、破壊の主にして再生の徴よ、我が手に宿りて敵を喰らえ。紅き焰』！」

俺が考えこんでいる間に男たちは次々に魔法を放ってくる。即座に咸卦法を発動、瞬動術を使用し金髪の子に駆け寄り指輪を起動しシールドを張る。

仕組みは全く分からないがこのシールドには絶対の信頼を置いている。だって、あの4人がみんな魔法やら科学やらを突っ込みまくったせいで滞空兵器の猛攻を一日受け続けても持っていた俺と、その周りの地面以外が200M以上陥没していたのに俺には傷一つついていなかったから。さすがに砂埃とか爆風でかなりきつかったけど。

そんなシールドを張ったため内部には炎や雷などは一切通らず、傷一つ負うこともない。それを見た見た金髪の子は目を見開いて信じられないというような表情をしていた。

「やったか？ まだ油断はするなよ。相手は真祖の吸血鬼だ」

俺もやらねばなっというのは頭にくるから反撃を開始する。指輪を金髪の子に渡し、拳銃を2丁手に持ち、敵の中に突っ込む。拳銃はデザートイーグルを2丁。約1000年の歳月を得た俺の身体に反動などないに等しい。

立ち込める砂埃の中咸卦法を発動し身体能力が上がった状態で突っ切り、額に銃口をあて引き金を引く。まずは2人。いきなり仲間

が頭から血を流し倒れ、動揺し始める男たち。

「なんだ！？ 何があつたんだ！？」

「まだ生きてたのか！？」

そのまま引き金を何度も引く。これで18人。リロード。瞬時に
行い構える。まだ男たちは何が起きてるか理解できていない。ので
動き回りながら的確に仕留めていく。

30秒ほど経つと人影がなくなり砂埃も収まったので動くのをや
めて、金髪の子に近づく。

「よお、調子はどうだ？ いいわけがない……………か？ 元気そう
だが」

「ケケケケケ、ソリヤドウカナ？ オレハ絶好調ダゼ」

「そりゃよかった。でもそつちの子はどうなんだ？」

首筋に突きつけられるとてもよく斬れそうで、いままで何人も人
を切つて血の匂いが染みついた刀身。それを持っているのは壊れか
けた人形。片腕はとれて傷やヒビだらけなのに……

やめてくれよ、俺君らを守つただろう。なんで首筋に刃物を突き
付けられなきゃならんのだ。

勘弁してください。そこの子も俺を睨まないでください。

「助けてもらったのは感謝するが、何が目的だ」

「そりゃないよ、俺は善意で助けただけ。

むさくるしいおっさんと共闘するのが嫌だつたつてもあるかな？

調子はどうなんだ？ 答えたらどうだ、んん？」

それにしてもこの子どもかで見ることがある。この約1000年
の間か前世か………

どっちにしる厄介事な気がする。

つか、ぶらぶらするために逃げ出したのに巻き込まれるとか…
…。

ホント最悪。

第4話 国が出来た！！（後書き）

無理があつたかもしれない。でも、国を使ってやりたいことがある。

そろそろ設定でも書こうかと思つたり。

バトつてみたけど一方的すぎる気がする
でも自重はしない

第5話 まだ名前はわからない

よう、俺だ。人生つてものは思いどおりに行かないもんなんだな。ぶらぶらする予定だったのになんか巻き込まれた感じがものすごい。こういう時に限って感とか予想は外れまくる。なぜだ？
しかもまだ刃物を突き付けられたままというね。

「で、調子はどうなんだよ。どう見ても瀕死だっただろうが。
ほら、その人形もボロボロじゃないか」

「オレハマダ戦エルゼ」

「私をここまで追い込んだ奴らを瞬殺したやつに自分の状態など教えるか」

「まあまあ、そう睨んでこないでよ。敵意はないって。
俺は火陰陽介。君らは？」

睨んでこられても全く怖くない。10歳くらいの金髪の小さい子に睨まれてもね。
コミュニケーションの第一歩は挨拶と名前を知ることと思ってるから聞いてみる。

「私を知らないのか？」

「真祖の吸血鬼といったら私ぐらいしかいない……はず、な……の、
に………」

「おろ？ だーから、言わんこつちやない。
素人目に見ても瀕死なのにそんなに無理をするから……」

「アア、倒レチマツタナ。オレハコノ通り動ネエシ、アンタゴ主人ヲ頼ムワ」

フラフラしていたかと思うとパタツと急に倒れてしまった。おそらく血を流し過ぎたからだろう。

人形も続くように俺の首から刃物を離す。

急いで治療しないと拙い。人間なら死んでいるだろうが吸血鬼なので多少は違うのだろう。

4次元ポケットみたいになったポケットに手をつ突っ込んで目的のものを探す。

「あー、どこにあったかな？ ここか？ これじゃない……。お、酒だ。あとで飲もう。」

これだな……。あった。

さて、治療といきますか」

まあ、薬を飲ませるだけなんだけど。

リーシャとその助手が発明した物で、DNA情報を読み取って細胞分裂を正確な箇所で適切な分だけ超促進させるとかつんたらかんたら……。

俺にはさっぱりんごだったから聞き流したけど。

ボトルに入ったゼリー状の液体を傷口に塗ってその上から一緒にあつた包帯を巻いていく。

あの二人これでいいって言ってたけどあの二人、マッドだしなあ

……

ものすごい不安。

「こんなもんか。」

今日はここで野宿か。その人形……でいいのか？ 動けるか？」

「人形ジャネエヨ、チャチャゼロダ。」

ソレヨリソナ簡単ニオワルモンナノカ？」

「チャチャゼロか……。コメントのしにくい名前だな。」

治療については大丈夫だよ。俺の国のマッドサイエンティスト二人が核分裂のようなエネルギーで作ったやつだからね。結構前に四肢を切り落とした直後の人間に使ってみたらすぐに腕と足が生えてきたし。」

でも、すぐに死んじゃったけど。マッド二人がいうには細胞分裂回数の限界までいったとかショック死だとか。俺には分からんけど」

「核分裂トカ細胞分裂トヤラハ知ラネエガ、俺ノ国ツテナンダヨ？」

「……………あつ」

しまった。やべえ。まずい、エマーゼンシー。

なんで俺は初対面のやつにはらしてんだよ。」

「チャチャゼロ、君は何も聞いてないし何も覚えてない。いいね？」

「ダガ断ル。タダシ、酒ガアルナラ忘レルカモナ」

「ぬう、この人形脅迫をしようとしているのかっ！ しかもどうやって飲もうと言うのか」

「オレハドツチデモインダゼ？ 酒ヲ出スカ、ゴ主人にバラスカ
ドツチカダ」

名前も教えてしまってるし、密入国されても困るし……。
ムムムムム……

「ええい、300年物だ、持ってけドロボー！！」

「ケケケケケ、イイ判断ダ。 シツカシイイノ持ッテンナ」

「ちくしょう、もう300年くらいおいところかと思ったのに！」

「ソリヤア楽シミダナ」

ちくしょう、あいつらが指輪をくれたときに買ったやつが…
…。あと4本しかないし。

今度5人で飲もうと思ってたのに。
もういい、酒飲もう。そうでもしなきゃやっていられない。

そんなことを思いながら焚き火をはじめ、金髪の子に毛布をかけ
チャチャゼロのそばに座り、酒を飲む。

なんでこんな早くに、まだ太陽が真上にあるうちから酒飲んでん
だろ。

「でよーヒック、あいつ口の中にまた口がある化け物を100匹以上倒させるんだぜ、ヒック。

俺が不死身体質の不老不死じゃなかったらどうするんだよお

それでよー、俺が拾ったやつらはよーやさし　んだよー。俺の生まれた日によ　プレゼントくれるしよ　俺のことを考えてくれるしよーヒック、俺のために不老不死になってくれてんだよーやさしいよなあ！　チャチャゼロオ！！　オエエエエ」

「絡ミ酒カヨ、メンドクセエ……。シカモループデ吐キソウニナルノカヨ」

「チャチャゼロお飲めえ！！　俺の酒が飲めねえとは……。言わね、よ……。な……」

「寝ルノカヨ……。　マアイイカ、酒ガアルシ」

第5話 まだ名前はわからない(後書き)

これで誰と出会ったかはわかるはず。

この子とは次で別れます。そしたらまた時間跳躍します。

多いとは思ってるよ。でも止められない、止まらない、止められない、やめる気がない。

設定ってどういう風に書けばいいんだろ。やっぱりF a t eっぽくかなあ？

また今度飛んだ時間での話を番外編みたいなので書こうかと思ったり。

第6話 助言（前書き）

かっとなって投稿した。反省も後悔もしていない。むしろほめてほしい。年上のおねーさんに。

第6話 助言

「あ、あ、ああああ、頭いてえ、気分ワリイ……………ウゲエエエエ
エ」

「チヨ、オマエ、吐クンジャーネーヨ！」

「大丈夫、吐かないから……………というか吐けない。胃の中に何もなし……………」

よう、俺だ。絶賛二日酔いだ。度数が高い酒をがぶ飲みするんじゃないかった。

そつえばチャチャゼロ達はまだいるのか？

「チャチャゼロ、お前の主人は目が覚めたか？」

「イヤ、マダダナ。」

シツカシオマエガ王ダツテナ。世ノ中ワカンネーヨナ」

「マジで黙っててくれよ？」

「ワカッタワカッタ。善処スル」

さて、することもなし、銃をいじるかな。

1000年近く使ってきた銃だ。愛着もわくし手になじむ。なにより、何とというか、意志を感じることが出来る。どこがおかしいだとか、使ってくれて嬉しいだとか。1000年近く使ってきたら十九神も宿っていいと思うけど、人型になったりだとかは今まで一度もない。

1丁ずつ分解して整備していく。最近は使ってなかったから少し拗ねてる感じがする。

そうすねるなって。これからたくさん使うことになるからさ。拳銃の整備が終わると次は狙撃銃だ。これも分解して整備していく。馬鹿でかいから整備するのもかなり手間がかかる。

「オ？ イイモンモッテンジャーカ、オレニヨコセヨ」

「ふざけるな、誰がやるかよ。これをお前にやったら万が一のときに俺がヤバいじゃないか」

腰にあった短刀を研ごうとすると今まで静かにしていたチャチャゼロがとんでも無いことを言い出した。

本当にとんでもないよ。これ人の骨ぐらい紙より簡単に斬れるからね、これ。やべ、思い出したら気持ち悪くなってきた。もう二度と人を斬りたくない。

「ん、うう……、まぶしい……」

「お？ 起きたか？」

「オイ、ゴ主人ソロソロ起キロツテ」

やっと起きてくれた。このままおいていくのはなんかアレだったしな。

「ここはどこだ？ 私は何でこんな所に……」

「おはよう、調子はどうだ？ うちのマッド達の作品にいままで失

敗はなかったんだけど」

短刀を研ぐのをやめて金髪の子に尋ねる。ついでにポケットに手
を突っ込んで携帯食料を取り出す。

「食べるとしたら肉と野菜どっちがいい？」

「傷がない？ ということだ？ なぜ死んでない？ 呪いをかけ
られて再生が出来なかったというのに……」

「おい、もしもーし、聞こえてますかー？」

酷くないか。命の危機だったのを回復させたに無視とか。座り込
んでうんうん考え込む姿はカッコイイとか、知的だとかではなく、
小さな子がパズルを前にうなづいているようにしか見えないわけで。
つまり、ぶつちやけて言うとか可愛いだけ。

「というか呪いとやらがなかったら死んでなかったのか？ まさ
かこいつも不死身か？」

「なあ、チャチャゼロ、この人不死身のたぐいか？」

「アア、真祖ナンドカラ当然ダロ」

「真祖ってなんだ？ 吸血鬼のか？ 昨日あの男たちが言ってたけ
ど」

「吸血鬼ノダ……」

「そついえばあの変な武器を使うやつは？」

「っ!？」

「……………やあ、元気？」

「うおあいえっ!？いきなり立ち上がったってこっちをむいて睨みつけられる。ちっさいのに何気に怖い。」

「まだ決して調子がいいとは言えない体を即座に動かして、俺から距離をとる。おお、いい動き。」

「だけど、そんなに距離を取られるとかなり傷つく。」

「貴様は!？ チャチャゼロ、なんでそいつの頭に乗っているんだ!？」

「ケケケケ、イイ乗り心地ダゼ？」

「コイツハオレタチニ害ハナイゼ。ゴ主人ガグツスリ寝テンノニ酒ヲカツ喰ラウダケダシヨ」

「だが、しかし、いや……………」

「そうか、かかってきたら潰せばいいのか。今まで通りに」

「やっと気付いてもらえたかと思ったらなかなかエグイことをおっしやられる。チャチャゼロは俺の頭にいつの間にか乗っていた。」

「まあ、気づいてもらえただけいいのかな？」

「なににせよ腹を満たさないとな。」

「君は肉メインと野菜メインどっちがいい？ 魚もあるけどどれがいい？」

「肉だ」

「お？ 肉ね。ハイどーぞ、おいしいぞー」

「……………オイ、これはどうやって開けるんだ」

今度は早く答えてくれた。警戒はまだしてるみたいだけど。

この携帯食料、わけわからん技術を使って賞味期限が半永久になったトンでも食糧だったりする。しかも味は最高級。食材も一級品を使って作られた携帯食料だ。さらに封を開けると温かくなる機能付き。

金髪の子はしばらく開けようとしてたみたいだけど、開けられなくて俺にズイッと突き返してくる。

そうか、分からないのか。差があり過ぎるのを忘れてた。

綺麗に開けて手渡す。

「はい。そろそろ君の名前教えてくんないかな？ いつまでも君って呼び方じゃ君も嫌だろう？」

「エヴァンジェリン。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ。貴様は？」

「火陰陽介。よろしくな。」

それで、なんでエヴァンジェリンはあんなに追われて瀕死だったんだ？ チャチャゼロは君が真祖ということしか教えてくれないんだ」

「んぐ、それは私が、モグ、吸血鬼で、賞金首、ングだからだ」

「行儀が悪いから口に入れたまま喋らない。それにしても吸血鬼

で賞金首　ね。
うちのマッドたちが喜びそうだな。ばらす方向で」

エヴァンジェリン、エヴァンジェリン……………、あ。思い出した。あの報告にあったやつか。

小さいけど100年以上生きてるとか。賞金は低かったからほっといたけど。その次に最高額の賞金首がいたからそっちの印象が強かったし。

それに俺の国は大量に犯罪者が来ようとするんだよ。科学を学ぼうとする人はたいして探らずに入れるから。出るときは嚴重だけど。

「陽介、貴様は呪いのせいで治らなかった傷がどうして治ったか知っているか？」

「それは俺が治した。ただしくは薬品が。けどな」

「私は呪いにかかっていたんだぞ。どうして治る？」

「めんどくさい質問だ。　まず呪いっていうのは今回は吸血鬼としての能力を奪うタイプだったんだろう。俺がやったのは細胞分裂の促進。吸血鬼とは全く関係なくて生きてるものすべてにある自己治癒力を使ったからだろうな」

だてに王なんかやってない。このくらいはすぐに仮定としてあげられる。あくまで仮定だけど。

「だが瀕死の重傷を治す…………　いや、再生させる薬など聞いたことがないぞ」

「そのことは秘密だ。それよりなんで賞金首になったんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・襲つてきた奴らを倒してきたらいつの間にかなつてた」

「そっかそっか。大変だったな。賞金首になつてどのくらいになるんだ？」

「100年くらいだ。なぜそんなことを聞く」

「100年ってことは原作まであと500年くらいか。まだまだだな。」

さて、そろそろ行こうか。放浪をしに。

「んー・・・・・・・・まあ、人生の先輩からの助言の為だな。」

これからさらに苦しくなるかもしれない。だけどあきらめんな。諦めなかつたらなんとかなる。もし、どうにもならなくなったら空を飛ぶ国に行つて俺の名前を出せ。助けてくれるはずだ。」

こいつは賞金首にされたんだろうな。好んで人を殺したんじゃないだろうし。

王としては俺は火陰陽介じゃなくて、ライト・スカイアースと名乗っている。

つまり、火陰陽介の名前を出したら俺のことを多少は知ってるということになるわけ。そうしたらあの4人がなにかするだろう。

エヴァンジェリンはなにか驚いたような顔をしているけど気にならない。久しぶりの大地だ。いつ帰らなければなくなるか分からないし、時間は有限だ。急がないと。

どうせまたあつことになる。今日のところはこれでいいだろう。そう思つて縮地を使う。どこに行くかは適当で大丈夫だろう。

「あ、まで…！ 今のはどっぴりっぴりだ…？ 詳しくはなしていけ
「…！」

「マタウマイ酒モツテロイヨ」

第6話 助言（後書き）

はい、次時間跳びます。

矛盾点がある気がする。見つけた方は報告をお願いします。

次こそは設定をかく。

設定3/7時点(前書き)

書けたぞ。書けた。めっちゃ苦労した。疲れた。

設定 3 / 7 時点

名前 火陰陽介
性別 男
年齢 2000歳近く
身分 国王
容姿 黒髪黒目 髪は短め だるそうな雰囲気
身長175cm 体重70kg
能力
1、眼
遠見、透視、解析など、何でも可能な眼。
2、不老不死
不死身もかねる
3、身体能力の限界突破
頑張れば頑張るほど結果がついてくる
4、近代兵器についての技術と経験と知識
バグ級。銃とか、戦車とか戦闘機とか軍艦とか潜水艦とか知ってて使える。

5、近接戦闘についての経験と技術と知識
バグ級。中国拳法、居合いに北斗神拳なんでもござれ。やるうとすれば偉大なる航路を進む海賊の剣士
やコックの技、フタエノキワミもできたりする

6、脳
眼からの莫大な情報量进行处理できる脳。

武器 1、鉄の箱
リアル4次元ポケット。近代兵器と刃物や鈍器が入ってる。戦車が入ってたりする。見えなけれど陽介のすぐそばにいつもある。弾数無限、刃物は壊れない。

2、狙撃銃

バレットM82に似た狙撃銃。最大射程距離は30km。ゴテゴテしてる。弾数無限

普段の姿

ポケットのたくさんついたズボン、防刃、耐魔、耐衝撃を兼ね備えたベスト、仕込みナイフの入ったブーツ、防刃、耐魔、耐衝撃を兼ね備えたコート

設定3/7時点(後書き)

なにこいつ。これを作ったときの俺どつかしてたのか？

第7話 邂逅（前書き）

ぶっちゃけ最初はこの話が一番書きたかった。でもうまくかけなかった。

第7話 邂逅

~~~~~side~~~~~

「んっふっふっこいつが旧世界の日本の鍋料理ってやつかあ  
じゃ 早速肉を〜」

「あつ、なぎ、おまつ……」

「なんで肉を先に入れてるんだよ！」

「トカゲ肉でもうまいかのう」

カセットコンロに鍋。鍋の中には豆腐や野菜、その周りにはまだ鍋に入れられてない肉や野菜。

赤毛の十代前半の少年、ナギがぐらぐらと沸き立っている湯の上に上機嫌な様子でに肉を入れようとす。

それを見た黒髪で眼鏡をかけ、かわいらしいヒヨコがプリントされたエプロンをつけて片手には野菜の入ったボールを持っている男、詠春が旧世界の日本出身として肉を先に入れることは許せないのかナギにストップをかける。そこに子どももの姿だが随分と古めかしい言葉を使うゼクトが卒倒するような言葉を出す。

「いいじゃねえか、旨いもんから先だよ。ホラホラ」

「バツバカツ！ 火の通る時間差というものがあってだな、まずは野菜を入れて……あーちよっ」

「あーうっせうっせーぞえーしゅん」

詠春のストップを耳に入れる様子もなくひよいひよいと肉をほおりこんでいく。詠春はそれを見て止めようとするがナギの一言により一蹴される。

それを見て今まで黙っていた女のような顔の男、アルビレオがこぞとばかりに発言をする。

「フフ……詠春知っていますよ。日本では貴方のような者を……」

「鍋將軍と呼び習わすそうですね」

「ナベシヨーゲン!？」

「っ……強そうじゃな」

ナギとゼクトが衝撃を受ける。

おそらくナギの頭には鎧兜を付け馬に乗っている誰かが映っているだろう。

「わかったよ……詠春、俺の負けだ。」

今日からお前が鍋將軍だ」

「全てを任す好きにするが良い」

「んー……嬉しくないなー。というか鍋奉行じゃ……?」

ナギとゼクト2人がしおらしくなり詠春にすべてを任せようとするが、詠春はあまり嬉しそうではない。それもそうだろう、將軍と

奉行では全くジャンルが違う。それを分かってて言ったのか分からずに言ったのか、この発言でアルビレオが掴みどころのない人物だとわかる。そこからはワイワイと仲のいい雰囲気があふれだす。そばにいるドラゴンも腹を満たしご機嫌そうだ。

「腹減ったあ……こんなところに誰もいるわけないし……  
前の街でもつと食料買つとくんだったなあ……」

そこへ地面をズリズリと這いながら近づくと背中になにか巨大な棒状の物を背負った姿。巨大な棒状の物は軽く3メートル近くあるが、藍色の長い布でグルグル巻いてあり何なのかはわからない。

「ん？ おまえは？」

「遭難でもしたのかのう」

「お、おい！ 君、大丈夫か！？」

のんきな2人に笑いを浮かべる1人。1人は慌てて這っている人物に駆け寄る。

「おい、何があった！！」

「は……………」

「は？」

「腹減ったあ」

「いや〜悪いねえ、ホントありがとう！！ 1ヶ月なんも食ってなかつたんだ」

「1ヶ月もか！？ お前どういう体してんだ……」

まあ、食べ。たくさんあるからゆっくり食べよ」

「1ヶ月も食べてないとはのう…… お主本当に人間か？」

「まあ、一応人間だな」

陽介が食料を口に入れていなかった期間を聞いて驚きながら山盛りにされた鍋料理を手渡す詠春。  
ゼクトも心底驚いているようだ。

「それじゃ、いただきま………す？」

陽介が肉を口に入れようとした瞬間、突如空から巨大な剣が降ってきて鍋を撥ね、コン口を真っ二つにして飛ばし、地面へ突き刺さ

る。

ナギ、アルビレオ、ゼクトは鍋から飛び出た具をひよいひよいと取っていく。

しかし、突然のことに反応できなかった詠春は頭から鍋をかぶり、陽介は飛んできたカセットコンロが山盛りに持つてある『お椀』に当たり手からこぼれおちる。

「食事中失礼~~~~ッ！ 俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン

！！

いっちょやろうぜッ！！」

「何じゃ？ あのバカは」

「帝国のつて訳じゃなさそーだな」

近くの崖の上で叫ぶ筋骨隆々の男をみてナギとゼクトは食べながら話す。結論はバカということに決まったようだ。

「えーしゅんによつす……むお！？」

「フ……」

フフフフ……

フ……

「食べ物を粗末にするものは……」

「俺のメシ……」

1ヶ月ぶりのメシ……

空から剣が…… 誰かが投げた？

どうして邪魔をする？

判決……」



「どーしたー来ねーのかあ  
来ね ならこっちから……」

詠春は鍋をかぶりそのまま硬直、陽介は地面にこぼれた具をみて硬直。ジャック・ラカンは無きを見てまた声をあげる。

「いッ……  
おほ」

「斬る」

「有罪」

ラカンが続く声を出そうとすると瞬間ラカンの剣が二つに分かれる。野太刀を持っている詠春だ。

陽介は置いてあった巨大な棒状の物の布をシュルッと解く。中から現れたのは巨大な狙撃銃で、銃身が全長の半分近くある。

「おにーさん、そのまま突っ込んで!!」

「陽介なんだその銃は……  
そんなにでかいのは見たことが無いぜ」

「その巨大な銃…… まさか……」

詠春がラカンに斬りかかる。崖を切り裂く詠春の斬撃を危なげなく凌いでいるラカン。そこに詠春を掠めてラカンへと20ほど何かが飛んでくる。それはすべてラカンの急所を狙っていた。

「ちよつ、タンマタンあぶねッ!? 後ろにいるあんたちよつと待てよ!」

「これは肉の分、これは白菜の分、これは豆腐の分、これは椎茸の分……」

全然当たってねえじゃん。それなら………」

詠春と斬り合っていると急所を狙ってくる何か。一気に20ほど飛んでくるのだからたまらない。

陽介は腰辺りで構え、一瞬でマガジン1つ分を消費するほど撃っている。だがラカンはその全てを避ける。それもそうだろう、まだ認識が可能な速度なのだから。だが、認識不可能な速度だったらどうなるか。

陽介はポケットから何かを取り出して狙撃銃に付け始める。

「あんたマジつええな、ちよい待たね?」

「ふざけるなっ!! やる気なら本気を出せ貴様ッ!!」

「へっそーすか。けど4体1じゃねえや5対1だし本気出すわけにはいかんのよね。」

あのなんか飛ばしてくるやつは知んねーけど、あんた達4人の情報はりサーチ済みだぜっ!?!」

陽介が何かを取り付け始め、銃撃が止んでも2人はまだ剣を切り結ぶ。ふざけた様子のラカンが気に入らないのか詠春の剣撃は激しさを増す。

ラカンは懐からカプセルを4つ取り出し投げつける。カプセルからはほぼ全裸の女性が、一人少女がいるが……、飛び出す。

「情報その1。生真面目剣士はお色気に弱い」

「くっ……卑劣な。いや、何のこれしき心頭滅却すれば火もまた」

「できたっ！喰らえ極太の弾幕だ。」

あ、おにーさんやられてるし……インファイトかよめんどくさ」

「え？ ちょ、なにこれやべえ、気合防御！！」

詠春は女性の胸に挟まれ動きが止まったところを何故か狸の置物を頭に落とされる。これにより詠春は戦闘不能。

そんなことをしている間に陽介の取り付け作業が終わり長くなったマガジンを付け、幅が倍以上になり大砲と呼べる大きさとなった銃の銃口から壁と呼べるレベルの弾幕がラカンに向かう。しかも弾の一つ一つがさつきより大きくなっている。

それをみたラカンは初めて防御をおこなう。土煙がもうもうと立ち込めるなかに陽介は狙撃銃を捨て拳銃を2丁手に持って土煙の中に突っ込んでいく。

「うお！？ 何だあれ、向こうが見えなくなったぞ」

「巨大な銃にあの弾幕やはり……」

「アル、どうした？ そんな深刻そうな顔をして」

「あの傭兵剣士は大丈夫かなと……」

おそらく陽介は2000万ドラクマの賞金首です。500年ほど前にあらわれて、何人もが退治しに行きましたが何故か1人も殺さずけが人しか出なかったという話もあります。しかも返ってきた賞金狩りたちは殆どが空中王国へ行ってしまふという逸話もあります。ここ50年は情報が無かったので死んでいると思われていたので

すがまさか私たちが会おうとは」

「空中王国ってあの空中王国か？」

「ええ、アリアドネーと同じように学術都市ですが国の象徴として王をおいている国です。アリアドネーは魔法、空中王国は科学という分野で協力関係にあるそうです」

ナギとアルビレオが話している時も陽介の勢いは止まらない。詠春が戦闘不能になったことで気遣う必要がなくなったのか体術を交えながらラカンに攻撃を加えていく。

「ほらほらほらほらあ！！ 食材の痛みと俺の空腹を味わいやがれえ！！！」

「イテエ！ 脛けるな脛！！ それになにを言いたいかわかんねーよ！！」

「ちったあじつとしてるこのマツチヨが！！  
いい加減…………… 止まりやがれ！！！」

陽介は動き回りながら下半身を集中的に攻撃する。ラカンも動き回り、結構な数の弾丸を蹴りかわす。いつまでたっても当たらないことに陽介は地面を蹴りつける。すると、蹴りつけた場所から光が迸る。するとらかなの足元の地面が盛り上がりラカンを空へと投げ飛ばす。

「又オオオオ！？ なんだこりゃああああ！！！」

「もついつちよ！！ さつさと落ちてこい！！」

「ちょ、なんで地面がこつちに……!!」

もう一度陽介が地面を蹴りつけると今度は地面から触手のようなものがラカンに向け伸びてきて、ラカンをグルグルにまこうとする。ラカンにまきついた地点から土は黒い輝きを持つ物質になっていく。ラカンは抵抗をしようとしたがすでに遅く、一瞬の間に芋虫のように巻かれ空中から地面に向けて落ちていく。

「グハア!!」

「やーっと捕まえたぞ？ 1ヶ月ぶりの食事をさえぎった覚悟はできてんだろうな、ああん？」

「食事！？ あんた食事を邪魔されたからキレてんのか!？」

「ああん？ それしかねーだろうが」

あおむけに倒れたラカンに跨りながら銃口を頭へぐりぐりと押し付ける。1ヶ月もの間物を国にしておらず、やっと食べれると思っただ矢先にお預けを喰らった陽介の怒りは生半可なものではない。実際今はまだ我慢できてはいるが引き金に添えてある指が絶え間なく動いている。

「とりあえずお前はこの状態のまま1ヶ月間食事抜きだ。ま、俺もそこまで鬼畜じゃない。水くらいは飲ましてやるよ」

「1ヶ月も無理だ!」

「ただし、超豪華フルコースを食わせてくれるって言うなら話は別だ。傭兵剣士なんだろ？ あのジャック・ラカンなんだろ、そんな

のかんたんだろぅ？」

「そんなことは簡単だ！俺はジャック・ラカンだからな」

陽介から出る威圧感が大きくなり、ラカンへお願いという名の脅迫をする。ラカンは持ち上げられて気が大きくなったようで、二つ返事で頷く。それに納得した陽介は若干顔に笑みを浮かべながら狙撃銃を拾いナギ達のもとへ戻っていく。

拘束を外されたラカンは肩を振りまわしながら本来の目的であるナギに向けて叫ぶ。

「ナギ・スプリングフィールド！俺とやろうぜーっ」

「俺か？おっさん剣なしでいいのかよ」

「心配すんな俺は素手のほうが強え」

「てめえら手エ出すなよ」

「言われずとも」

そこらからナギとラカンの戦いが始まる。ラカンは陽介と戦ったせいで少し負傷しているがほぼ無傷、対するナギも無傷だった。

戻った陽介にまず声をかけたのは真剣な顔を下アルビレオだった。

「陽介、あなたは2000万ドラクマの賞金首の火陰陽介ですね？」

「ありゃ、ばれてら。そうだよ、俺が最高賞金首の火陰陽介だ」

「そうですか」

「で、俺を捕まえるか殺すかするの？」

「そんなことはしませんよ。ところで、陽介あなたは……………」

アルビレオの顔がさらに真剣さを増して陽介の顔を見つめる。陽介もアルビレオを見つめ返す。

「エヴァンジェリンを助けて賞金首になったそうですが、なぜ助けたのですか？」

「……………なんだそんなことか。子どもが殺されそうになっていても見過ごすなんて非常識だろ」

陽介が後頭部をかきながら当たり前のことのように言う。それを聞いたアルビレオは同志を見つけたかのように目を光らせる。

「ほほう、あなたもですか」

「あ？……………ちげえよ！！ 転移した先があいつが殺されそうになっていただけで、決して俺とお前は同類じゃない！ いいか絶対だ！」

「そんなに隠さなくてもいいではないですか」

「隠してねえ！ つーか子ども助けたらなんでそんな扱いされにやならんのだ！！」

「フフフ、そういうことにおきましょ」

その後半日以上轟音を轟かし、辺りを焦土にしながら戦い続けたナギとラカンの今回の勝負は引き分けとなった。次は絶対に負けねえと2人が言い合いながら別れるときラカン側にいた陽介が思い出したように声をかける。

「あ、そうだアル！」

「何でしょう？」

「ちょっと耳貸してくれ。……から……」

「ふむ、ということはあなたはかなり上の地位にいると考えていいですね」

「あはははは、そこはノーコメントで。あのバグには話すなよ、やっかいごとになりそうな気がするから」

「それは同感です。それでは、また近いうちにあうことになる気がします」

アルビレオはナギ達のところへ戻り陽介はラカンのところへ戻る。戻った陽介は、ラカンをせかすように喋る。

「ほら早くしろよ。超豪華フルコース1ヶ月食べ放題……」



「……夢が広がるな！」

「1ヶ月うー!? そんなの聞いてないぜ!!!」

「そりゃそうだ。いつてねーもん」

「なっ!? だまされた……」

「おーい、陽介! また今度俺と勝負しようぜ!!!」

地面に両手両足をつけ打ちひしがれるラカンを放置していると、ナギが陽介にとってはあまり嬉しくないお誘いをかける。陽介はニヤリと笑いゆつくりと口を開く。

「気が向いたらな」

「それはねーぜ陽介」

またあつことになる6人。今日のところはこれでお別れ。しかしまた近いうちにまた出会うことになるだろう。

イレギュラーがもたらすのは幸か不幸か。それはその時になるまでは誰もわからない。

## 第7話 邂逅（後書き）

ふう、ようやく出会いました。最初思い描いてたのとはずいぶん違う気がする。

アルが説明キャラとしてすごく使いやすかったのは何故か。

ここは違うよって所があれば報告お願いします。

## 第8話 国の名前とか

「うっはー、美味しいなこれ。なあ、ラカン？」

「あ、ああそうだな・・・・・・おまえ食い過ぎだろ！なん半径が俺の身長の上長の上長に隙間なく置かれてあつた料理が30分で三分の1になつてゐるんだよ！」

「いーからいーから、静かにしろって。みんな見てるだろ」

よう、俺だ。いま俺はオステイアの一番高級な料理店に来ている。いやーホントにいいな。景色はいいし、食べてるもんもうまい。

この前はホントひどい目にあつた。強化パーツ使つちやつたし、錬金術もつかつたし。強化パーツは使い捨てなんだよ。なんでこんなやつに使つたんだろ。ああそうか、腹が減つてて自制心を振り切つてたんだな。そういうことにしておこう。

錬金術は使うともものすごい腹が減るんだよな。ま、こんな見晴らしのいいところで豪華な料理を食べれたからいいとするか。

「ところでさ、ラカン。おまえ、あいつら見ててなんか思わなかつたか？」

「思ったことか？・・・・・・  
・・・特にないな」

そうなのか？ラカンとナギは気が合いそうな感じだったけどな。この前別れるときも自分を殺そうとしたのにナギはそのままでおいていくし。

そうそう、ナギといえばアルビレオだな。あいつ本当に頭いいな。別れ際に言ったことと、出回っている俺に関する情報から俺がスカイアースの上部だったことを導き出してたし。

スカイアースてのは俺が王をやってる国で、いつの間にかアリアドネーと連携している学術都市になってた。さらに王が象徴になつてた。でも俺よりうまく国がおさめられる奴がないから実質俺がトップになっているらしい。分身から送られてくる記憶ではそんなことになってた。本当は議会制なんだけどなあ。

話がずれた。ナギとラカンはライバルみたいな関係になる気がする。二人とも同じくらいの実力だし、バカとバグという共通点で気が合う予感がする。

というかゼクトっていう子何だったんだろ。やけに古めかしい言葉を使ってたし、魔力の量もナギほどではないけどかなりあった。詠春さんもすごかったな。崖を一太刀で切り裂いてたし、ラカンがああ4人を出さなかったら結構いいとこまでいけたんじゃないか？ ああ大きな野太刀もすごかったなあ。ものすごい業物だよ。あの野太刀、俺が気を全力で流したら壊れるだろうけど五割くらいまでなら耐えられたみたいだ。普通の人が使つには問題ないだろう。手入れも丁寧にされてたし。

「なんでそんなことを聞くんだ？」

「え？ だってナギとおまえどこか気が合いそうだったから」

「俺とあいつが？ それはねーよ」

「そうか、ま、俺が口を出すことでもないしな。

それにしても旨かった。でも何か足りないな。……………

・そうか、デザートか」

「又ウ!? まだ食う気か!? この金食いが!」

「あ、ここにあるデザート全部お願いしまーす」

「なんだとお!?!」

ふう、あーおいしかった。ラカンの顔色が変わっていくのを見るのはすごい楽しかったな。

「陽にい、すぐに戻ってきてくれない? ちょっとヤバいことになってて」

「うおおえ!?! り、りり、リーナ!? ど、どうした!?!」

すごいビビった。背後に突然リーナが現れて耳元で囁いてきた。おかげで大通りで奇声をあげた変人って言う目で見られてる。恥ずかしい。

「陽にいの分身とラックにも気づかれないうちに入り込まれてたわ」  
「なんだと？ ラックにも気づかれなかった？ まずいな。どこまで入られた？ 戻る手段はあるか？」

「幸いあまり入られてないわ。戻る手段はこれよ」

そういつてリーナがとりだしたのは小さな正方形で白い箱。これは見たことがないからまた新しい発明品か。

早く戻らないと本格的にまぶくなる。情報を見境もなしに持つて行かれるとパワーバランスが大幅に崩れる。いくら並列世界といつても破壊しすぎるのはダメだ。それより前に国がなくなる。

「よし、行くぞ」

箱の上部についていたボタンを押す。すると、まわりの空間が引き延ばされたように見える。

これが10秒続いて空間が元通りになったときにはそこはもう、しばらく帰ってなかったら近未来みたいな見た目になった城の内部だった。

目の前にはラックとリーシャ。ラックは目に見えるほどイライラしていて、近くにいるリーシャは居心地が悪そうだ。

俺が戻ったのに気づいたラックはこっちに駆け寄ってくる。

「陽にい、すまねえ中間辺りまで入り込まれた。誰かが手伝ったみたいだ」

「ラック、もう誰がやったか目処はついているんだろっ？」

「ああ、だけどあいつらは俺が読んでものらりくらりと逃げやがる

「からな。陽にいの特1級の命令が必要だったんだ」

特1級の命令は王だけが出せる命令で問答無用で連れてくること  
が出来る。これが必要だったんだな。ラックがここまで焦っている  
ってことは相当やばいところに目を付けられたな。

それにしてもさすがラックだ。もう見つけてるとはさすがだ。

「よし、そいつを連れてこい」

「はいよ、距離短縮装置、スタート」

リーシャが白衣に手を入れ、中から小さな黒い箱を取り出し、上  
部にあつたスイッチを押す。すると、空間がゆがみ、そこから痩せ  
た人が飛び出てくる。

出てきた人物にラックは近づき、胸ぐらを掴む。

「いますぐに機密データにハッキングをかけるのを止める。これは  
特1級の命令だ。逃げることは許さん」

「な、なんのことですか？ 機密データにハッキング？ 私がそ  
んなことをするとお思いで？」

ラックの声はとても低く、ドスがきいている。胸ぐらを捕まれ、  
睨まれた男は顔がみるみるうちに青くなり、脂汗がにじみ出てくる。  
男は動揺を必死に隠さそうとしながら否定をするが顔の色が全て  
を語っている。

「ああん？ もうすではれてんだよ、さつさと白状しろよ。」

白状しないと・・・・・・・・・・・・・・・・おま  
えのすべてを潰すぞ？」

ラックの声がさらに低くなり、より威圧的になる。

「本当に知りません！ 信じてください！！」

「そうか、あとでじっくり聞く。

おい！ こいつを最下層にいれておけ！」

男はまだ白を切る。ラックの目が男を見下げるようになっていく。

ラックの声で扉の外から鎧ではなく、茶色が中心の配色となっている服を着て、手には銃のようなものを持っている男達が3人部屋に入ってくる。

3人は顔が青くなり、脂汗を流している男を2人が両脇から掴み、立ち上げらせ外に連れて行く。もう1人は油断なく銃のようなものを男にむけている。

「失礼しました」

部屋から出るときに3人は敬礼をして出て行く。

「悪いな陽にい、こんなことで呼びだして」

ラックは頭を掻きながら謝る。

「構わないさ。そろそろ連合と帝国がなんかヤバげな雰囲気になってきたからともと戻る気でいたんだ。少し早くなっただけだ」

陽介は1ヶ月這いずり回っているときに既に消えかかっている記憶から原作を突発的に思い出して、そろそろ帰るかと思っていただけである。



「そうか、今は話はこれくらいにとく。あいつを締め上げにやらんから」

「あまり頑張りすぎるなよ。他の奴らも悲しむぞ」

「はいはい」

ラックは少し早足で部屋を出て行く。

そこでふと思いついたように陽介が声をかける。

「いいもんやるから期待して待ってるよー」

「期待せずに待っとく」

ラックはニヤリと笑って今度こそ部屋を出ていく。

「期待せずにつてなんでだよ」

「そりゃ陽にいが今までにいいもんやるって言ったときに口クでもないことしかおこつてないもん」

「えええー？」

## 第8話 国の名前とか（後書き）

携帯、文字が打ちにくい。

そしてかなり薄っぺらく理解ができなくなる話。

ここらで一つアンケートみたいなのを実施。

陽介の異名みたいな名前。（サウザントマスターとかそういう感じ）

真面目なのでお願いしたいです。

ちなみに作者は『犬に名前をつけるならなんて名前をつける？』

と聞かれ、「わんたろう」と答えて引かれた過去があつたりします。ないなら語呂の悪い名前になります。

誤字脱字、変な箇所があれば報告お願いします。

第9話 王女と皇女、  
迷宮で（前書き）

今日も薄っぺらいお話

## 第9話 王女と皇女、迷宮で

「陽にい、連合と帝国どちらからも手伝ってくれって来てるけどどうする？ 連合はお願いじゃなくて命令だけだな」

「どっちも断るに決まってるだろうが。俺たちが参加したら1日もかからないんだぞ、わかってるのかラック？」

「それに連合は紅き翼がいるだろうが。グレートブリッジでもものすごい活躍したって言ってたじゃないか」

よう、俺だ。ただいま書類処理中だ。後回しにするってやばいな。俺が出ていた間の書類、あり得ないほど溜まってたよ。1ヶ月不眠不休で頑張って処理しました。

ラックから言われた話は正直なにもできない。ナパーム弾より威力が高い弾丸をガトリング並みの発射速度で放つ銃を量産できるし、戦艦についてる主砲なんかフルパワーだったら一発で大陸を消せる威力をもっているんだぜ？ マッドたちに自由にさせた結果がこれだよ！！

「やっぱりそうだよな。でもよ、正義の魔法使いが笑顔で悪者に仕立て上げて、攻撃魔法を打ってくるぜ。どうする？」

「リーシャの作った物の報告書みてないのか？」

「う……。リーシャの書類はなにを書いてあるか解らないから読んでない」

落ち込んだ顔をみせるラック。

しつかり読めよ、有意義なやつもたくさんあるぞ。

「はあ、いいか？ 今は岩がついてるが、この要塞は宇宙や地中でも行動可能だし、完璧なアークロージーになっている。さらに耐衝撃性、対魔性など物理的にも魔法的にも最高峰だ。この星の全ての国を敵にまわしても生き残れる仕組みになってるんだ」

既に宇宙には何回も有人飛行も実施しており、そこから得られた情報より着々と改良されていて、どのような場所でも行動が可能になるようにリーシャやその助手たちが日々手を加えている。

アークロージーとは狭義では生産、消費活動が自己完結している建造物であり、広義では都市に匹敵する人口を内包する建造物である。この陽介達がいる建造物は国に匹敵する人口を内包し、生産、消費活動が自己完結している。

要するにさいきょー！ってわけだ。

「ほら、このデータを見とけ。分かり易く機械オンチのお前でも一発で分かるようにまとめてやったから」

「おお、悪いな陽にい。それじゃ見てくる」

「しつかり見るよ、わからなかつたらリーシャにでも教えてもらえ」

ラックは眉間にしわを寄せながら部屋を出ていく。それを見届けながら凝り固まった体を伸ばす。

「うつ！？」

背骨が……………つ！バキッって言った……………  
……………バキッって。

しばらくの間動けなくなってしまう。痛い。ホント痛い。マジ痛い。しかもなんか背筋がゾクゾクする。さらに呆れたような視線も感じる。

「ん？ 視線？ ふむ、今敵にこられたらどうしようもないな・・・」

「はじめまして、《空中王国への導き》。」

壁紙が剥がれたかと思ったら呆れ顔の白髪の青年が出てきた。え？ 誰コイツ。俺、コイツ見たことないぞ。

「というか、さっき言った言葉がフラグだったのか？ ヤベエ、冗談抜きでヤベエ」

そういうつもりで言った訳じゃないんだけど俺、ホントに今動けない。しかもなんでコツチに寄ってくる。なんで魔力を使おうとしている。

「戦うことを覚悟していたんだけど、その必要はないみたいだね。失礼だけど身柄を拘束させてもらおうよ」

「え？ ちょ、タンマンタンマンマア！ どういうことか説明を希望する！！」

「仕方ないね、あなたは正直言って僕の組織の邪魔だ。だからあなたの行動を封じさせてもらう。でも安心してほしい。危害は加えない。そんな事したら僕らが潰されるからね」

そう言っつて魔法を使う白髪青年。その魔法により陽介の下に水が現れ、その中に陽介が吸い込まれていく。

「これは！？ 転移魔法だと！？ どこへ転移させようか……」

そこで陽介は転移させられた。後に残ったのは白髪青年のみ。白髪青年はどこからか何か書かれた紙を取り出し、先程まで陽介がもだえていた机の上に置く。

『ちよつと出かけてくる！ 半年くらいで帰ってくるから心配はいらないから。』

by 陽介

置かれた手紙は陽介の筆跡で書かれていた。

「こんなものかな。これでいいはず」

白髪青年は呟き、陽介に使った魔法で同じように転移をする。誰もいなくなった部屋にラックが嬉しそうな顔で飛び込んでくる。

「陽にいスゴいな！ 俺にもわかったぞ……あり？ 陽にい？ これは……」

部屋には誰もいないことに気づき、机の上に何かがあるのを見つける。

「またかよ陽にい！？ 帰ってきて1年もいなかったぞ……」

読み終わり悲鳴を上げるラック。その顔にはガツカリと言った表情がうかんでいた。

「いたっ!？ あの野郎絶対に撃ち抜く!! 動けないところをやりやがって。というかここどこよ?」

転移させられて出てきた場所はどこかの遺跡……か?  
あれ、魔力が封じられている? しかも眼が反応しない。どうい  
うことだ?

「お主何者じゃ? どこから入ってきた」

「だれだっ………アリカ王女? テオドラ第三  
皇女? なんでこんなところに? え? どういうこと?」

「どうしたもこうしたも捕まって閉じ込められたのじゃ」

ですよね!。で、テオドラ第三皇女、あなたはなんで閉じ込めら



れてグッスリ寝ているのでせうか？

「そりゃまたなんで捕まるような……。城にいれば安全でしように」

「戦争のことを話し合いに来たのじゃが、情報がもれてこの通りじや。」

「まだ貴様の名前を聞いてないぞ」

「自己紹介を忘れてたな。俺は火陰陽介、よろしく頼む」

「火陰陽介じゃと？ あの銃剣使い『バイオネットマスター』か？」

「これまた随分と古い呼び名が出てきたな。一番追われてたときに銃だけじゃ火力不足で銃の先にナイフをつけてたときの呼び名だったな。」

「戦った後が大変だった。その度に吐くし。手に感触が残るし。」

「それ、300年前の呼び名だぞ。いま呼ばれてるのでいいじゃないか」

「《銃器使い『ガンズマスター』》？」

「そうそう、俺は肉を斬る感覚がきらいなんだ。」

「《絶対狙撃『アブソリュートスナイプ』》？」

「武器の中で一番特徴があるもんねえ、あの狙撃銃。今持ってないけど」

「《魔法の矢一本打つたらフルオートの弾幕が返ってきたんだけど  
W W W W W W W W W W》？」

「誰だそれ考えたやつ!? 絶対ふざけたかネタで考えただろう!  
!」

「《あいつ人間じゃねえ!どこの世界にデザートイーグルを2丁同  
時に打てる奴がいるんだよ!!》？」

「ツツコミに疲れた……………」

ホントに最後の2つ考えたの誰だよ。絶対ふざけてつけただろう。  
……………

「本物か? 本物なら有名な狙撃銃とやらをみせい」

「んー出てこい!!」

……………あるえ?」

あるえ? 銃器が入った箱がない? あれ一応神の力で出来たも  
の筈なんだけど。アリカ王女、そんなバカにしたような目で見な  
いでほしい。

「どうしたのじゃ、出せんのか?」

「ちょっと待って。考えをまとめさせて」

ここは魔力が封じられている。さらに眼も反応しない。あの箱か  
ら銃も取り出せない。それなら錬金術は?

「……………もう食べられないのじゃ……………」

・・・

「暢気すぎるだろこの皇女」

皇女に近づき両手をあわせ、地面につける。イメージは皇女が寝ているところが持ち上がるイメージ。

「あるえ？ 錬金術も使えない？ ということは力が封じられているということか」

俺の力を全て封じられているなんてリーシャでも出来ないぞ。まさか漏れたのか？ あの時漏れた情報をド素人が弄ってこうなったのか？

「アリカ王女！！ 魔力は使えるか？」

「使えるが何かあったのか」

「ははっ、お手上げだ。なんにも出来ない」

俺専用とかどんだけ警戒してるんだよ。ほら、アリカ王女も嘘だったのじゃなみたいな目で見てるし。

「そんな目で見ないでくれると俺はとても嬉しかったりする」

「無理じゃ」

「とほほ・・・」

「はあ、ところでどんな事を話し合いに？」

短いお返事なことで。それにしてもこんな所で会談とはよっぽど聞かれたくないのか。

「話せぬ。無理じゃ」

「そう言わずに……. . . . .  
とりつく島もない。」

「ムニヤア……. . . . .  
ん、お主は誰じゃ？」

「火陰陽介の名前をかたる大馬鹿者じゃ」

アリカ王女さんや、なにを言ってるらっしゃるの？ そんな事をまだ小さい皇女に言ったら……. . . . .

「お主、馬鹿なのか？  
やーい、馬鹿じゃ馬鹿じゃ」

ほらあこうなるでしょうが。

「ここから出たら証拠を見せてやる。覚悟は十分か？」

「ふん、ちょうどいいのじゃ。もうすぐ紅き翼が妾を連れ出しにくる。お主の方こそ覚悟は十分か？」

紅き翼って最近連合を裏切ったとか言われてる人たちが。  
どうりで外が騒がしいわけだ。

突然轟音と共に壁が崩れ落ちる。崩れ落ちた壁の向こうに見えたのは……. . . . . 赤い髪？ 1人心当たりがあるけれ

ど。

「よう、姫さん。来たぜ」

「遅いぞ我が騎士」

「あれ？ ナギ？アル？ ラカン？ まさか紅き翼ってお前ら？」

## 第9話 王女と皇女、迷宮で（後書き）

作者 「うちの陽介君は帝国に所属したり、エヴァンジェリンと一緒にいたりしないのさ」

「あつそ、どーでもいいし、暇つぶしに読んでただけだし。つーか誰がこんな薄っぺらい話を読むかよ」

という夢を見たんだ。自虐的思考回路に絶望した。なんとという自虐。行間のおかしいところはPCが使えるようにない次第、即時編集します。

## 第10話 強制、拒否は不可能、バトルの前

「何だ　これが噂の『紅き翼』の秘密基地か！

どんな所かと思えば……掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してたんだよこのジャリはよ」

「なんだ貴様無礼であろう」

「へっへっんあいにくヘラスの皇族にや、貸しはあっても借りはな  
いいんでね」

「何い？　貴様何者だ」

オリンポス山にある小屋をみた褐色の肌に2本の角を持った少女  
が言い放つ。それを聞いたガタイのいい男が聞きとめそこから言い  
合いが始まる。

それを見て呆れている男たちが3人。

「あのやけに元気な少女が……」

「あの遺跡で話した時であんな性格ってことはだいたい予想出来た  
けどな」

「ええ、ヘラス帝国の第三皇女ですね。して陽介」

「な、なんだよう」

詠春は予想外といった顔で、陽介はムスツとした顔で、アルビレ  
オはいつも通り微笑を浮かべたまま話す。しかしアルビレオは一転、  
顔から微笑が消える。陽介は一步後ずさる。

「なぜ貴方が夜の迷宮にいたのですか？　しかも王女や皇女と一緒に

に

「あースカイアースで仕事してたらなんか白髪の子どもに動けなかったところをやられた。ちなみにアルたちが来たのは俺が落ちてからすぐだな」

「王女や皇女と一緒に閉じ込められるとは……、相当の地位にいるのですね」

「さあ？」

陽介は苦虫を3桁ほど飲み込んだような顔をして答える。答えを聞いたアルビレオはやはりと言ったような表情をする。

「さーて姫さん、助けてやったはいいいけど、こっからは大変だぜ。連合にも帝国にも……あんたの国にも味方はいねえ」

「恐れながら事実です王女殿下。殿下のオステイアも似たような状況で……」

最新の調査ではオステイアの上層部が最も『黒い』……という可能性さえ上がっています」

「そのことだがおそらく全ての国の上層部に入り込んでいる。トッブが操り人形のところもあるんじゃないか？ スカイアースも入り込まれてたいしな。処理したがな。それにこのままだと世界中が乗っ取られるぞ」

ナギがアリカ王女に話しかける。それに便乗して眼鏡をかけた中年の男、ガトウが情報を明かす。それを聞きつけた陽介は自分の国にあったことを話し、最悪の可能性もあげる。



スカイアースに入り込んだ完全なる世界の者は陽介が国に戻り、書類処理をしているときに気づき全てつぶされている。

「スカイアースに入り込むだと!? 馬鹿なことを……いや、何故お前がそんなことを知っている。あそこは科学技術の流出を防ぐために情報管理は世界最高峰なのに……」

「そりゃあ俺がスカイアースの上層部にいるからだろ」

「お主がスカイアースの上層部じゃと? 冗談はほどほどにしておけ」

陽介の内部情報を知っているような発言にガトウが驚愕の表情を隠せず、アリカは夜の迷宮でのこともあり、微塵も信じていない。

「ああ、忘れてたな。よっころしよ……と。これでどうだ」

突如迷宮でのことを思い出し空中に手を伸ばす。伸ばした先を掴むと突然手の中に黒色に光るものが握られる。それを陽介は一切の迷いもなくズルズルと引きづり出す。

「う、うむ。ほ、本物のよう、じゃな」

「おい、おいおい、冗談だろ。なんでこんな所に賞金首の最高額がいるんだよ」

「なんだよ、居てほしくないのかよ。俺は自己防衛以外では何もしないよ」

600年の間に『銃器使い』の象徴となった巨大な狙撃銃。狙撃

銃が陽介の手に握られているのを見たたん、アリカの顔は引きつりガトウの顔には脂汗がにじむ。

「じゃ、じゃがこれではお主が『銃器使い』と分かったただけであつて、スカイアースの上層部じゃとはいえんじゃろっ?」

自己防衛以外では何もしないとされるとアリカの顔の引きつりは若干緩くなり、ガトウも張りつめていた気を緩める。

アリカの言うとおり、巨大な狙撃銃は『銃器使い』の象徴であり、スカイアース上層部の証明にはならない。

「はあ……」

陽介は溜息をついてもう一度空中に手を伸ばしそこからコートを取り出す。更にコートのポケットから虹色に光る腕輪を取り出す。

「それは!?!」

虹色に光る腕輪。それは世界最高硬度を誇る鉱石で作られたものであり、これはスカイアースの政治に関わっているということをしめすものである。

ちなみにこの鉱石、スカイアースの技術力を持ってしても壊れないことより、兵士の装備から家の建築資材など幅広く使われている。

「本当のようじゃな……。まさかこのような者が………  
それにしてもやはりそうか」

アリカは信じられないといった表情のまま呟いた。そしてナギに声をかける。

「我が騎士よ」

「だあらその我が騎士ってなんだよ、姫さん。クラスで言ったら俺は魔法使いだぜ？」

「もう連合の兵ではないじゃろ。ならば主は最早私のものじゃ」

「な……」

アリカはナギに背を向けたまま言い放つ。その言葉にナギは呆然とする。

「連合に帝国……そして我がオステイア。世界が我らの敵という訳じゃな」

話が進むたびにアリカの顔がだんだんと引き締まっていく。それに連れてその場の雰囲気も張りつめていく。

「じゃが……主と主の『紅き翼』は無敵なのじゃろ？」

アリカが振り返る。

場の雰囲気にもまれラカンとテオドラ以外の全員は一言たりとも話さない。

「世界全てが敵 良いではないか。」

こちらの兵はたったの8人。だが最強の8人じゃ」

ナギの正面を向き声を張り上げる。

「ならば我らが世界を救おう。」

我が騎士ナギよ、我が盾となり、剣となれ」

「……へ」

啞然としていたナギは一度眼を閉じる。次に目を開くとその目は覚悟が決まっていた。

「やれやれ、相変わらずおっかねえ姫さんだぜ」

ナギは片膝をつく。アリカは剣を取り出しナギの方に当てる。山の頂から光が差し込み9人が見続ける中誓いは立てられた。それはとても素晴らしい光景だった。

「いいぜ。俺の杖と翼、あんたに預けよう」

「なあ、アリカ王女さんよ。1人人数が多くなかったか？ 誰なんだ？ あ、テオドラ皇女か」

「何を言っておる。お主しかおるまい。テオドラに戦いなぞ出来るわけがなかるう」

「えっ？ いや、俺一応スカイアースの上層部なんだけど」

「お主がおらんでもあの国のことじゃさして変わりはないじゃろう」

俺、国王なんだけど。そこんとこ分かってんのかなあ？ しかも何言ってるんだこいつみたいな顔で見られた。冗談だろ？

「それに世界を救えばお主の首にかかっておる賞金も消えるかもしれんぞ？」

「おし、やる。やってやろうじゃないか！！」

いい加減追っかけられるのにうんざりしてたんだ。いちいち説得して国に返すのがものすごいめんどくさかったんだ。全く話を聞いてくれないし、自分が正義だって言い張るし。

「それでどうするんだ？世界中の人間を潰せばいいわけじゃないんだぞ」

「お主、能筋じゃろ」

「え、わかりやすく教えてあげただけなのに能筋扱いされるとか…  
…鬱だ」

「噛み砕きすぎじゃ。そこら辺りは妾達が調べるから問題ないぞ。能筋はただ言われたとおりに動けばよい」

いや、だから俺は能筋じゃない。これでも理系なんだぜ。特に化学。錬金術には必須なことだ。

「おい、陽介。この前の約束だ！俺と闘え！！」

おいナギ、なんでそんなに目を輝かせてる。なんでもう魔力が溢れ出してる。なんでラカンも目を輝かせてる。タカミチもなんで俺とデザートイーグルを交互に見てる。

「さあ、やるぞ。お前最高額の賞金首なんだから？」

「いや、勝手にされただけであって、ワザとじゃない」

おいアル、ニヤケてないで助けてくれ。詠春さんもウズウズせず  
に……………あんたもか。

「陽介、あとで俺とも頼む」

ええええしゅううううん！？

あ、ちょ、首しまつてる。ギブギブ！！ 息が出来ない！ ギブ  
つて……………いつてる、だ、ろ……………

「ん？ なんで気絶してんだ？」

第10話 強制、拒否は不可能、バトルの前（後書き）

次はバトルだけど期待しないでほしい。短いし。何書いてんのか良  
く分からなかった。

腕輪のところは忘れてくれたらうれしいなあ

第11話 チートの実力が垣間見えたりする（前書き）

何がしたいのか全くわからないお話の巻



## 第11話 チートの実力が垣間見えたりする

よう、俺だ。あれだな、気を失うって怖いな。気がついたらナギと戦うことになってるとか。

というか、おまえらお尋ね者だろ、いいのか？そんなに派手にして。気付かれるぞ。

「さあ、陽介！！ やろうぜ！」

「えーやらなくていいじゃん。めんどくさいしさあ」

まずそのやろうぜは闘うことなのか殺し合うことなのかまずそこを決めようか。

ラカンもうずうずしてんじゃねーよ！

「えーと、百重千重と重なりて走れよ稲妻、千の雷！！」

「ばっか野郎！！ こんなところで大呪文ぶっ放してんじゃねーよ！！」

指輪をスイッチを入れて……ない！？ あ、ポケットに入れたままだった。

ヤバい、間に合わない。雷直撃コースだ。轟音を立てて無数の雷が陽介に直撃する。

「アミロバツ！？」

「来たれ虚空の雷薙ぎ払え、雷の………あり？ 喰らったか？」

千の雷をもろに食らい奇声をあげた陽介に気付き、ナギは追撃の手を止める。土煙が立ち込め陽介の姿は見えなく音もない。なのでナギは倒したと思う。直撃したのが見えたのだから仕方がない。

「最高額の賞金首もよわつちいな。これじゃ詠春のほうが強いぞ。なあ、詠春」

「だああれがよわつちいだつて？ ああん？」

「いつの間に！？ うお、いきなり撃つてくんじゃねえ！！」

いつの間にかナギの後ろで頭に銃をにこやかに笑いながら突き付けている陽介。ナギは陽介から距離をとろうとして離れたところを撃たれる。しかし弾丸はナギのローブを掠るだけに終わる。

「お前がいきなり千の雷をうつてきたんじゃないか。いきなりあれはダメだ。一回死んだぞ？」

「お前、吸血鬼か？」

「んなわけないじゃん。ああ、でも吸血鬼の真祖って言い張るやつに会ったことはあるな。」

まあ、俺はDNAをいじってるからな。滅多なことじゃないと死なないよ」

「ふーんそれじゃどんな事をしても死なないんだな」

陽介とナギ以外は遠くではなれているので他のメンバーには全く聞こえてない。

陽介が死ぬことが無いとわかったナギは杖を握る手に力を込める。

「ああ、死なないな。けどな……………」

陽介は空中へ両手をのばし、掴む。そして引きずり出す。手には毎分3000発を撃ちだすM134ミニガンが両手に握られる。そして、銃身をナギに向け引き金を引き叫ぶ。

「こつから先は！！ ワンサイドゲームだ！！」

そんな声とともに砲身が回転を始め弾丸を吐き出し始める。

「なんだそりゃ！？ 反則だろ！！」

「はっはっはっはっは、楽しいね！ ナギ君よオ！！」

「楽しくねえ！！ 障壁突破しやがった！？」

いつの間にかミニガンの砲身が魔方陣を4つ貫いている。魔方陣の効果は2つが障壁突破、1つが威力強化、もう1つが弾速上昇の効果がある。この魔法陣を通り抜けることにより、弾丸すべてに効果が付属される。

障壁突破の効果により弾丸はナギの障壁は簡単に通り抜けナギに向かう。ナギは必死にそれを避け続ける。

「いいね、いいねエ！ ほらほらア！！ どう したア、サウザントマスターとやらはその程度かア！！」

「なっ………… めんじゃ、ねえ！ 雷の斧！！」

陽介の挑発にナギはのり、さらに激しくなり音も大きくなる。

「フッフ、楽しそうですね、あの2人」

「いや、ダメだろまたラカンの時みたいになるぞ!? 最高額の賞金首だ山が吹っ飛ぶぞ!？」

遠く離れたところで眺めているアルビレオの発言に詠春がツッコむ。山が吹っ飛ぶことなど滅多にないが、陽介はミニガンを投げだし、手榴弾からTNT、あげくの果てにはクラスター爆弾やナパーム弾をそのままナギに投げつける。ナギはぎりぎりですべてを避けているのでそれらすべてがナギの後ろで爆発し、木々が焼け、地面がえぐれる。

「ああああ……………おまえらヤメロオオ!!」

「ナギの野郎楽しそうだな。よし、俺も行ってくる!!」

「アホか!! お前ら絶対馬鹿だろっ!!」

「ラカンか、いいところに来た、手伝え!」

「ラカンに詠春、おまえ達もやりたいのかア? いいぜエ、みんなまとめてぶっ飛ばしてやるぜエ!!」

「なっ!?! いいいや、おお俺は違うぞ!?!」

「ほらア、クラスター爆弾5発だアしっかりたえるよオ?」

「ぶるああああ!!」

ラカンが飛び入り、詠春がラカンを止めるために追っかけていくとなにを勘違いしたのか、詠春も敵と認識する陽介。さらに激しくなっていく一方で他のメンバーはといえは。

「ふむ、やはり最高額の賞金首と言うだけのことはある。あの3人に引けを取らんとは。いや、寧ろ手加減をしておる」

「600年の経験は伊達ではないですね」

「また馬鹿が増えた。今度スカイアースの胃薬を特注で頼むか。胃に優しいのもあるか？」

「おおーすごいじゃ、ドカーンとなつてバーンとなつておるのじやー!」

ゼクトとアルビレオは呆れながらも感心し、ガトウは自分の胃に少しでも負担を無くそうとし、テオドラは興奮状態で、もう一方とは正反対にゆつたりとしていた。

「ほらほら、次はア水素爆弾逝つてみつかあ!？」

「それはマズイ!! 「冗談抜きで止めてくれ!!」

「ちょ、お前なんてもん持つてんだよ!!」

「冗談だア、そんじゃ、スカイアースの主力兵器のオ『バズーカ並みの威力でマシンガン並みの対地空両用兵器』のお披露目だア!!」

「ネーミングセンスねーなオイ!!」

第11話 チートの実力が垣間見えたりする（後書き）

あるえ？　なんで一方通行っぽくになってる？　．．．．．  
．．．．．よし、爆発物を持ったら極度の興奮状態にな  
るっていう事でどうだろう。

そして、薄っぺらい。

次は番外編になる可能性も無いことも無いかも知れなかったらいい  
なあ。

## 第12話 カオス

「はい、何か言い訳はありますか？ 聞くだけ聞いてあげますよ？」

「アル、俺は巻き込まれたただけだ。ラカンを止めに行っただけだ！」

「そうですか、途中から陽介を挑発して弾丸を切っていたでしょう？」

「グツ、言い返せない……」

「やあ、正座中の俺だ。ナギ、ラカン、詠春と闘ってたらアルがキレた。さすがに長過ぎたらしい。いや、まあ長いと思うよ3日間ぶつ通しだなんて。でも楽しかったからいいじゃないかなんて馬鹿なことは言わない。だってアルの額に青筋が浮かんでるから。」

「闘ってたら突然重力魔法が飛んできてそのまま説教タイムに突入だった。だから今も重力魔法がかかっている。正座してるのに。ちなみにこの説教、ぶつ通しで12時間だ。足の感覚が無い。」

「ナギは何か言うことはありますか？」

「楽しかったぜー！」

「はい、重力5倍です」

「ちょ、……………足が、足があっああ！」

「マジ怖い。ボロボロなのに目を輝かせて答えるナギに重力魔法をさらに5倍とか。あ、青筋が増えた。」



なんか時間を飛ばせるような物が無いかな？ …………… ないよな、うん。常識で考えよう。

そうだ、3日前なんでタカミチがこっちを見てきたのか考えよう。決して現実逃避ではない。

まず、タカミチはガトウの弟子らしい。師匠って呼んでたし。たしかガトウは居合い拳と威卦法の使い手だったよな。ということは、居合い拳と威卦法を習ってるのか。となるとなんで銃を使う俺を見ていた？ 近距離と遠距離じゃ闘い方が随分と違う。ならなんでだ？ 両方極めれると思ってる、それとも、オールラウンドに戦えるようにするというのか？ いや、ちよつと待て。居合い拳は中距離でも使えたはずだ。ならばなんでだ。こんがらがってきた。

「ラカンは……………」

「ぐううううう……………」

「10倍です」

「ふぬるばあああああ」

ラカン寝るなよ。アルの雰囲気かマズイだろうが。しかも10倍とか非力な俺だったら潰れるな。うん。一瞬で、ミンチになるな。すぐ復活するけど。

「さて、陽介は……………」

「俺の出来ることなら何でもするから許してください、お願いします」

え？ なに、卑怯？ 知ったこっちゃない。俺が無事だったらい

いんです。

「何でも……………ですか」

「ああ、俺に出来ることならだけどな」

スカイアースの技術力を持ってすればだいたいのことはできる！  
出来ないなら出来るようにするまでよ！！

「それなら、スカイアースへの入国権を」

「え、そんなもんでいいの？ アルのことだから、犯罪系のことか  
とってた」

マツドの感じがするし。あれ、アルの青筋が増えた、なんで？

「あなたは私をどのような人間だとおもっているのですか」

「えーっと、目的のためなら手段は問わない小さい子に変な視線を  
向ける人？」

「……………」

あ、地雷踏んだ。

「20倍。私が誰にそんな目を向けましたか」

「て、ておどら、皇女、マジで潰れる、潰れる」

「30倍。ジャックと遊んでいるのが微笑ましいとっていただけ

です」

あ、おま、600倍とか死ぬわ。あ、死んだなこれ。

「うおおおお！？陽介潰れたぞ！？」

マシで？ ナギ、そんなに驚くなって。すぐ復活するから。

「陽介さん、陽介さん、ちょっといいですか？」

「お、おお？ タカミチか。お前よく吐かないな。どうした？」

辺りには俺の血がびったりついてる。これは俺でもきつい。

「もう吐きました。陽介さんが潰れたときに。それより、僕に銃を教えてくださいー！」

また、なんで銃を。本当にタカミチの考えが分からない。

「いいけど、ガトウはいいって言ったのか？」

「はい、手段は多ければ多いほどいいって言ってたので」

そんなにホイホイ極められるもんじゃ無いけど、見てみればいいか。

空中からベレッタ92FSを取り出しタカミチに渡す。

「わ、結構重いんですね」

「それ、軽い方だぞ。ほら、口開けてないで両手で握って腰を落とせ。深呼吸をして落ち着いてあの木を狙って好きな時に撃てばいい」

ポツンと生えているまだ若い、人1人腕で抱え込めるような円周の木を指さす。まあ、このくらいなら弾倉10本も撃てば半分くらいは当たるだろ。

「いきます!!」

タアン!!

「おしいな、掠っただけだ。もう少し腰を落とせ」

「……………アハッ」

タタタタタアン!!

「あははははははははははははははははははははははは!! 気持ちいい! 気持ちいいよこれ!! きゃははははははははははははははははははははははは!!」

……………え?

「きゃははははははははははは！　陽介さんのこの銃借りるね！」

「あ、おい！！　そんなもん片手で2丁撃つたら……」

ガガガガガガンツ！！

「あはあ、気持ちいい！！　はははははははははは……！！」

「え？　待てよ、なんでなんともないんだ？」

デザートイーグル2丁を俺から奪ったタカミチ。そして、そのまま撃ち続ける。とうかがデザートイーグルになってからはさつき指をさした木に全弾命中なんだけど。

え？　トリガーハッピー？　しかも重度。マジかよ。

「おい、陽介何があったんだ！？」

「あ、ガトウか。あいつに銃を撃たせたらああなった。重度のトリガーハッピーだ」

「おいおいどうしたんだあいつ？　やつちまっていいのか？」

笑い声を聞いてきたガトウに説明していると若干ワクワクしながらナギが聞いてくる。あ、ラカンもワクワクしてる。まあ、簡単に止めれるもんじゃないし、やってもらおうか。

「殺さないようにな。半殺しまでは治せるから」

「おっしゃ！！　ラカン、いくぞ！！」

「おうよ!! 『羅漢適当に右パンチ』!!」

「はははっはははははは!!.....ん? いきなり攻撃してくるなんて危ないじゃないですか」

え? 避けた? え、マジで? まだ咸卦法も出来てなかったタカミチがだと? ラカンは啞然としてるけどナギはそのまま突っ込んでいく。あ、まずい。

「おいナギ、とまれ!! やられるぞ!!」

「ダメですよナギさん。突っ込んできたら」

「なっ!? グウツ!!」

ナギがタカミチを殴る直前にタカミチは体をずらして避けてナギの腹に蹴りを入れやがった。吹っ飛んで仰向けに倒れたナギに向けて引き金を引く。弾丸は頭、腕や足ギリギリのところを撃ちこまれる。そこから銃床でナギの頭を殴る。

「んなアホな..... あいつただの身体能力だけでナギを倒しやがった」

「おい、次はラカンだ..... もつやられたな」

「ああ」

ラカンには容赦なく実弾を撃ちこみやがったよ。

「おい、タカミチ落ち着いて、どの銃をおろせ。こっちに向けるな」

「今の笑い声はなんですか!?!」

「アルビレオさんも参加ですか？ 今僕はすごく気持ちいいのでなんでもしますよお」

真剣な顔をしたアルが駆けつけてくると、タカミチはさらに戦おうとする。

「陽介、なにがあつたんですか。ナギとラカンが倒れているとは」

「銃を握らせたらああなつた。トリガーハッピーだったとは思わなかった。反省はしていない、後悔はしまくってる」

「そつだ陽介、弾切れを狙えばいいじゃないか」

ガトウさんや、そんなに簡単なことじゃないんですよ。俺が取り出したのはあの神からもらった鉄の箱の中から。これすなわち弾切れはない。

「あー、すまん、弾切れはない。絶対に。なんであれを渡したんだろ。見習いがよく使うのを渡せばよかった」

「なにやってるんだよ！ それじゃあどうやって止めるんだ？」

「気絶させるしかないよなあ。そつだアル、あいつの動きを止めれるか？」

「ええ、可能です。自分で抑えることは無理ですか？」

「自分で抑えるのは無理だな、絶対に」

「よし、アルが動きを止めて、俺が罠で突っ込む。陽介はどうにかして気絶させてくれ」

「あははははははは！　ん？　そろそろいいですか？」

話しているときに襲いかかってこないと思ったら、そこらにある木にむかって撃ちまくってた。20本ぐらいが穴だらけになって倒れている。マジ怖ええ。

「いきます」

「アルビレオさん、酷いですよ、重力魔法を使うなんて」

俺はタカミチから一気に距離をとり、アルが重力魔法を使い、タカミチの動きを止める。チラッとみるとタカミチに特に変化はない。マジですか、そうですか。重力魔法が効きませんか？

「ガトウ、こっちの準備は出来たぞ！！」

「よし」

1キロほど離れた木の上から狙撃銃のスコープを覗き拳銃に狙いをさだめ、ガトウに念話を送る。

ガトウは両手をスーツのポケットにつっこむ構えをとる。

「アルビレオさんの重力魔法と師匠の居合い拳ですか。ちょっとキツイですね」

「タカミチ、銃を離せ。今なら戦わなくてすむ」



「やだなあ師匠、ちょっとキツいだけですよ。こうして、魔力と気を……………」

は？　なんでタカミチがこんなことできるんだ？　右手に魔力、左手に気を出している。しかも量が完璧に等しい。全くズレがない。

「こうすれば！　ほら、出来上がり」

タカミチの周囲が光り出す。咸卦法が成功した証だ。

「おい、ガトウどうなってるんだ？　あいつ咸卦法を使ったのか？」

「い、いや、使えなかったはずだが……………」

「ほら、師匠よそ見してる暇はあるんですか？」

「なっ!？」

タカミチがガトウにむけて拳銃を撃つ。しかも、一瞬で全ての弾を撃ち尽くし、リロードを行う。

ガトウは突然のことに驚き回避が遅れ両足を撃たれ動くことが出来なくなる。そこから一瞬でガトウに近づき銃床で頭を殴ることでガトウが気絶をする。俺の眼じゃないと捕らえられない速度だった。多分ガトウやアルには何が起こったかわからなかっただろう。

「グー!!」

「ちつくしょう、あいつどうやって1キロ先からの狙撃を避けてんだよ!」

俺はさつきから絶え間なしにゴム弾を撃ち続けているが全く当たらない。避けるであろう場所に撃ちこんでも避けられる。それにガトウが動けなくなった。次に狙われるのは多分アルだ。アルの重力魔法を解いたらヤバいかもしれない。例え咸卦法を使っていたとしても重力魔法の中でこの速さだ。解いたら俺でも見えなくなるかもしれない。アルの近くに急いで戻る。

「アル、さがってる！ 絶対に当たるなよ！」

「本当に、これはっ、どういうことですか！！」

瞬歩で近づき殴る。タカミチは右手の銃で防ぎながら左手を体の陰に隠しながら脇を狙ってくるので飛びのいて避ける。というか、アルの重力魔法がマジきつい。600倍まではいかないけれどそれに近い倍率だと思う。

「そういえば、陽介さんは『銃器使い』なんて呼ばれてるんですけどよね」

「……………で？」

タカミチが話しかけてくる。話しかけてくる間にもあいつは殴ったり撃つたりしてくる。ガトウを師匠と呼んで、居合い拳も習っているからか、かなりパンチに威力がある。

殴ってこようとすれば蹴りで俺に当たる前に攻撃を加え、銃で撃つてくれれば弾丸同士をぶつけて止める。手加減はしているがここまですべて付いてこれたやつはそんなにいない。

「『銃器使い』ってこんなに弱かったんですね。銃器も拳銃と狙撃銃しか使わないし、この僕に押されてるんですから運だけのとんだ

ハッター野郎だったんですね」

「……………」

「事実で何にも言えないんですか？　ねえ、ねえねえ」

ほう、今まで運だけで生き残ってきたと？　ふざけているのかこいつは。たかが弾切れなしの銃器を持っただけで調子づきやがって立ち振る舞いをみてもまるっきりの素人だ。かあああなああああいいいい手加減してんのがわからんとは。実力が無いとあいつらは守れなかったんだぞ。外を出歩けばあいつらはさらわれるからな。考え込むことで顔が下を向く。

ガトウの弟子？　知ったことか、師匠をいきなり攻撃するやつなんてガトウも必要ないだろう。あ？　なに、原作？　記憶にない。それなりに重要なポジションだった気がせんこともないが、調子に乗り過ぎだ。とすれば。よろしい、殲滅線だ。意義反論は認めない。

「ハハハハハ……………」

「全部事実で笑いが出てきたんですね。それになんて下をむいているんですか？」

「ハハハハハ……………ハッハッハッハッハ。　なんというかな、お前良かったな」

ゆっくりと顔をあげる。頭に來すぎて逆に頭が冷えてきた。

「お前、肉片すら残さない」

「え？　うわわわわ！」

ノーモーションで威卦法で使用、ミニガンを左手に、右手にはバズーカ並みの威力でマシンガン並みの対地空両用兵器を2つ持つ。左手のを撃った後、後ろに回りこみ右手のを撃つ。

「1000年間、生き残ってきた実力を見せてやる」

鉄の箱の中にある銃器を全て取り出し半分を俺のそばに待機させる。もう半分はリーシャに組み込まれたAIで魔力を込めれば全自動で動くのでタカミチを追い詰めさせる。

タカミチの予想回避ルートを割り出しその場に移動し蹴りつける。1秒間に50発。まだまだ行けるみたいだな。

そのまま続ける。

「ガフツ！ あはは、そんなこと出来るんですか？」

「黙って蜂の巣になっとけ」

「おや、アリカ様どうしかったですか？」

「どうしたもこうしたもあるかアルビレオ！！ なんじゃこの騒ぎはー！」

あれから10分、ずっといたぶり続けてる。逃さず殺さずじつくりと、そろそろ気がおかしくなるころだ。10分間もただの人間が弾幕から避け続けていたらおかしくなる。

王女が来たみたいだけど知らん。

「貴様らはなにをしておるのじゃ　　!?!」

「お、アリカ王女か。ただの処刑だ……メルポツ!？」

「今度はアリカ王女様が相手をしてくれるんです……ヌルポツ!？」

王家の魔力すげえ。ビンタで6回転半もしたよ。マジいてえ。どうなってる？ あ、タカミチは両手プラスアツパーとか。

「妾達は逃亡者じゃろうが！ それを自分からさらけ出してどうするのじゃ!?!」

「いや、でもタカミチがバカにしてきたから……」

「やかましい!!　正座!」

「はい!？」

「正座をしるっておるのじゃ、わ・か・ら・ん・か？」

「イエスマム!!」

半端じゃない強制力がある。思わず正座をしてしまった。まさかこれも王家の魔力の効果か!?　んなわけねーよ。

「だいたい貴様らはもう少し静かに動けんのか。妾達は……」

「ここから1時間みっちり叱られることとなった。」

「なんで俺だけ……」

「話を聞いておるのか……!」

「聞いてます、はい!」

「なんであいつ怒られてんだ?」

「さあ、どうしてでしょうねえ」

「う………陽介さんは……」

「タカミチお前も一緒に怒られる……! お前のせいで俺が……!」

「え？ なんの「こと」ですか？」

第12話 カオス（後書き）

カオスが書きたかっただけなんだ。そしたらタカミチがトリガー  
ハッピーになっちゃった……テヘ  
そろそろ番外を入れなきゃ……………



### 第13話 敵末端施設突入

「あーやっぱりか。おかしいと思ったんだ。妖刀ならぬ妖銃になつてら」

トリガーハッピーなだけでタカミチがあそこまでなるとは考えにくかったから、どこかに原因があると思って調べていたら見つけた。タカミチに渡したベレッタ92FS、こいつが原因だった。一番追われてたときにナイフを取り付けて殺してたから血がべつとりと付いていたやつだ。血は拭って、整備はしてたけど怨念とかは被えなかつたみたいで、怨念とか恨みが固まってこの銃にとりついてるッぽい。一般人が使えば一瞬で廃人コース一直線だ。まあ、タカミチは多少は一般人離れしてたんだろうな。けどすごいなこれ。使えれば限界を超えた力や技術を使えるようになるな。その後リバウンドで廃人が死だけど。

「陽介どうしたんだ、悩みこんで」

「詠春か。これが憑かれてるんだよ。特大のやつに。被う方法とか知らないか？」

「あーそういうのは俺はできないんだ。本山に行けば出来る人がいるかもしれないが」

「そうか、じゃあ使わなきゃいいや」

詠春は被うことが出来ないとか言うので箱の中に突っ込んでおく。これが一段落ついたら詠春について行って被ってもらおう。

「なんでできないんだ、この前はできてたじゃないか」

「無理ですよししょー、僕はできたことなんかないですよ」

「どうしてそこで諦めるんだ。一度できたんだから出来るだろう」

タカミチはたいした異常もなく、ガトウにしごかれている。ガトウ、少し頭にきたんだな。いつもより

厳しい。まあ、俺にも責任があるって言えばあるけど我、関せずの方向で。

「みなさん、次のターゲットが決まりました」

「やっとか、待ちくたびれたぜ」

「今度はあばれていいのか？」

「陽介、お前が暴れたらシャレにならんからやめてくれ」

箱に呪いの銃を突っ込んだ時、アルが情報を持ってきた。ナギは前回留守番だったから今回は暴れまくるだろうなあ。

アルが机の上に地図を広げ、集まってきた俺たちに場所を示す。

「いつも通りトップは捕獲をお願いします」

「おっしああ！！ 暴れるぞ！！」

「き、緊急事態！ 敵がきたぞ！！」

「応戦しろ、たかが3人だ！！」

「ありったけ魔法を放て！！」

「『雷の斧』！！」

「オラア！」

石造りの建物の中で爆音と共に雷が敵を直撃し、気合いでパンチが飛び、銃声と共に弾丸は壁を跳ね回り一気に敵を殲滅していく。

「おまえ達、暴れすぎだ、ここが崩れる」

「安心しろって陽介。俺だけは助かるから」

「ナギ、お前はアホか。俺はまだ死にたくない」

「陽介は死なないだろ。それに俺がアホならお前はバカだな！！」

「ああ、誰がバカだとゴラ」

「やんのかゴラア？」

ナギと陽介が攻撃の手を止め、額をぶつけ合わせて睨み合う。その間、敵の攻撃はラカンに集中するがものともせず敵を粉碎していく。

「いいのかよお前ら、俺が全部貰っちゃまうぜ」

「おう、鳥頭。倒した数で勝負しようぜ。負けたら罰ゲームな！！」

「上等だ、死んだ魚の目！！ あとでなしとか言つなよ！！」

「誰が死んだ魚の目だ、ゴラア！！」

「誰が鳥頭だ！！ 姫さんと同じようなことを言つな！！」

ラカンの忠告に陽介はナギに提案を出す。ナギは喧嘩上等の意気で提案に乗る。そして言い合った悪口によりまた睨みあう。

「というか、俺らは陽動だろ、しっかり暴れるよ！」

「はっはー！ いくぜエ、ちったあ足掻いて見せるよオ」

「絶対にこいつ殴る！！」

陽介は手榴弾を大量にとりだし投げる。轟音と火が同時に上がり、悲鳴も上がる。ナギも負けじと魔法を次々と放つ。

この作戦、ラカンがいった通りこの3人は囷だ。この3人が暴れまわり敵の気を引く。当然敵は侵入者を排除しようと戦力を目立つ所に投入する。すると必然的に指示を出す人間の場所は戦力が少な

くなり突破もしやすくなる。そこを影の薄くなってきた詠春が潜入し護衛を無力化、トップを誘拐ということになる。3人は力加減をすることなく暴れることが出来るので、ここぞとばかりに暴れまわる。

「ナギい、お前今何人倒したよ!? 俺は150人だぞ!!」

「くそっ! 100人だ!! とういかお前卑怯だろ、ノーリスクでそんなもんポンポン取り出せんだから」

「俺は300人だな」

「ラカンも参加してんのか。なんだその数はどうやりやがった!？」

「そりゃあお前らがガンくれあつてるときに?」

「もう勝てねえじゃねえか! あと100人もいねえぞ!？」

「残念だがもう終わりだ」

肩に脂肪が大量に付いた男を背負った詠春が3人の後ろにあらわれる。その顔はやはりこうなっていたかというような顔で、こうなることは予想していたようだ。

「ちくしょう!! 勝てなかった!!」

「こんな筋肉に負けるとは、1500年の生涯で一番の不覚っ!!」

「さーて罰ゲームは何にしようかな」

「お前たちはやく舵出するぞ、ここはもう崩れ……………る？  
どういうことだ、暴れすぎるなって言っただろがこの馬鹿ども  
おおおお！！！」

1人は両ひざと両手を地面に付け、1人は呆然とした顔で、もう一人は悪魔のような笑みを浮かべた顔で考える。詠春があることに気がつく。彼は突入前、3人に暴れすぎるなと何度も念を押していた。この施設は地下にあるので生き埋めの可能性もあったからだ。それをこの3人は忘れて暴れ、詠春が怒鳴る。

「やべ、キレた」

「逃げろ！！！」

「詠春の説教を聞くつてのはどうだ」

「貴様ら、一度頭の中を洗ってやる！！！」

ナギ、陽介、ラカンが逃げ詠春が体格のいい男を肩に持ったまま鬼のような形相で追いかける。そうしている間に天井はどんどん崩れていき、最後には詠春が通った場所から崩落していくようになった。

そうして脱出した4人のうち3人は隠れ家に戻った後1人に説教を受けるのであった。

「無理だろ！ なんだあいつら、なんであんな簡単にみんなが倒れ

ていくんだ!!」

「知るか!! そんなことよりどうやったらあの雷と爆弾から逃げられるか考えろ!!」

「考え付かねえよ。それより俺、帰ったら彼女にプロポーズするんだ。もう指輪も買ってあるし、彼女の親のところまで話すことも考えてんだ。あいつはすげえいいやつなんだよ、俺になんか勿体ないぐらいな」

「馬鹿野郎!! 地雷を、特大級の地雷を踏むんじゃない!!」

「そついえば俺の娘来週結婚するんだ。あいつは最大の笑顔で送ってやるんだ」

「おい馬鹿やめろ!! それ以上地雷原に踏み込むんじゃない!!」

敵側でされていたかもしれない会話………だったら楽しいと思う。

第13話 敵末端施設突入（後書き）

あいつも変わらず薄いお話。もう2、3話はこんな感じのが続くかも



## 番外編 出会いと伏線

「ふむ、どうしたもんかな、これは」

本当にどうしたもんか。神様とやらの訓練という名の拷問を終えて50年、魔法世界で賞金首を狩りながら彷徨ってたら兩宿りのために寄った洞窟の奥に、捨てられたような14歳くらいの子どもが4人。どうにもほっておけない。1人は怪我をしているのかすくつらそうだし。残りの3人は守ろうとしているのか俺を睨んでくる。睨みあい始めて3時間ほど既に経っている。

「はあ、ちょっとそこどけ」

「なんだよ！ お前も俺たちを奴隷みたいに扱うのか！！」

「違っつてば、その黒髪の子、怪我してんだろ？ 治すんだよ」

「今までのやつらもそう言っただけを！！」

黒髪の子を守ろうとして俺を威嚇してくる青髪、金髪、赤髪の子どもたちは今にも殴りかかってきそうだ。賞金首を何百人も殺したし俺は非情な人間だと思っていたけど甘さを捨てきれないみたいだな。

このままじゃいつまでたっても埒があかないため、短刀を取り出す。

「ほら、俺たちを殺すのか！！」

警戒をさらに強める3人に短刀を放り投げる。短刀は弧を描いて

怒鳴っていた青髪の子どもの足元へ落ちる。

「変な動きをしたら俺を刺せばいい。心臓を刺せば人は死ぬ。俺が死んだあとは俺の荷物も持っていけばいい。金は人ひとりが遊んで一生暮らせるくらいはあるからな」

「……………リーシャを治せるんだな」

「ああ、早くしないと細菌が入り込んで手遅れになるぞ」

「ラックもリーナもいいか？」

青髪の子の質問に首を縦に振りながら道をあける2人。黒髪の子に近づき、状態を調べる。

「……………」

「ねえ、リーシャは治るの？」

囁くような声で聞いてくる金髪の子。その声は本当に心配しているような声色だった。

「……………おい、この怪我を負わせたのは何処のどいつだ」

「え、正義の魔法使いとかいうやつが必要な犠牲だって……………魔法を……………ッ！」

この子の怪我、重症なんてもんじゃない。瀕死だ。ここまで生きながらえたのが奇跡だ。両足が粉碎骨折、腕には大きな裂傷、背中に切り傷、さらに腹が抉れて内臓まで達している。

手持ちの薬を使うか。持っていたカバンからイクシールを取り出す。

「おい、これをこの子に飲ませろ。安心しろただの治療薬だ。超高価で超効果だけどな」

「あ、ああ分かった」

「『治療』」

「もう一本イクシール飲ませろ」

「分かったわ」

「『治療』」

「近くに川があつたから水を持ってきてくれ」

「行ってくる！」

「そこにある鞆の中を探って食べ物を出しといてくれ。お前ら何日も食ってないんだろ？」

「食わせてもらえるのか」

「当たり前だろ」

さて、と。一応身体の傷は治したけど生き残るかはこの子次第だ

な。そんなことを思いながらシチューをつくる。

「ほら青髪の、鞆の中にある皿をとってくれ。」

「俺にはケビンっていう名前がある！」

「……………これか？　すごくいい匂いがするな、それ」

「そうか、それは悪かったな。味は期待しない方がいいかもしれんぞ」

人によって味覚は違うしな。

「私はリーナっていうの。ねえ、あなたはなんて名前なの？」

「金髪の子はリーナね。よし、覚えた。俺は火陰陽介、賞金稼ぎだ」

これで青髪と金髪の名前がわかったけれども……………赤髪のやつはまだ警戒してるな。ま、仕方ないのかもな。出来上がったシチューを3人に渡す。

「ほら、ゆっくり食べる。がつつくと吐くぞ、火傷するぞ。沢山あるから安心して食べな」

「ん、わかった……………」

「ありがとう」

「リーシャの分はあるのか？」

赤髪は仲間思いなやつだな。ケビン、さっきがつつくなくなって言っただろうが。

「この子は目が覚めたらだ。そのときにまた作るよ」

「そうか。……………ありがとう」

おおお、こいつが礼を言うとは思わなかった。勇気を出したんだろっ、顔が真っ赤だ。俺が見ているのに気がついて必死にシチュウをかきこむ。

「おい、馬鹿、がつつくなくなって言っただろっが」

「み、水……………」

「あ……………ここは？」

「お、起きたか。ああ、まだ寝てる、自分が瀕死だったのわかってんのか。腹減ってるか？食べ物持ってくるからちよっと待ってる」

太陽が登り出すところに黒髪の子が目を覚ました。起き上がるうとするから寝かせといて、水と食べ物を取りにいくついでにケビン達を起こす。と言っても体を後ろに回すだけだけど。

「起きろ、黒髪の子が気がついたぞ」

「本当か！？ リーシャ！！ 大丈夫か！？」

「ボク、どうなってるの？ 死んだはずじゃ？」

「そののやつが助けてくれたんだ」

「おー、元気そうだな。まあ、あの薬を何本も使ったんだ、元気になるってもらわんと困るけどな」

「そういえば赤髪、そののやつは無いだろ。」

「イクシール5本か。たかく………はないな。」

「さて、請求をするか。」

「さてお前らこの世の原則を知ってるか？」

「この世の原則？ 生き物は必ず死ぬとかか？」

「弱肉強食？」

「ケビン、それは大前提だ。リーシャのもな。赤髪はどうだ？」

「赤髪は考え込んで声が聞こえないみたいだな。こういう奴は考えると長いんだよ。平気で1日2日考え込むからめんどくさいっただらありゃしない。」

「タイムアップだ。この世の原則、それすなわち等価交換だ」

「あ………ボクを治したから、何か払えってことだよな」

「その通り。移動を使用と思つたら時間と労力を使う、魔法を使うには魔力が必要、強くなるにはそれ相応の努力と時間が必要ってわけだ」

「それでなにが言いたいんだ。リーシャの治療に使つた薬は超高価つていつてたな。奴隷にでもして売るのが？」

一時期なくなつたと思つていた壁かまた俺と4人の間にできあがる。

ケビンは齒を剥き出して睨み、リーシャは渡してあつた短刀を握る。

「最初からその気だつたんだな！！ 都合のいい話だと思つたよ！」

「近寄らないで、近寄つたら指すわよ」

都合のいい話つてのはそこらじゅうに転がつてるもんだ。人はリスクを最低限にしたい生き物だから、リスクが小さくないと飛びつかないんだ。今回はこいつらにとってはノーリスクハイリターンな話して俺にとってはハイリターンノーリターンな話だ。

だけど一度助けたんだ最後まで面倒見るのが人間だろう？

「瀕死の傷を治す超高価な魔法薬イクシール5本。これに相当する対価はなんだと思う？」

「うおおおおおー！！」

突然ケビン、リーナ、赤髪が飛びかかってくる。1人はナイフを持つているがどうと言うことはない。手を打ち合わせ地面につける。

地面から手が伸び3人を地面に縫い付ける。

「ぐっつー!!」

「やっぱり俺たちを売るのがこの野郎!!」

おい、どうしてこうなった。俺にそんなことをする勇氣もないし、つてもない。ゆっくりと説明をするか。

「おい良く聞け、俺はお前たちを売ったりはしない。信用しないならそれでいい」

「信用できるか、昨日だつてご飯を食べたら急に眠くなつたんだ! ! 薬を入れたんだろ!!」

「お前、最近ゆっくり安心して寝たか? それに生き物はなんか食つたら眠くなるんだよ。最近寝てないなら抵抗することなんか無理だ。要するに俺は薬なんか入れてない」

「それならなんで対価を要求しようとしたんだ。それになんで動けないようにする! ?」

いつまでも質問をやめない赤髪に近づく。しゃがみ、顎をくいツと持ち上げる。第三者が見たら俺が完璧に悪者だなこれ。

「いいか赤髪。昨日お前らが寝ている時に決めたんだ。お前は完全には寝てなかつたけどな。それはほつといて、子どもってというのはもっと幸せであるもんなだよ。今のお前らみたいに目には憎しみの色しかなくて、目に入ったすべての人間を呪うような目をするもんじゃない。お前らの年頃は何も考えずに家族のもとで毎晩布団にもぐつて、ただ明日は何をしたいだとか、明日はあんなことをしよう、そういう目であるべきなんだよ」



「なにが良かったんだ？」

「まだわからないか？ 俺がお前らの家族になるっていうことだ」

俺もこいつらの年のときは何も考えずに毎日を過ごしていた。

晩飯がうまいとか、明日あの公式を覚えようとか。正直こんな事があるとは思ってなかったし、こんな奴らがいるなんて授業とかで聞いていただけで他人事だった。でもそんな考えはこいつらを見て吹き飛んだ。幸い俺にはこいつらをどうにかすることが出来る。手に届く範囲を助けると決めた。これは絶対に曲げない。たとえ死にかけても。

「信用できるか！！」

「イクシールを5本も使つといて売ろうだなんて思わねえよ。それでもならないって言うならイクシールの代金分を払ってもらおうぞ」

「そんなの無理に決まってる！！」

「あー！！ もうめんどくさい！！ 餓鬼のくせにウジウジ考えこみやがって！！ そこまで渋るんだつたらイクシールの代金払う代わりに俺について来い！！！」

いつまでもあーだこーだいう赤髪に堪忍袋に尾がキレた。感情に任せて怒鳴る。

「でも……………」

「ねえ、ボクはこの人についていくよ。この人嘘をついてない。本

当に僕たちのことを思っていていてくれる」

「俺もついていく。リーシャが嘘をついてないって言うんならついてない」

「リーシャは人の心をあてられるしね。そのおかげで今まで逃げられたんだから」

まだ洩る赤髪をリーシャがさえぎる。リーシャの言葉にケビンとリーナも賛同する。あとはこいつだけだ。信じてくれるといいんだけどな。

「分かった、ついていく」

「そうかそうか!」

「でも!! 信用できなくなったらすぐ逃げるからな!」

「ああ、それでいいさ」

ついていくと言った赤髪の顔は出会った時よりものすごく明るくなっていた。

「お前もかなり頑固だったよなあ」

「もういいからやめてくれ！！ 思い出たくないんだから！！」

「なんだったかしら？ 住む場所を決めて、陽にいがお金を稼ぎに行く時顔を真っ赤にしながら……………」

「わああああ！！ ダメだダメだダメだ！！ それ以上言ったら一生恨んでやる！！」

「陽にいの服の裾をつかみながら俯きがちにラックだって聞こえないぐらいの声で言ってたよな」

「あらラック、私たちは滅多なことが無いと死なないわよ？ リーシャが不老不死になれるって言った時それに食いついて陽にいと一緒に入れるって研究室に殴りこみかけたのは誰だったかしら？」

「あれは見物だったよな。目を血走らせて俺のところに来るんだから怖いったらありやしないぜ」

「もう…………やめてくれよ…………」

おう、青い髪のケビン、金髪のリーナ、赤髪のラック、黒い髪のリーシャ達みんなで800年物の酒飲んでるぜ。それにしても人間って変わるもんだな。あんなに憎しみしかなかった目を持った奴が泣き顔で止めてくれって言ってるんだからなあ。

しかし、こいつらと出会って良かったな。本当に。え？ 理由？ 恥ずかしくて言えねーよ。

「ホントにカメラがあれば撮っておきたかったよな」

「陽にいまで言うのか!？」

「おおそつだ、話をぶった切って悪いんだけどリーシャ、あの戦闘機はもう出来てんのか？」

「スルーされたツ!？」

「ああ、あの戦闘機か。9割がた出来上がってるぜ。あとの1割はパイロットがあと1週間で最高のパイロットになるぜ。」

「それとラック、うるせえ」

ラックはスル しておいて（ラックが酒を飲んだ時はあんまり絡まないほうがいい。更に飲んで吐くから）リーシャに研究の進行状況を尋ねる。リーシャは最大に悪そうな顔でにやりと笑う。ちくし  
よう、似合いすぎだ。

「本当か。失敗はないだろうな？」

「あたりまえだろ、俺を誰だと思ってるんだ？ 今まで失敗したことは殆どないぜ？」

「あることはあるんだな」

「……………うん」

シヨボンとするリーシャ。こんな様子をみるのは滅多にないから新鮮だな。

「そ、そんなことより!! ケビンもうプログラムは終わったのか?」

「ん? ああ、ノーミス1発クリアで終わったぜ」

「マジかよ……あのプログラム、一国を滅ぼせる戦力だぞ、それをたった1機で倒すとか」

「なんの話だ?」

きゆうにケビンとリーシャで話したすから話の流れが読めなくなったので恥ずかしげもなく聞くことにする。いや、やっぱり恥ずかしいわ。

「ああ、陽には知らなかったな。ケビンがああの戦闘機にのるんだよ。それで、仮想現実空間で1国簡単に滅ぼせるプログラム組んでやらせたんだけどそれがノーミスパーフェクトだよ」

「お前、あれに乗るのか。それじゃあしっかりしてくれよ。あれ、結構重要な位置に置くんだから」

「任せとけ!!」

自信満々に言うケビン。何か心配になってきたわ。

## 番外編 出会いと伏線（後書き）

今週の更新は終わりかと思った人！ それは間違いだ！！もっと俺の頭の世界を知ってもらいたいからウィダー飲みながら更新だア！  
！ウィダーテラウマス。

とりあえず、4人達との出会い部分。プラス伏線。

まあ、どこに向けて張ったかなんて分かんないよね。え？ なに？  
わかる？ そんなバカナ。

あ、PVが10万突破しました。この小説を読んでくださっている方々、本当にありがとうございます。

そうだ、これを10万記念ってことにしよう。

パソコンより携帯のアクセスのほうが多いとはこれいかに？

第14話 クルトの弟子入り？（前書き）

なにかと薄っぺらい。

## 第14話 クルトの弟子入り？

「お、クルトちょっと来てくれ」

「……………なんですか？」

ちょうど通りかかったクルトを手招きをして呼ぶ。随分と警戒されてるようです。呼ぶとクルトの顔が警戒の色でいっぱいになりました。やめて、そんな目で見ないで！！ 変なことは企んでないから。気持ちの悪い言動はここまでにして。

「ちょっとこれを、あれに撃ってみてくれ」

タカミチに渡したのとは違って呪われてないベレッタ92FSを渡して、的を指す。

「呪われたりしてないですよね？」

「ギクツ。タカミチに渡したのは呪われてたけどこれは使ってますらないから大丈夫。呪われたのは奥の方に突っ込んである」

なんでそんな事聞いてきたし。誰かから聞いたのか？

「両手で握って腰を落として、深呼吸をしていつでも好きなときに撃つてくれ」

「はあ……………」

それだけを言ってスカイアースの軍でも使われている大盾の後ろ



にスタンガン（威力が市販の20倍）を3つもって隠れ、そおつと顔を出す。

「なにやってるんですか、アナタは」

「い、いいい、いや、備えあれば憂えなしって言うだろ!？」

「ま、どうでもいいですけどね」

クルトにもすごい目で見られたけどなんとか回避した。馬鹿にされた気がするが。

タカミチと違って緊張は全くせずクルトは撃った。そして的に命中。タカミチとはすごい違うな。あいつは掠りもしなかったからな。

「撃ちましたよ。それで、なにをしたかったんですか？」

「いや、ちびっ子は2人とトリガーハッピーなのかなと。いやーよかったよかった」

「なにがよかったんです？」

「タカミチみたいに暴れるならこの魔改造したスタンガンを当てる気だったからな」

「……………ちなみに魔改造の具合は？」

「市販の20倍」

「……………」

そんなに見つめんなよ、恥ずかしいじゃないか。ま、これでいけるかな。たしかこいつは将来メガロメセンブリアの元老員になってたはずだ。繋がりは一本あるけど、多すぎても悪いことにはならないはず。

「よし、お前に銃を教えてやる。手段は多くて困ることはない」

「結構です。僕は神鳴流を習っているので」

む、生意気な。

「アリカ王女が危険にさらされたときどうする。すぐに敵を倒さなければならぬ。だが動いたら王女がやられる。こんなとき銃があれば！ っということがあるかもな」

「……………お願いします」

なんか渋々って感じだな。

「よし、それじゃあ、その的に向かってマガジン一万个分ぐらい撃つてな。ちょーっち白いゴキブリを潰してくる」

「一万ぱっ！？ いや、いや、白いゴキブリ？」

さっきから個人的に恨みのある視線を感じるので、クルトに被害が及ばないようにその場を去る。具体的に言つと白髪頭。動けないところをさらって石の上に落として、俺専用の異能対策をとってくれてアリカ王女に変な目で見られた恨みをはらしておくべきか？ そんな事を考えながらクルトに被害が及ばないように立ち去…………

……立ち去れると思ったんだけどなあ。

「どこへ行くこうとしてるんだい、スカイアース国王殿？」

「うるせえ。絶対に撃ち抜く」

「ッ！ 危ないね。もう少し品のある行動をしようと思わないのかい」

突然白髪頭が現れてクルトに近づこうとしたので牽制程度に弾をばらまいておく。外した。ちくしょう。外す気だったからいいけど。胸ポケットから煙草を取り出し加え、火をつける。煙草はガトウに勧められては始めてみた。なかなかいい。風向を視るのにもちよつどいいし。

「思わないねえ。まあ、無抵抗の人間を石牢に落とすのを品がいいというやつと同じ行動はしたくないな」

「それは悪かったと思ってるよ」

まったく、あれマジで痛かったんだからな。石の上に受け身も取れずに落下とか本当にないわ。俺なら縛って動けなくする。優しいな俺。

黙って煙草を吸うのを見て白髪頭が口を開ける。

「ところで導き手、これ以上紅き翼に干渉しないでくれないか？ 君はイレギュラーすぎるんだ」

「ふむ、俺は紅き翼に干渉しようがしまいがどうでもいいんだか…

……」

「それなら……………」

「だが断る」

「は？」

やったね、一泡ふかしてやったぜ。ポカーンと口を開けたままの白髪頭。イケメンが台無しだな！！

「それはまた……………どうしてだい？」

「なーんで問答無用で石牢に落とすやつと言うことを聞かにならん？ もともとスカイアースは連合と帝国の戦争にも、お前等の完全なる世界にも干渉を決め込む気だったんだ。だけど気が変わった。大体あの警備網をくぐり抜けて俺を浚つといて、また警備網をくぐり抜けてくようなやつをはい、さようならって見逃すほどスカイアースはあまくない。なめられたままじゃいられない」

「っかどうやって警備網をくぐり抜けてきた。教える。対策立てとくから。」

「ま、俺もそこまでされて黙ってるほど心はひろくないし？」

「くそっ！」

瞬歩で近づき、頭に弾を撃ち込む。それをギリギリで首をひねってよける白髪頭。

「おやぁ？ どうした、品のある言葉遣いとやらはどこ行った？」

軽口をたたきながら鳩尾にむけて右足でヤクザキック。当たらなかつたので左足でかかと落とし。

「今はそんなことは言ってもらえないよ。何の準備もなしに君と戦うのは無謀を通り過ぎて馬鹿の域に入るからね、今日のところは逃げるよ。それじゃあね」

「あつ、逃げんな!!」

妙におとなしいと思つたら転移魔法陣を構築してた。水たまりが出来てそこから転移される。置き土産みたいに石の槍を放つてくるので横から蹴って蹴り砕く。

だけれども、ここで何もせずに逃がす俺じゃない。即座に狙撃銃の布を取っ払い、水たまりが出来ていた場所を魔法陣を組み立てながら狙う。

「残留魔力から転移座標を解析、表示……完了。座標の割り出し、特殊多重魔法陣構築」

「な、何をしてるんですか……」

「ちよつと黙つてろ。」

よし、喰らいつけ、『獵犬』」

白髪頭の残した水たまりに一発だけ放った弾丸が突き抜ける。爆音が響き地面が抉れる。クルトのギリギリのところを衝撃が通り、クルトの顔が真っ青になる。弾丸からは情報が送られてくるのでしばらく煙草を吸いながら待つ。

……弾丸から送られてきた情報には獲物に重傷を負

わせたとあった。脳天ぶち抜くはずだったんだけどな。まだまだ改良の余地があるな。

「な、なななな、なんですか今のは！！ し、衝撃波がつ！ すれすれでっ！ 音が！！ 耳がッ！！ ……………っ！！ ツ！！」

「あ、わりいわりい。ソニックブームと衝撃波がでるの忘れてた。あれは『猟犬』って言ってな、俺が作った魔法陣を通過することで効果を付加して、獲物に当てる弾だ。一つ目の魔法陣が追尾だろ、二つ目が座標の割り出しと転移だろ、三つ目から五つ目までが加速だろ、そんで六つ目から八つ目が障壁突破だろ。あ、加速はその時速度の2倍な」

「な……なんてもんを作ってるんですか！！」

「どうどう、そんなに怒るなって」

烈火のごとく怒るクルトに両手を向けて落ち着かせる。大体なんてもんを作ってるって言われてもこのくらいやっとなかないとこれから生き残れないと思うんだけど。

「これを、怒らずに、どうしろと、言うんですかあああ！！」

「ついでに言っとくけど、おまえ人質にされるところだったぞ」

「は？」

「いやだから、あの白髪頭がお前を人質もしくは殺そうとしていたぞ？」

口を開いて呆然とするクルト。白髪頭がここに近づいたときあいつは俺を見た後にクルトをしばらく見つめていた。だから場所を変えようとしたんだけどな。

「マジで？ ホントのホントにマジで？」

「本気と書いてマジと読むマジで。ホントにホントにマジで」

「え、えーっと……………ありがとうございました」

なんかもじもじしてたかと思っただら礼を言ってきた。驚いた。びっくりこいた。あ、これ死語か

「礼を言うぐらいならとつと的を狙って撃ち続ける」

「どこに向かって撃てと？」

言われて見渡すと辺りは地面が抉れてデコボコになり、木々は倒れている。誰だこんなことしたやつは。……………俺か。

両手で円を作り地面に手をつける。手から青い光が迸り、抉れた地面が元に戻り倒れた木は一つの場所に積み上げられる。

「あそこに向かって撃て」

「な、なんなんですか今のはあああああ！！」

「ッ！？」

ビックリした。突然大声をあげるんだから。というかクルトに錬金術見せてなかったっけ？ 始めてみるのかそれならこの驚き方も

納得だな。

「錬金術だよ。こう、グニョグニョって感じで」

「錬金術がそんなことを出来るわけないじゃないですか!!」

「はいはい、そんなことより早く撃とうか？」

クルトが銃を構えて撃ち始める。それを俺が近くで銃を整備する。そんな感じで1日が過ぎていった。

「そういえばあの白髪の人があなただのことをスカイアース国王……」

「キエエエエエイ!! お前は何も聞いてない!! いいな!!」

「はあ……………」

「おうそう言えばお前アリカ王女のことかすk」

「わあああああああ、あなたは何も言っていないし何も知らない!!  
!! いいですね!？」

「気が向けばな」

「だったらばらします」

「」「」「」「」「」



薄暗い建物の中体の半分がなくなった青年が息も絶え絶えの状態で横たわる。それを見かけた仲間らしきフードをかぶった人物が声をかける。

「クソッ!! やってくれたね導き手……。死ぬかと思ったよ」

「誰にやられたんだ？ お前がそこまでやられるとは珍しい」

「導き手だよ。この借りは必ず返すよ……」

## 第14話 クルトの弟子入り？（後書き）

クルトととの繋がりを持たせたかった。途中なんか出てきたけどスルーで。

もう一話挟むか、次で決戦になったらいいなあ。

第15話 決戦、後悔（前書き）

なぜかインパクトがない

## 第15話 決戦、後悔

白髪頭を撃退しておよそ3ヶ月。合計6ヶ月が完全なる世界の居場所をつきとめるのにかかった時間だ。

いろいろあった。クルトには俺が教えれることのすべてを教えた。クルトは白髪頭を撃退したときのオリジナル魔法を超コンパクトにして、ふつうの魔法使いでも10発は余裕で撃てるように改良した。もちろん信頼がおける人以外には絶対に教えるなって言っておいた。

タカミチはやっぱトリガーハッピーだった。妖銃ほどではないが銃を持つと身体能力や技術が3倍ほど上昇した。妖銃を持ったときは普通の30倍な。タカミチにはなにも指導とかはしていない。だってなにも教えてないはずなのに狙撃銃を握ったら全弾命中するし。白髪頭は出会った時に突っかかってきた。全部あしらったけど。

しかし長かった。活躍が認められると随分と紅き翼は動きやすくなった。俺はかなり怖がられた。まあいいけど。

今俺がいるのは墓守り人の宮殿のちかくで帝国・連合・アリアドネー混成部隊たちと待機している。ちなみにスカイアースもこの戦いには参加する。

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

「ていうかなんだこれ、なんで悪魔がこんなにいるんだ？ おい、なんでだオイ。爵位級もいるだろこれ」

「でしたら外側の担当は陽介ですね。がんばってくださいよ」

「アル、お前これを俺一人でやれと？」

見渡す限りの悪魔世界。シャレにならん。さすがに俺でも無理・  
・・・かな？

「超無理ゲーですね。冗談ですよ、拳を握り締めないでください。  
混成部隊もいますから」

「ナギ殿！！ 帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しま  
したー！」

お、準備完了か。スカイアースの軍もすぐにくるな。

「そ、それで……あの、ナギ殿」

「ん？」

「さ、ささ、サインをお願いできないでしょうか」

「おお？ ああ、いいぜそれくらい」

ナギ、そんなにうれしそうな顔をするな。その女の子も。こい  
つサウザントマスターとか言われてるけど千個も呪文覚えてないか  
らね。ガトウから連絡が入った。帝国、連合の正規軍は間に合わな  
いらしい

「タイムリミットだ」

「ええ、彼らはすでに始めています。世界を無に返す儀式を。

世界の鍵、黄昏の姫御子は彼らの手にあるのですから」

『こちらスカイアース軍先発隊、戦闘空域到達まで残り30秒。戦闘空域に到達次第、後続部隊の安全確保のため敵勢力の撃破に移る』  
『こちら、スカイアース軍本隊だ。残り300秒で戦闘空域に到達する。到達後、現地の勢力と合流、各個撃破する。おい！ 野郎ども、準備は出来てるか？』

……おお！ 世界の命運がかかっているんだ、気合い十分だ！！

言った先から来たよ。耳につけている無線からの連絡を聞く。

「了解。こちら準備が出来次第戦闘を開始する」

「陽介、誰と話してるんだ？」

「ああ、ジャックか。スカイアースの部隊だよ。……………ほらきた」

エンジンの音と共に可変式翼のスカイアースの技術を詰め込んだ戦闘機が4機到達し、一斉にミサイルを放つ。ミサイルは殆どがあたり、爆発を起こす。

「たったあんだだけか？ 随分とケチいんだなスカイアースは」

「なめんな。あと1分まで。それにあの戦闘機を見とけ」

「お、おお？」

「おおおおおお！！ 変形したぞ！？ カッコいいな！！」

そう、あの戦闘機は変形する。マク スのように。けどあれとは違って兵装の量、耐久力、機動性などあらゆるところで上回っている。

そこに爆撃機のような形状の戦闘機が3機到着する。これはAC-130 ガンシップのようなもので、対地、対空ミサイルや超大型ガトリング、機関砲、榴弾砲など大量に搭載し、大きさはもとの3倍、戦闘員の輸送も可能で速度も速い。垂直離着陸も可能で、戦闘員の人数は1機あたり100人だ。

『戦闘空域到達。魔力による足場の構成……完了。戦闘開始!!』

- - - 各員降下スタンバイ……スタンバイ……… go!  
gogogogo!

一斉にミサイルや弾丸が発射され、最新鋭の重火器を装備し強化装甲に身を包んだ戦闘員が次々と降下していく。降下した戦闘員から重火器を手に悪魔に攻撃を与えていく。

それをみたナギが負けてはいられないと声を上げる。

「よおし、負けてらんねえ！ 野郎ども、行くぞ！」

おう!!

気合いの入った声でみんなが飛び立つ。  
俺はその場に残り狙撃銃を構える。

「ナギイ!! そのままつつこめえ!! 外は俺に任せろ!!」

「ああ、まかせたぜ！」

「頼むぞ陽介！」

詠春が肩をたたいていく。

任されたからには本気でいかないな。

髪を掻き揚げ視界を広げる。強化パーツをつけ、飛んでいる奴らの隙間を縫って宮殿までの道を塞ぐ悪魔を潰していく。

出来た道を通ってナギ達は無事に中には入れたみたいだ。

そのまま撃ち続けること30分。いまのところスカイアース軍で墜落した機や死んだ人間もいない。混成部隊は爵位級の奴らが出てきて少し押されている。

「陽にい、医療部隊を連れてきたわ。戦闘も出来る部隊よ」

「おお、ちょうどいい。混成部隊で負傷者が始めているから、潜り込んで攫ってきて治療してくれ」

リーナが後ろにあらわれる。どうやら医療部隊をつれてきてくれたみたいだ。

さて、そろそろ爵位級の奴らもしびれを切らすだろうし、行ってくるか。

「おらあー！！ 大将でてこいやあー！ 出てこなけりゃこころにいる



の全員潰すぜ!！」

ほらきた。縮地で近くまで移動する。さすがに死者は最小限にしたい。

「本当に出てくるとは……驚きです」

「でもお一番乗り気だったのはあなたじゃないですかあ？」

チャライのとインテリっぽいのと語尾がウザい奴が空中に浮かんでいる。そこらにいるような悪魔とは違って迫力やオーラが違う。なんかヤバげな雰囲気。

「でもまあ」

「ここに来たということは」

「戦うってことだよねぇ？」

「できれば何もせず引いてくれたら嬉しいんだがなあ？ お前ら以外は簡単に倒せるし」

「そういうわけにはいかねえだろ。俺らは契約で呼び出されてんだから」

「そんなことよりあなたは本当に大将なんですか？」

なんか長そうになりそうでバトルは逃げられないみたいなので本気でいくことにする。

「確かに気と魔力の量は多いです」

デザートイーグルの銃口の下部と上部に取り付けれるように改造し

た短剣を手持ちの4丁全てに取り付ける。

「さきほどここを通りぬけて内部へ侵入した人間達とは比べ物にはならないほど」

魔法使いだったりならこのレベルで簡単に倒せるが爵位級の悪魔が3体ともなるとキツイ、キツすぎる。

「まさか、時間稼ぎだったり、捨て駒だったりすることはないですよね？」

この短剣を取り付けた拳銃2丁づつ6メートルの鎖でつなぐ。

「安心しろ、自分で言うのもなんだが俺はあいつらの中で一番強い」

「それなら早くやり合おうぜ!!」

「そうですねえこんな機会滅多にないですしい」

確か原作はナギがフェイトを倒した後造物主の攻撃を受けて壊滅状態になるんだっただけな？俺が行けばゼクトもいなくならないで済むかもしれない。そうとなったらチンタラしていられない。

「おらあ!! お前ら速攻で倒すわ。行かなきゃならんところもあるしなア!!」

両手に持ってインテリのほうへ斬りつけるように振りまわす。手にある拳銃は銃口が向くたびに撃つ。障壁突破、退魔の魔方陣を構築しながら。ただ振り回すだけと舐めてはいけない。限界突破をした体の筋肉を体全体を使って振りまわすんだ。簡単に音速を超え

る。空気中の摩擦も加わって鎖の部分や刃の部分は赤く熱される。

「おや？ なかなか素晴らしいですね」

「なんで体半分が無くなって傷口が爛れてんに平気な顔なんですかア？」

下半身が吹っ飛んでるのににこやかに話すとか有り得ない。

「本体は魔界にあるので痛みを感じないんですよ。このままでも戦えますし、問題はないですよ」

「おほお、一瞬で体の半分を持っていくか。こいつは楽しめそうだ」

「私はあ後方支援を〜してますう」

げ、3人同時にかかってくるっぽい。

「えーと、1人ずつかかってくるなんてことは……」

「ない！」

見るからに前衛系のやつ、チャラいのとインテリが飛びかかってくる。頭を抱えてしゃがみこむ。

「ちょ、タンマ！ タンマ！一斉にかかってくるなんてきてない！」

「待ったはなしです」

「もらったぁー!!」

「うおおおおお!?.....と、驚くとも思ったんですかア!! あいつ等の中で一番強いのにイ、たかか爵位級悪魔3体にやられるわけがねエだろぅがよオ!!」

飛びかかってきた2体には鎖を首に巻き付けて引つ張る。インテリは下半身が無くなって弱ってたのか簡単に落ちる。だがチャライのは元氣満々のようです首の半分までしか千切れなかった。

「おお、本当にすげえな。ここまで出来るとは思わなかった。なめてたわ。あいつが一瞬で返されたぞ」

「あ、だめだ。やっぱり気持ち悪い。ンで? なアんで首の神経を千切ったはずなのになンともないんですかア?」

「あいつと同じで以下省略」

はなしている間にも後方支援なのかイオナズンやベキラゴン級の炎や雷がとんでくる。めんどくさいので弾いてチャライやつの方へ送る。

そしてはじいたやつその後ろから弾を撃つたり、斬りつけたりする。それを相手は隙間を縫って俺に攻撃をしてくる。それを足を使ってかわす。

「よ、と、ほつと。いい加減倒れてくれない? そろそろ時間なんだけど」

「うおおおおお、効くぜこれは。だが! まだまだいけるぜっ!!」

「ねえ、俺の話聞いてた？」

話を聴いてないようなのでかわされながらもフェイントを混ぜながら混乱させて腕に鎖を巻き付ける。そしてそのまま引っ張る。両腕が無くなる。

「ぐう……」

「オラオラオラオラ！！　これで足しか使えねえなあ！！」

両腕が無くなっても痛みを感じた様子はない。だけど焦りはあるように動きにムラがでてくる。ただの人間にここまでやられるのは初めてみたいだ。

「さあ、お終いにしようか。もういかなきゃならんし、痛みがないとかつまらなさすぎる」

身を削りあいながら一瞬の勝負が緊張するのに両腕が無くなって表情一つ動かさないとか張り合いがない。神様印の不死身な不老不死でも痛みはある。全身を消されたときなんて再生しても一週間は痛みは残るんだからな。

そんな無駄なことを考えてるときにも後ろから炎や雷、水などたくさん飛んでくるが全てチャライやつにパスをする。おかげでかかってこない。まあ、俺が銃を振り回してるんだけどね。

「お終いにするとかあ本気ですかあ？　私まだ8割も本気出してないんですよ」

「いや、それ結構本気だから。その台詞はせめて5割以下のときに言おうか？」

「メモっときますう」

なんか気が抜ける。そろそろ仕上げに入ろう。振り回していたからもつ鎖や銃は真っ赤だ。本当なら既に液体になってもおかしくない温度だけど神様クオリティで溶けない。仕上げとして白炎を鎖に纏わせる。これで準備はよし。あとは巻き付けて引っ張るだけ。

「なんかヤバい感じがするけどどうするよ!？」

「どうもできないよ! 私の現象を弾いてたの見てたでしょ!？」

あー! なんでこんなやつについてきたんだろ」

「俺じゃねえよ! 提案したのはあいつだろ!！」

「あんたすごい乗り気だったじゃない!」

「うるさいうるさいうるさい!! 楽しそうだったんだからよ!！」

「もういいよな。そんじゃ、早く返ってくれ。時間が無いんだよ」

怒鳴りあっている隙に巻き付ける。痛みを感じないから言い合えるんだな。

さあ、滅多に見れない大技いつきまーす。

「「あ」

「『白炎鎖』」

鎖に纏われた白炎がさらに燃え上がり悪魔たちの体を焼き尽くす。この炎は人なら燃え尽きるまで、悪魔だとか実体が無いものに関してはいるべき世界に返すまで消えない。

「次は実体で来てくれや」

さ、墓守り人の宮殿に行こう。まだ造物主が出てきてないといいなあ。

そこらを飛んでいるナギにサインを貰っていた子に声をかける。

「おい、あとは下級悪魔だけだから俺は中に行ってくるから。あ、怪我しても大丈夫だから安心していいよ」

「え、え？　ちょ、ちょっと、どういこと……」

空気を蹴ってその場から一瞬で離れ宮殿の内部を目指す。まだみんな戦ってたらいいな。

「見事。理不尽なまでの強さだ」

「黄昏の姫御子はどこだ。消える前に吐け」

遠目に見えたナギが白髪頭の首を持って持ち上げている。

「フフフ……まさか君は未だに僕が全ての黒幕だと思っているのかい？」

「なん……だと……？」

「ああ、導き手も来たようだね。対策も建てていたんだけどね。無駄になったかもね」

向こうにはアルや詠春も見える。みんな倒せたみたいだ。

「ナギっ!!」

突然黒いローブを着た人物が現れる。魔力がどんどん高まる。まずい、魔力が多すぎる。

「いかん!! 『最強防護』!」

なんで安心したんだ俺は。まだ終わってないことは分かっていただろう。

ゼクトが何重もの魔法障壁を張る。

「クソツ!! 時間が足らん!!」

ゼクトとラカンと同じ場所に立って指輪のスイッチをいれる。だが時間が足らず、シールドが完全に張れない。完全状態の半分程度だ。

「うおおおおおおお!!」

ラカンの両腕が吹っ飛び、俺の体の右半分も吹っ飛ぶ。



魔法が消え、残ったのは地に伏した6人。誰もが決して軽傷とはいえない傷を負っている。

黒いローブを着た人物はすうつと消える。それを見たラカンが怒鳴る。

「待てコラ、テメエ!!」

「任せなジャック」

「い……いけませんナギ!! その身体では!」

「アル、お前の残りの魔力全部で俺の傷を治せ」

「し、しかしそんな無茶な治癒では!!」

「30分も持てば十分だ」

「ですがっ!!」

本当に無茶である。アルが幾ら魔力を多く持っているとはいえ、強敵と戦ってきたあとだ、今ある魔力は少ない。

ゼクトも立ち上がる。

「ふふ、よかろう。ワシも行くぞ、ナギ。……この中では傷が一番浅い」

「お師匠」

「ゼクト!! たった2人では無理です!」

「ここでやつを止められなければ世界は無に帰るのじゃ。行くしかあるまい」

「待て！ 奴はマズい！ 奴は別物だ！ 死ぬぞっ！！ 体勢をたてなおしてだな……」

「ばーか、んなことしてたら間に合わねえよ。らしくねえな、ジャツク」

ナギはニカツと笑いながら続ける。

「俺を誰だと思ってる？ 無敵の『千の呪文の男』だぜ、負けるわけねえだろ！！ じゃあな、ちよっくら片付けてすぐ戻る」

ナギは5人を見渡し造物主が消えた方向へ飛び立つ。そのあとにゼクトも続く。

「ナギイー！！」

「あ……ずい……んだった。……全……細胞が……  
……ろって……」

「……………最強の……………ン。……………さを肌で感じ取り……………」

声がする。俺、なにしてたっけ？　ここ、どこだっけ？　指輪……  
あいつらからの……………どこにいったんだ？　たしか……………

「動いてはいけません詠春！　死んでいてもおかしくないのですよ……………」

造物主が……………魔法、時間が……………思い出した。シールドが不完全だったんだ。

「がっ！　ア……………ル」

「しゃべらないください！！　顔からしたの身体の半分がないんですよ！！」

道理で感覚が無いわけだ。血を流しすぎて目が見えん。あの薬使つか。

「コート……………ポケット……………赤い……………ガッ、ガフッ！！　試験……………」

「赤い試験管ですか！？」

「おい、陽介！！　マジでしゃべんな！　死ぬぞ！！」

つーかなんで再生しねえ？……………ああ、夜の迷宮のときと同じか。めんどくさいことを。というかまだ死ねん。あいつらより先

には逝けん。

「これですか陽介！？ これをどうするんですか！！」

「全部……飲ませて……く……」

「まだ死なないでくださいよ！！ ナギも戻って来ると言ったんですから」

口から液体が入っていく。喉を過ぎるといきなり痛みが体中を駆けめぐる。体が焼けるように熱い。

「ガッ！！ ゲッ！！ ……グッ！！ ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

「陽介！？ 陽介！ こ、コレは！？」

「おいおい、どういうことだこりゃあ？」

「再生している！？ イクシールでもここまでは！！」

身体の半分が徐々に戻っていくのがわかる。

「あ、あ、あ、あーあー。死ぬかおもた。マジ痛い。誰だよ俺の能力だけを封じるやつ置いたのは」

「陽介つ、今の液体は……」

アルが驚愕といった顔で俺を見てくる。そりゃそうだ。半分がないのに戻るとかありえねーもん。

「ああ、科学方面の薬だ。おい、ラカンどうしたその腕は。ケホッ、新しいファッションか、ええ？」

「うっせ、これで人気者だぜ。ま、もともと俺は人気者だけどな」

「はいはい。ほら、傷口につけとけ。詠春はこれを飲んどけ」

ラカンには重傷治療用のゼリー状のを渡し、詠春には俺が飲んだのより薄めのやつを飲ませる。ラカンはある程度の痛みは耐えられるだろうし、詠春に渡したやつのは痛みは10分の1以下だ。2人もシヨック死とかをすることは絶対にならない。

「んじゃ、加勢にいつてくる……ガフっ!? 行ってくるわ。お前から避難しとけよ」

「陽介ダメです!! 血がッ……! また同じようにやられてしまいます!!」

あ、あれはナギが倒すからいいのか。でもそれだとゼクトがいなくなるし、黄昏の姫御子も助けられなくなるかもしれんし……

「それならナギとゼクトに今すぐ言っつけ! 体に乗っ取られないようにとな!!」

「それでは戦いの邪魔に……」

「一方的に言うことはできるだろ!? 俺は姫御子を手助けしてくれる。いいな!! ゴホッ、ゲッ、ガアッ!!」

「陽介、その体では!!」

「俺が行かなきゃ……………誰が……………ガツ!! 行くだよ! ゲホツ、ガフツ」

あれ? なんで地面がこつちに来てるんだ? 身体中が熱い、痛い、重い。ああ、そうか、俺が倒れてんのか。ちくしょう、力を持っていても使えないんじゃないか。

「大馬鹿野郎が」

かっこわりいな、俺。

「大馬鹿野郎が」

「陽介? 陽介!!」

陽介に駆け寄り、首に手を当て脈を確かめる。

「おい、アル。陽介は生きてんのか?」

脈はある。トクントクンという感覚が指に伝わる。

「ええ、生きてますよ。まったく、無茶のし過ぎです。なにが彼をここまで動かそうとしたのか。とても気になりますね」

彼の半生を知りたい。闇の福音エヴァンジェリンを助けているそうなのだから考えられないほど長い時を過ごしてきたのだろう。

突然大きな爆発音が聞こえた。何があったかはすぐに理解できなかった。ナギが勝った。ラカンも何があったのかすぐにわかったようだ。

「オイオイオイ。倒しちまったぜ、あいつ」

「……の、ようですね」

「かなわねえよ、テメエにやよ」

『……ル……ッ！ 聞こえ……かアル！』

「やあ、ナギ。まったく、驚かされますよ貴方には。貴方はいつも私の予測を……」

まったく、倒すことはできないはずなのに倒してしまつとは。

「姫子ちゃんが……いやそれよりも儀式だ！！ 親玉は倒したがヤロウ、既に儀式を完成させちまつてたみたいだ。マズイぞッ！！」

「なんですってー！！ 儀式をー？ ……では……このままでは……っー！！」

世界が終わってしまつ。

「オイオイなんだこの光球は！！ どんどんでかくなってるぞ！！」

「世界の始まりと終わりの魔法……！！ この力場が全世界を覆ったとき世界は無に返します！！ いくら我々が最強を名乗ろうとどうすることもっ！！」

「対抗策はッ……逃げる？ どこへ逃げると！？ 魔法を破壊する？ どのようにして！？ ナギがなんとかしてくれる？ ナギは人間だ。できないこともある。むしろ出来ないことの方が多い！！ いったいどうすれば！！ 頭の中をどうにもならなく、どうでもいいことが駆けめぐる。もう……駄目なのか？」

『諦めないでは駄目です！！ アルビレオ・イマ！！』

「ああ、リーシャ……か？ 今すぐに……あれを……ゲフッ、増幅器を送ってくれ。そう……だ、魔力が、一番集まるところだ……」

仲間の声が聞こえる。まだ諦めるといった感情は一切感じられない。気を失った陽介も何かをしようとしている。

「陽……介？」

「本当、俺は馬鹿だよなあ。実力だけは……無駄にあって、ここ一番で必要なときに……なにもできないんだから。あの薬だって……俺が作った物じゃないし……今から来る物も俺の力じゃない。本当……なんなんだろうなあ……」

意識が戻った陽介がまた気を失う。どうやら無理矢理意識を戻したみたいだ。手に短刀が突き刺さり、大量の血が流れている。



「こ、広域魔力減衰減少を確認！ これまでに観測されたものの比ではありません！ 世界を飲み込む勢いです！！」

光球が大きくなる速さが一気に増える。このままでは世界が無に返ってしまう。

そのとき、大型の戦艦が現れた。

「こちらスヴァンフヴィート艦長リカード、助太刀するぜ！ 世界のピンチだ敵も味方も関係ねえぜ！！」

メガロメセンブリア国際戦略艦隊旗艦だ。さらに現れる。

「そのとおりじゃ！！」

帝国北方艦隊も現れる。

空間が歪む。歪んだ空間から超大型戦艦が現れる。

「こちらスカイアース軍、世界の危機だ手を貸そう」

「各員データで渡された魔法を発動してくれ。帝国や連合と足並みを揃えろよ！！」

怒号が飛び交い緊張が高まっていく。

「全艦隊、光球を取り囲み抑え込みなさい！ 魔導兵団、大規模反転封印術式展開！！ 全魔法世界の興廃、この一戦にあり！ 各員全力を尽くせ後はないぞ！！」

ハッ！！

「よろしいですね……？ 女王陛下」

魔方陣がいくつもの魔方陣が墓守り人の宮殿を囲む。

結論を言うならば世界は、救われた。  
英雄たちと戦いに参加した者たち全ての力によって。  
だがこの戦いで負った傷はとても大きい。

## 第15話 決戦、後悔（後書き）

随分と間が空いたけどちゃんとかいてるぜー！

あともう少しで原作。ワクテカが止まらない。

原作との違いは次で。

見捨てないでくれたら嬉しいですよー。

## 第16話 祝祭、崩落、手助け

「ん……………？　ここは？」

「すう……………すう……………」

えーっとなんでリーシャがベットに上半身うつ伏せで寝てんの？  
しかも涙の跡が見えるし。

「おう、起きたか陽にい」

「ラック？　ここどこだ。何があった。なんでリーシャに涙の跡がある。今何時だ、魔法が封印されてどのくらいたった？」

「マズイ拙い不味いまずい！！　魔力消失現象が、オスティアの首都が……………」

そばで椅子にかけて本を読んでたラックに問いかける。

「落ち着け、まだ消失現象は起こっていない。だけど時間の問題だ。それとリーシャは……………」

「なんで真面目な顔をやめてにこやかに笑う？　その手はなんだ？　ワキワキしないでくれると嬉しいなあ。うん、片手で頭を掴んで？　そこからどうするんだ？」

「手に力を入れるのか。腕に血管が浮き上がってるんだけど？」

「ああ、リーシャのドーピング薬か。」

「なんで今飲んでるんだ？　なに、大馬鹿野郎の家族に説教するため？　why、何故？」

「いででででででで！！ 痛い痛い、痛いって！！ なんて怒ってんの!?!」

「俺らの心配を考えてみたらどうだ？ アルビレオさんから聞いたぜ。体の半分が吹っ飛んだんだろ。そのくせ再生薬を飲んでどっかに行こうとしたんだろ。馬鹿なの？ アホなの？ 使ってから半日は動くなっって言われたの忘れたのか？」

「いや、だって、あそこで起きなかつたら世界が終ってたし……？ 小さい子もいたし？」

「ア・ホ・か。そこで陽にいが死んだら意味ないじゃないか。………はあ、リーシャはよっぽど心配だったんだろうよ。泣きながらずっと離れようとしなかったよ」

それは………申し訳ないなあ。

「あ、陽にいが起きてる！！ ボク、すごい心配したんだからね！ なんてあんな無茶なことをしたの？ 陽にい、いくら死なないからって無茶しすぎだよ」

「………」

「………」

………ボク？ リーシャの一人称って俺じゃなかったか？

クイ、クイクイ、コテン

ブンブン！ コテン

とっさにラックとアイコンタクトとジャスチャーで意思の疎通をはかるが、ラックも知らないらしい。

「なんでラックとアイコンタクトしてるの？」

言葉遣いも柔らかくなっていて……だ……と……？  
いままでは思いつきり男言葉だったのに。

「い、いや、なんでもない！！ なんでもないぞ、うん。なあ、陽にい？」

「あ、ああ、なんでもないぞ」

「ふーん、そつかあ……でも、よかった」

安心しきった表情で俺に近寄ってくるリーシャ。

「なにがだ？」

「だって陽にいが無事だったんだもん。しかも、賞金取り消しだつて！！」

目がキラキラしてる。いつものダルそうな目とは大違いだな。

「……………え？ ゴメンよく聞こえなかったもう一回言ってくれ」

「だから賞金を取り消しだつて！！ それと陽にいは英雄だつて！

流石、ボクたちの陽にいだね！」

「ラック、マジ？」

「マジもなにも大マジだ。よかつたな、『銃器使い』？」

やつ……た！！ これで顔を晒して歩ける。街に入る度に包帯をまく必要が無くなった……！ なんだこいつって目で見られることもなくなる！

「それでナギ達は何処にいるんだ？ 英雄を祝ってやらないとな」

「なに言ってるんだこの人は……… ナギさんは街にある酒場に行くつてよ。人が集まってるからすぐわかると思うぜ」

ラックにあきれ返った眼で見られた。だってあいつが一番の英雄じゃん。主人公補正すげーすげー。

さて、行こうか。ゼクトがどうなったかも気になるし。いつものコートと装備を付けてベットから這い出る。

「あ、陽に何処行こうとしてるの？ もう少し一緒にいてくれたつていいとボクは思うけどなあ？」

「はいはい、俺達には時間は無限に近いほどあるだろ？ それに比べてナギや詠春はすぐにいなくなっちゃうからな。逃せられないんだよこつというのは」

「む …… わかった。でも早く戻ってきてね！！」

「魔力消失現象には魔力を使わないのをやっておくから陽にいが参

加したいならどれかに乗ってくれ。兵士全員に言っとくから」

「ん、分かった」

「おう、ちょっと避けてくれー 酒場に用があるんだ」

「おう、あんたも英雄たちの顔を見に行くのか？」

「でも『銃器使い』はまだ来てないからそっちが目当てならもう少し後にしたほうがいいぜ」

「サイン貰えるかな？」

「思ったんだけどさ、ナギと『銃器使い』ってどっちが強いんだろな」

「そんなの英雄のナギに決まってるじゃないか!!」

「馬鹿かテメエは！ 最強で最凶な賞金首の『銃器使い』だろうが!!」

「ああん!？」

「お前違うだろ！ 『銃器使い』は英雄だろうが。賞金も取り消されただろうが！」

「テメエ、ナギはラスボスを倒したんだぞ！」

「それを言うなら『銃器使い』は爵位級の悪魔を3体倒したって言われてるじゃねーか！」

「出まかせに決まってるだろうかそんなのは!!」



「ああ！？ やんのかテメエ！？」

「いいだろう！！ やってやるうじゃねえか！」

「喧嘩か！？」「代理で決着付けんのかー？」「俺ナギに1000

！！」「じゃあ俺は『銃器使い』に1500！！」

「俺もナギだ！！」「ははは、やれやれえ！！」

すげえお祭りムード。みんながみんな浮かれてるな。……そりや  
そうか。戦争も終わったしな。みんな嬉しいよな。というかさっき  
の言い合いで最強の文字が一つ違った気がするけど気にしない。

人混みをかき分けて酒場にたどりつく。扉を開くとまた喧騒が聞  
こえ出す。密室だから声と熱気がこもって余計うるさく、結構熱い。

「真打ち2人目登場だ！」

「来たか『銃器使い』！！」

「あんだ2つの意味で教科書に乗るぜ！？」

「すげーなこれ。盛り上がってんなあ！！」

「つたりめーだろ！」

「今盛り上がりずらいつ盛り上がるってんだ！」

さらに盛り上がった。何やってんだ俺？ さらに熱くして意味が  
あるのか？

と、ナギ達は何処だ？

「陽介！！ テメエもう傷はいいのかよ！？」

「ナギ、良くねえに決まってるだろ。体半分が吹っ飛んでたんだぞ  
！！！」

「馬鹿野郎がなに傷をド突いてんだよ!? 傷痕はいてえんだよ!」

「こんの馬鹿どもおおお!! 傷をド突くなと言っているのがわからんかああ!!」

ナギとラカンが傷口をピンポイントでド突いてくる。マジで傷痕はいてえの!!

「陽介、無事じゃったか」

「ゼクト、生きてたのか!!」

ゼクトが後ろから声をかけてくる。ゼクト、生きてて良かった。死なれると俺しばらく引きずってしまっからな……………

「おお、アルが陽介が乗っ取られないようにしろとナギに言ったらしくてな。おかげで乗っ取られかけたが無事助かったわ」

「アルがちゃんと知らせてくれたんだな。ま、飲もうぜ。150年物のワインがあるんだけど、ゼクトにアル、どうだ? 飲むか?」

ポケットから150年物のワインを取り出して2人に見せる。予想通り2人ともすぐに食いついた。滅多にないしな。

「それはすごいのう。わしは長い間生きておっても物を保存する方法がないからの。そういうのは飲んだことが無いのじゃ」

「いただきますよ」

「あーハイハイアリカ姫な！！ アリカ姫じゃしょうがねえ！！  
そーだろそーだろ！！ ありやいい女だ！ 無理もねえぜ！！ 照  
れるなよ少年！！ 素直になれよお？」

ラカンが鼻息を荒くしてナギに詰め寄る。手にはアリカ王女のフ  
イギア。確かあれプレミアだったはずだったんだけど。あ、ナギに  
思いつきり殴られた。頭から血がものすごい流れてるんだけど。

「……おめえも残っていいんだぜ？ どーせメガ口にや義理もねー  
し、正式にはまだ俺たちはお尋ね者だしよ」

「ちげーつての」

「いや……まあ何だ。あの姫さん、自分から愚痴や弱音を吐いたこ  
とは一度もねえけど、オスティアの王宮つてのは古い分ドッコロドッ  
口の毒蛇の巣みたいなのトコなんだろ？ そんな中あの年齢まで生き  
抜いてよ、あんな鉄面皮の能面冷血王女になっちまったんだぜ？」

「エライ言い様だなオイ」

「それが今度は女王陛下だろ？ 大変だわ……てな」

「女王陛下？ 何だそりゃ？」

「アリカ様の父王が『完全なる世界』の傀儡であることが判明した  
のです」

「アリカ王女はクーデターみたいなカタチで王位を奪ったようなも

のなるな」

ナギ、ラカン、アルの会話に途中から混ざる。ん、そろそろ時間か。もう少しいたかったんだけどな。

「マジで!? どーゆーこっちゃ!?!」

「3日前のコトです」

「あー行くとこあるからこれで俺は出るわ。それじゃあな」

早くいかないと切羽詰まった状態になるのでナギ達の疑問の視線を振り切って外に出る。

「おいどこ行くんだよー」

「案ずるなナギ…… 妾にはもうそなたの言葉だけで……充分なのじゃ」

「陛下!!-- 時間です。まもなく崩落の第一段階が」

離宮島の景色のいい場に立ち、思い出に浸るアリカ王女。そこに

スーツの中年の男ガトウと少年クルトが片膝をついてあらわれる。

「進捗状況は？」

「アスナ姫封印直後から全艦艇全力であたっており、現在37%。陛下のお考えどおり式典と称しこの離宮島に全市民を誘導しております。情報統制により混乱もこれまでのところありませんが

崩落が始まればその限りではなく全市民の救出は困難を極めるかと……………！！！」

ガトウはよほど急いできたのか息が荒いまま報告をする。報告を聞いたアリカ王女は齒を食いしばる。

「妾も直接指揮に当たる！！」

自分の民を1人でも多く救うため自分も救助に参加することを決めた。

そこに一つの陰がゆっくりと近づく。

「俺も手を貸そう」

陰の正体は元最高額の賞金首であり、現在は英雄として讃えられている火陰陽介だった。

## 第16話 祝祭、崩落、手助け（後書き）

4000文字くらいは簡単に書けるようになってきた今日この頃。

原作とのちがいはゼクトが生きている、崩落時の救助に陽介とスライアースが参加する。です。

リーシャがなんか可愛くなってる。あの言葉遣いは無理矢理はなしでたということですか。

ヒロインがまだ決まってるじゃないことに今更気がついた。……………  
……………アンケートでもしようかな。

あ、でも恋愛経験皆無な作者が書くことになるのか？ 無理じゃね？

## 第17話 崩落現象の最中

「俺も手を貸そう」

「陽介！？ どうしてここに居るのじゃ！？」

「師匠！？」

「王都が落ちるからな。どーせアリカ女王が皆助けるみたいな考えで救助を行うと思っただけ」

3人驚いている。気づくとは思ってなかったんだろな。

「お主に出来ることはない。去るがよい」

「今スカイアースの魔力を使わない艦が来てるんだけど？ それに

……」

「それに……なんじゃ、なにを戸惑っておる」

「1400年物の狙撃は要らないか？ 落ちてくる岩を破壊できるぞ」

「……………」

随分と悩むアリカ女王。元賞金首だからな。悩むよなあ。でもこの考えてる間にも崩落現象に刻一刻と近づいている。

「時間ないよー」

「……………頼む。力を貸してくれんか？」

この人は俺がなにを言ったかもう忘れたのか。

「当たり前だ。そのために俺はここに来たんだからな」

「さあ、観測手がない1人きりの狙撃を始めよう」

観測手がいてもいなくても俺には関係ないけど。

撃つ。撃つ。撃つ。とにかく撃つ一撃で粉々に出来るところを狙撃する。出来ないのなら数に物を言わせて粉にする。転げた子どもの上に落ちてくる岩を撃ち砕く。砂まみれになるが死ぬよりはマシだろう。

『最大効率でまわせ！！　ただし捨て置いてよい命はない！！　1人も救いもらすなこれは厳命じゃ！！』

アリカ女王の声が無線から聞こえる。

『貧民島の避難作業が難航しています、このままでは！！』  
『理由は！？』

『街の構造が複雑な上、不法移民が多く全住民の把握が！！』

陛下！！　どこへ！？』

『貧民島は妾が直接赴き島ごと不時着させる！！』



スカイアースの艦は救出作業を行っているのがスコープの端に見えるが、国内の情報が出だせぬ流れないせい、艦に乗るのを渋っている人がいるのも見える。こんな所に弊害が出るとは……………！

『ゴルアアーツ！　こんのバカ姫！　やいアリカテメエ！　ど  
ういうこったコレは！？』

『ナギか。見てのとおりだ。世界を救う代償に自らの国を滅ぼした。  
案ずるな、妾もいずれ遠からぬうちに地獄へ墜ちる』

ナギ達…………か。今魔法が主な攻撃方法のやつらが来ても魔力消失現象のせいで役に立たない。邪魔になる。詠春やラカンなら役に立つかもしれないが。

『くそッ！　今からそっちに向かう。待ってけてめえ！』

『ここにそなたの力はいらない！！　妾を助ける暇があるのなら、  
陽介とともに避難民の頭上に落下する浮遊岩の破壊を要請する！！』

今来られても困る。あいつ大呪文しか放たないから煙やらで見えなくなる。

『陽介がいんのか！？　陽介聞こえてんだろ！！　知ってたんなら  
何で話さなかつた！？』

「黙ってる！！　今こっちは忙しいんだよ！！」

それにお前が来ても魔力消失現象の中だ飛べんたろうが！！」

『む…………』

『逃亡生活中に使用したボロ船にも対抗呪文処理を施してある！  
それを……』

『もう乗ってるよ!!』

『ならば良い。では救出活動に全力を尽くした後そなたたちはその  
ままここを去れ。二度と戻るな。最後の命令じゃ』

『何!?!』

「ナギ!! 恐らくアリカ女王と俺はこの後メガロに拘束される!  
! アリカ女王を助けるチャンスは一度きりだ!! 行動するタイ  
ミングを間違えるな!! 通信終了だ!!」

ナギ達からの通信を一方的に切る。落ちてくる岩がだんだん大き  
く、多くなってきた。これ以上余計なことに集中を割いていられな  
い。

「バツカヤロオオオ ツ!!」

ナギの叫び声が聞こえる。アリカも通信を切ったんだろう。

………関係ない。今やらなければならぬのは岩を破壊すること  
だ。ハア……あいつら怒るだろうな。どうせ俺捕まるだろうしな。  
去って、あと少し気張りますか。

「犠牲者数は人口の1%を下回ったそうです。これは状況を考えれ

ば奇跡的な数字……」

「数が少ないからって割り切れる女じゃねえだろ。何より、マジで大変なのはこれからだろうしな……」

「それにしても陽介は何故魔力消失現象が起こることを知っていたのでしょうか」

「そりゃあ、陽介だからとしか言いようがねえな。陽介はいつも俺たちが見ていることの100歩先も200歩先も見据えているからな」

「長生きをしているだけのことはありますね」

「ほれナギ、いつまで落ち込んでおる。あの陽介がおるんじゃ、そう簡単に殺されたりはせんわ」

「……………」

アリカ女王は魔力消失現象を姫御子ごと封印することで世界を救った。だがその代償として王都を中心として直径25キロ圏内は魔法が使えぬ魔法の大地と化した。

数百万の民は難民となり周辺の国へ流出、王国はメガロメセンブリア軍によって王国は実効支配されることとなる。

スカイアースは持ち前の技術で難民の援助を行おうとするが今まで情報があまり出てこなかったことが裏目に出て援助をうける者は少なかった。

「アリカ女王、スカイアースでも難民の受け入れもやっているんだが、なかなか信用してもらえなくてな。老人たちや病人ぐらいしか移民してこねえんだわ。若い奴らは周辺の国に移っちまう。こっちでも新しい受け入れ用の土地を作ってるんだがな……………」

「すまぬ、迷惑をかける。妾からも言ってみよう。妾はこれからメガロメセンブリアの元老院と話をつけてくる」

「護衛はいるか？ あんた1人を逃がすくらいは簡単だぞ」

アリカ女王の顔は最近げっそりと肉が落ちてきている。難民のことで殆ど睡眠もとってない。いい加減休まないと死んでしまう。

「いや、いい。そこまで迷惑はかけれぬ。それにこれはウエスペルタティアの問題じゃ、そこまでしてもらおうわけにもいかぬ」

「そうか。気をつけて頑張れよ」

元老院議事堂へ向かうアリカ女王。護衛は必要だと思うが本人がいいというならまあいいか。

そんじゃ、俺はクルトをしばいてこようかね。言っとなきゃならんこともあるし。

「クルト、ちょっと来い。久々にしばいてやる」

「え、しばく？ 超ハードモードですか……………死ななかつたらいいなあ」

遠い目をして呟くクルト。若干体が小刻みに震えている。安心して殺しはしないさ。ただ愛弟子に稽古をつけるだけだよ。

「ほら、もつと衝撃をいなせ!! そんなんじゃ手が吹っ飛ぶぞ!!」

「は、はい!!」

「集中しろ!! 狙いがぶれてるぞ!!」

「くっ……」

「姿勢がねじれている! 頭で考える前に体にしみ込んだ経験を使え!!」

「こうですか!？」

「もつと体を動かしながら頭を使え! たった3回の跳弾なんてやくにたたねーぞ!!」

「気配を読め!、あいての筋肉の動きや収縮から次に何をするか理解しろ!」

「そんなのが、出来るのはッ、師匠だけですよ!!」

「撃つ場所を目で見るな! 相手に分かるだろうが!!」

「必要なところに必要な分だけ魔力や気を使え! ほら、多すぎる!!」

「そんなこと言われてもッ!!」

「状況に応じて闘い方を変えろ! 守りてえもんも守れねえぞ!! お前には守りたい物が無いのか!？」

「ありますよ!!」

「ならもつと気合入れろ!!」

「はいっ!!」

「はっ、はっ、はっ！」

「おう、良くなってるじゃないか。常に努力してたな？」

「はいっ、ありがとうございます…！」

へろへろになって倒れ込むクルト。最初とは比べもんならな  
いほどだ。

「んー、そろそろいいかな」

「なにが、ですか？」

「なにっってお前の卒業認定しかないだろ。もうそこいらのやつじゃ  
お前には勝てねえよ。準備万端な時ならそこで俺を穴があくほど見  
つめているMM重装兵団がかかってこようともし逃げられるぞ」

「強くなった実感は無いんですけど……え？　そこで？」

「おう、何処にいるかわかるだろ？」

本当に視線が鬱陶しい。ネッチヨリとまで回すような視線がいく  
つもある。

「そこと、あそこですね」

「そうだ。おい、そこでネットチヨリとなで回すような視線で見ている奴ら、出てこい」

物陰からフルプレートアーマーを装備した奴らがぞろぞろと俺を囲む。隊長らしき人物が前に出てくる。

「英雄火陰陽介ですね。あなたを逮捕する」

「ど、どうして!?!」

「理由は?」

煙草を取り出し口にくわえて火をつける。逮捕されたら煙草なんて吸えないしな。

「あなたに完全なる世界との関与の疑いがあります。更にアリカ女王と結託しオスティア周辺の虚偽改竄の疑いがあります。抵抗するのならばこの近くにいたる全兵力をもって捕縛させていただきます」

一斉に手に持った武器を構える。このままじゃクルトも巻き込まれるんだけど。

「あー面倒だ。ここで逃げたらさらにひどくなるし、あいつらに迷惑はかけれん。しゃーない、捕まっちゃろっ」

「師匠どうして!?! 師匠はそんなことしていないのに!?!」

「逃げれんだろうが。逃げたらアホどもがわんさか湧いてくるしな」  
主にこの前の戦いで正義の意味を勘違いしたやつらがかかってくるだろう。もう少し自分で考えてほしいものです。

「で、でも」

「大丈夫だ、俺が死ぬことはないから。そうだ卒業記念だコイツをやるさ」

納得できないといった表情を隠そうともしないクルト。右足と左足につけている拳銃を一丁ずつ取り外す。

「抵抗はしないでください。我々も不本意なのです」

「武装を解除してるだけじゃないか、見て分かれ馬鹿どもが」

自分たちだけで勝手にやってる。

ついでにマガジンも4個取り出して一緒にクルトに渡す。

「え、これは……頂けません。師匠のメインの武器じゃないですか」

「いーからいーから、貰えるってことなんだから、貰っとけ。それと耳を貸せ」

「わかりました、頂きます。急に耳を貸せってなんですか？」

首を傾げながら耳を持つてくるクルト。

「もし、元老員になりたいって言うならマキグル議員に俺からいけ



って言われたっていいな」

「え？ え？ え？」

「時間です。ついてきてください。くれぐれも逃げようなんて思わないでください」

鎧に囲まれる俺。だぁーめんどくせ。言っとかなきゃならんことがある。

「クルト、誰になんと言われようが自分の道を信じて進め。さすれば道は開かれん」

「は……………い……………」

歯を食いしばり手を血が出るほど握りしめている。そこまで慕ってくれてるとはね、感謝感激だな。

こんなときに暗い顔で送りだされると縁起も気も悪いので明るくすることにする。

「あ、これ死亡フラグか？ 俺死ぬかもしれんな」

「縁起でもないことを言わないでください！！」

……………まったく、師匠はいつもこうですよね。人をからかうふりをして本気で考えてくれてる。感謝してます」

「え？ 何も考えてないけど？ 常に行き当たりばったりりなんだけど」

「台無しです。いい雰囲気がつぶ壊れました」

「はははは、まあ頑張れや。そんじゃあな。ほらお前たち、俺を捕まえにきたんだろ。このままじゃ逃げるぞ?」

ポケーっとしていた重装兵団に声をかける。我に返った奴らは気を引き締める。

「それでは我らについてきてください」

「はいよ」

「ですから! このように我が民の窮乏を訴えているのです!!

彼らの多くは難民となり貧苦に喘いでいます!! 彼らの犠牲あってこそ現在の平和!!

スカイアースが受け入れてくれているとはいえ限度があります!

! せめてもの援助を……!!」

薄暗く広いホールの中、フードをかぶった人物達が困んでいる中心で、金髪の女性が真摯な態度で訴えかける。その内容は王都が落ち、難民となった民の救済であった。

「フフ…… おっしゃることはよく判りますが、国を滅ぼし彼らを

現在の状況に追い込んだのは陛下ご自身ではありませんか？

さらに言わせていただければ……彼らはもはや貴女の民ではありませんか？」

金髪の女性アリカがなにも言えずに歯を食いしばる。そこへ全身鎧を装備した兵士がアリカを取り囲む。たった一人の女性に対しては過剰戦力だ。

兵士がアリカを取り囲んだ後隊長格の兵士が口を開く。

「畏れながらアリカ陛下」

「なんじゃ主らは？」

「陛下を逮捕いたします」

「……………何故じゃ」

「父王殺し及び『完全なる世界』との関与の疑い。またオステイア周辺の状況報告について虚偽改竄の疑いが持ちあがっております」

兵士の口から出た罪状は陽介と同じようなものだった。

多勢に無勢。男と女。武力と知力。一切の抵抗もできずに牢屋に入れられるアリカ女王。その目に光はなく、ただ信じられないことが起こり、その事実を無理に飲み込もうとしたようだった。

## 第18話 牢屋の中で

ガチャンという冷たい音で鍵が閉められたということがわかる。というか最悪の状況だな。完全なる世界が作ったものを悪用して俺の能力封じてるし、重装兵が常に3人いるらしい。

「なあ、俺は捕まったことになってないんだろ？」

「……………」

「ほら、先輩なに緊張してるんですか。俺下っ端なんでそこまでは知らないんですよ。俺感激です。英雄に会えるなんて！」

「あああああ、あなたははははは、つつつ捕まったことになっておらず、ゆゆゆ行方不明といいいいいうことになっております!!！」

「ホントですか!? 誰がそんなことを？」

「そりゃあ元老院じゃないでしょうが。英雄っていう肩書を持っている俺が捕まるなんて世の中が混乱しちゃうからな」

どーセアリカ女王と一緒に殺しちまおうって魂胆だろ。見え見えすぎて笑いが出てくるわ。

「ところで火陰さんはなんでまた捕まっちゃったんですか。あなたほどの英雄なら簡単に逃げれたでしょうに」

「近くに弟子がいてな、抵抗すると殺されそうだったからな。いつの時代でも正義の魔法使いとやらは変わらんよ。目的のためには多

少の犠牲などなかったことにする」

リーシャもそうだし賞金首と一緒に人質を殺す奴もいた。この戦争と紅き翼の影響で馬鹿が増えないといいなあ。……………無理か。

「……………そ、そそそつういえばあああなたは吸血鬼のしし真祖なんですかかか!？」

「少し落ち着けて、かみすぎ」

「そつつすよ先輩。こんなにフランクな人なんだからビビることも緊張することもないつすよ」

「俺は吸血鬼の真祖なんかじゃないぞ。1人知ってはいるけどな。俺が長い間生きてんのはスカイアースにいたからだよ」

「スカイアースってあのスカイアースつすか!? 入国したら二度と出てこられないとか、国のトップの数人が不老不死だとかいう噂がある!？」

「どんな噂だよ…………… 技術を盗もうとしたやつは出てこれないけど正規の手順を踏めば簡単に出れるぞ。 不老不死っていうのは本当だな。見たことがある」

結構どうでもいい情報は漏れてるんだな。おい、なんで動きを止める。硬直するなよ。

「マジで不老不死がいるんすか!?! うおおおお!! スカイアース行ってみてええええ!」

「マジかよ…………… いままでどれだけ研究しても出来なかったことなのに」

「そりゃあ魔法じゃなくて科学方面だからな」

「科学？」

おい、全身鎧2人がコテンと首を傾げるな。シユールな絵にしかならん。あれだなこいつらのイメージは固まった。くっす口調のやつはチャライ感じでかみまくりの方はおっさんっていうイメージでいこう。

「ああ、科学だ。科学って言うのはなある対象を一定の目的、方法のもとに実験、研究し、その結果を体系的に組み立て、一般法則を見つけたし、またその応用を考える学問だ」

「え？ え？ え？」

「つまりだ、世の中の様子がどうなっているかということを探求する学問だ。例えば……………」

全身を拘束されているので芋虫みたいに地面を這って鉄格子のところに近づく。そして鉄格子をみるようにする。

「この鉄格子に使われている鉄はどんな構造で出来ているかっていうこととかを調べるんだ。」

元の話に戻るが人デオキシリボ核酸っていうのがあってな、そのデオキシリボ核酸には人の寿命、つまり細胞の分裂回数が記録されているんだ。人間が死ぬっていうのはその細胞分裂の回数が限界ま

でいってこれ以上分裂できなくなることなんだ。それで、だ。こゝまで聞いて人を不老不死にすればどうすればいいと思う？」

魔法使いには難しいか？ 暇つぶしにはなるしいいだろ……

「その細胞つてやつを無限に分裂させる……ですか？」

「そうそう！ それをさせるにはどうすればいい？」

「……デオキシリボ核酸に……回数が記録……無限にするには……あ、そのデオキシリボ核酸とやらをいじくって無限にするってことっすか？」

おおお、この人たち予想以上に頭がいい。こいつら絶対科学者向きだろ。

「そうだ。要するにスカイアースはデオキシリボ核酸に記録された情報を変えることが出来るんだ。俺の不老不死はそういうことだ」

「おおおおおー！ さらに行ってみたいくなっただっすー！」

「むじ……」

腕を組んで唸るおっさん。そんなに悩んでどうした。老けるぞ？

「先輩そんなに唸ってどうかしたっすか？ 老けるっすよ？」

「うるさいわ！ いや、科学って言うのに興味がわいてな……もう少し知りたくなっただ」

「お、そんな俺が教えようか？ 一応大体のことは知ってるぞ」  
こいつら引き込もうか。すぐに馴染む気がする。

「お、お願いします！！」

「あ、俺もお願いするっす！」

「よし、まずペンと紙持ってきてくれ」

叩き込んでやろう。俺が知っていることの全てをな。早速教えよう。  
っす口調がダッシュで外に出ていく。あの鎧重くないのか？

「とりあえず手をほどいてくれるか？ なにも書くことが出来ん」

「しかし……………」

「安心しろって逃げ出したりはしない。逃げだしたらまたお尋ね者だよ」

またお尋ね者にはなりたくないぜ。もうコリゴリだよ。

「せんぱああああああい！！ 大変っす！ 大変っすよ！！ ア  
リカ陛下が！！！」

「どうした？ そんなに慌てて」

「アリカ陛下がたい、たい、逮捕されてるっす！！！」



くそっ、やられた。無理にでもついていっておけば……………

「おい、なんで連れてこられている…！」

「分かんないっす…！」

コツコツという音とガシャガシャという音が近づきってきて俺のいる牢屋の前でとまる。

相変わらずピンと背筋を伸ばしているが目はなにも映していない。アリカ女王が拘束されていた。

「おい、アリカ女王なにがあった…！」

「お主か。2年後に処刑じゃと。虚偽改竄、完全なる世界との関与の疑いじゃということと逮捕じゃ」

「クルトはどうなっている…！」

「クルトは無事じゃ。ある元老員のところにおる」

「そうか……………」

顔を伏せるアリカ女王。俺がついていかなかった間になにがあった。俺がいる牢屋の鍵が開けられアリカ女王が檻に入れられる。俺と同じように全身を拘束されている。

「陽介しばらく話しかけないでくれ」

「あ、ああ分かった」

壁際に行きじつと座りこむ。鉄格子の方向へ顔を向ける。今気付いたが元老員が口元に君の悪い笑みを浮かべたまま口を開く。

「おやおや、元一国の女王に元賞金首の英雄。なにがあつたんでしようなあ。このような所に入れられるとは」

「お前らのせいだろうが。完全なる世界とつながってついにボケたか？ ああすまんもうその年だボケても仕方ないさ。ま、俺のじいさんは死ぬまでシャツキリしてたけどな」

「完全なる世界？ 何のことやら私にはわかりかねますな。それに私はまだボケていませんよ」

「それじゃあ全世界に証拠をばら蒔いてやろうか？ 腐れジジイが」

「出来るならすればいいですよ。私はまだ75です。600歳以上のジジイにいわれたくはないですな」

「ぐぬぬ……………」

フードを翻し去っていく元老員。この腐れジジイいつか潰す。

「英雄といえどここから逃げることは不可能です。無駄なことを考えないでください」

隊長格の兵士もどこかにいって近くに居るのはアリカ女王、俺、あの2人だけになった。

アリカ女王は話しかけても無駄なようなので2人に教えることにする。

「おい、始めるぞ。ほらそのつす口調それ貸しな」

「自分はヘルガというっす」

「私はダーラですよろしくお願いします」

「ヘルガにダーラな。よし、なにを学びたい？」

「自分、デオキシリボ核酸とかいうのをもっと知りたいっす」

「私は鉄はどんな構造かというのが………」

「なんでそうなるんすか。タイムマシンで過去に戻って親を殺したとしても自分が生きている可能性があるってどういうことっすか！」

「だーかーら！！ 一元論と多元論で考えろって言ってるんだろっか！！ 一元論は時間の一つだけと考えて多元論は時間はいくつもあるって言ってるんだろ！ パラレルワールドだよ！！」

「もっと分かりやすく説明してくださいって言うてるのが分からないっすか！！」

「一元論なら自分が生まれる原因をなくせばお前は消えるけど多元論でいえば親を殺したお前と殺さなかったお前、二つになるだろうが！！ もしあなたが、あなたが生まれる前の両親を殺害したら、あなたは生まれるか？ いや、それ以前にあなたは殺人が可能かってことだよ！！」

ものすごいめんどくさい。少しは考えやがれ！！

「げ、なんか来たっす。また後でっす」

誰かが来たのでヘルガが元の位置に戻る。ダダダダと走っているようだ。

「アリカ様、 師匠！！」

「クルトか、久しぶりだな。調子はどうよ」

クルトだった。腰には俺がやった拳銃をぶら下げている。見ない間に随分と大きくなっている。

「最悪ですよ。アリカ様も師匠も捕まりますし！　アリカ様、何故抵抗されなかつたのですか！！」

「……妾が、妾が多くの憎しみを引き受けて処刑されることで世にある不幸を少しでも減らせるのなら本望じゃ。このまま……捨ておいてくれクルト……」

壁を向いていたアリカ女王はそのままとても小さな声で呟く。

「クルト、今は力をためろ。今何とかしようとしても揉み消されて潰されるのがオチだ」

「ですが！　あと2週間しかないんです！！」

「俺は死ぬ気もないしアリカ女王を死なす気もない。信じる」

どうせナギが助けに来る。来なかつたときは俺が助ける。

「分かりまし……た」

歯を食いしばり立ち去るクルト。それをみたヘルガが小さな声で話しかけてくる。

「いいんっすか？　なにするか分かんないっすよ」

「いいんだよ。アリカ女王、その考え方は素晴らしいが最も馬鹿な考え方だからな。そんぐらい分かつてるよな」

「……………」

自己犠牲なんかいらぬ。残されたやつのことを考えてない。だから馬鹿な考え方だ。アリカ女王はなにも答えない。

「答えないか。まあ、その考え方はもうすぐ変えさせられる。覚悟しといたほうがいいぞ。」

「さあ、ヘルガ時間もあつたし理解できたか？」

「急に話変えないでほしいっす」

「お前、理解してないだろ。図をかいてみるよ図を」

「どついう図を書けばいいんっすか？」

「人任せすぎるんだよお前は！！」

「だって自分実験がしてみたいっす。もう文章なんていやっす」

「それならここから出してくれ」

「無理っす。自分そんな権限はないっす。それ以前に鍵持ってないっす」

「即答かよ。お前鍵持つてるだろ。その腰のはなんだよ」

「自分には見えないっす」

処刑まで残り2週間

第18話 牢屋の中で（後書き）

うおおおおおおおお!! 薄っぺらいいいい!!!!

次はアリカの救出、元老院フルボッコタイムです。wktk!!  
え？ 新キャラ？ もう出番はないけど？



## 第19話 記録にないところ

### 処刑執行日当日

「魔獣うごめくケルベラス渓谷。魔法を一切使えぬその谷底は魔法使いにとってまさに死の谷。

古き残虐な処刑法ですが……この残酷さを持ってようやく魔法世界全土の民も溜飲を下げることになりました。そして、ハイ・デイトライトウォーカーでも復活は困難ですので最高額の賞金首も復活はできないでしょう」

重装兵が大量にいるなか他より高い場所から元老員が得意げに言い放つ。

「歩け！」

「触んな気持ち悪い。お前生きてて楽しいの？ 動けないやつに武器向けるとかそれでも男か？ あ、ごめん男じゃないから向けてるんだな。もうほんとお前が落ちろよ。おまえが存在しようが存在しまいが誰も傷つきもしないから記憶から消えていなくなれよ。というか息すんな。大地の謝れ酸素に謝れいままで食べた物に謝れ。お前に食べられるとか世界破滅級の屈辱だろうよ。俺が食材でも嫌だ。息臭いんだよ汗臭いんだよもうちょっと体臭をどうにかしろよ。あ？ 俺？ 俺はこの二年間拘束具を解かれたことが無いんですか？ 見てわからないか、髪も伸びてリアル貞子になってるだろうが分かんないか？ 見てわかれよ。言わせんな恥ずかしい。ホントにお前が食われるよ。このくらいで泣くとかお前本当に男じゃないな。なんで生きてるし」

「グスッ」

牢屋出たら能力使えると思ったらここでも対策ばっちりとか。もうくたばれよ腐れジジイ。

武器を向けてきた奴に暴言を一通り吐く。男が泣いても気持ち悪いだけだから。

「歩いてほしいっす」

「近寄るな下郎。言われずとも歩く」

「泣きたいっす」

アリカは迷いもなく処刑台の一番先まで歩く。そしてそこで立ち止まる。

どうせつまらんこと考えてんだろ。さっさと逝こつ。

「その腐れジジイお礼参りしてやるから残り短い人生を楽しんどけ」

「おお怖い怖い。余生を楽しむとしますかな」

これ以上気持ち悪い視線を見たくないのですささと飛び降りる。目の前には口の中に口がある魔獣。あ、これってあの時のあの森のじゃないか？

ガアアアアアア

そんなことを考えている間に魔獣との距離は近づき回避不能な距離になる。そのまま口のみ込まれる。視界の端にはすでにナギに

抱かれたアリカ女王が見えた。

「バーカあんたを助けにきたんだよ」

「え？」

「だっしやらああああ！！」

なんか桃色空間が展開されたのでイラツときて力のみで魔獣の腹を突き破って出る。そのまま崖を駆け登る。発火布でつくった手袋を両手にはめる。もちろん錬成陣を書いてある。錬成陣を書くときこし負担が減るから書いた。

登る最中にラカンの声が聞こえてくる。

「おおつとやるのか？ いいのかよその程度の戦力で」

「ふふ……その程度の戦力だと？ 愚か者が、このイベントの警備はここに見えるだけではない。周囲数十キロ二個艦隊と三千名の精鋭部隊が包囲している。いくら貴様らでもこれを……」

一番潰したいやつので意げな声が聞こえる。崖を登り切り空中で体を小さく抱え込みながら飛びあがりながら腐れジジイに顔を見せる。ラカンが何かを言ったのか何か腰が引け気味だ。ラカン達は骨を鳴らしたり刀を抜いたり、ポケットに手を入れたり重力球を出し

たり既に臨戦態勢だ。

「だからその程度の戦力でいいのかって聞いてんだよ」

「お礼参りの時間だ！！ とつとつその場で土下座をして泣き叫びやがれ！！」

フィンガースナップで火花をつけ塵を媒介に腐れジジイの足を燃やすのを狙う。一瞬で炎は連鎖し腐れジジイの足に着火し焼きつくす。

「あ、足が！ 私の足があああ！」

「つたくどうしてくれんだよ。2年も監禁生活だ、お前もやってみるか？ 見る、この髪の毛の長さ、この関節の可動範囲も小さくなってる。元に戻すのにどれだけかかるか分かってんの？」

「お、おい、おまえたち！！ 反逆者だ捕まえる！！」

こいつまだ足掻くか。両足はなく焼けただれた足の痛みで顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃのくせに生意気な。その上俺を捕まえるなんて。こつこつこのを老害って言うんだろつな。

「無理に決まってるだろオがよオ！！ クルトオ！！ こいつら叩きのめせエ！！」

「師匠、アリカ様は無事なんですか！？」

「ナギがもう助けにいつてるよ！！」

「思いつきり行ってもいいんですよ!! 返事は要りませんけど  
!!」

腐れジジイの両手も燃やす。刃物で切ったら血が出るところだが  
炎で燃やしつくしたから血は出ていない。クルトは出し惜しみなし  
で突っ込んでいってる。ものすごい暴れてる。タカミチ暴走バージ  
ヨンに近い。あれには近づきたくない。現に兵士も突っ込むのを戸  
惑っている。

「腕があああああ!!」

「お前いけよ!!」 「俺行きたくねえよ! 殺されそうなんだけど  
!!」

「ほら、なにをしてるんですか!! 早く動かないと間違えて殺し  
てしまうかもしれませんよ!!」

「ぎゃあああああ」 「こっちくん!!」

「き、貴様の望みはなんだ!! 金か! 地位か! 名誉か!?  
何でもくれてやる! だから見逃してくれ!!」

「なに言ってるの? 金は充分あるし、スカイアースで地位もある。  
名誉なんて英雄って言う肩書もあるんだぜ。馬鹿じゃねえの?」

もう一回フィンガースナップ。眼球を焼く。

「目が、目があ!!」

「おーおーどしたあ、おまえが処刑してきた奴はそれより苦しんで  
たんだぞ分かってんのか?」

「わ、私は正義だ。悪を処刑して何が悪い!？」

「誰か、誰か私を助けてくれ!!」

「まだ生きようとしませんか腐れジジイ。その根性に免じて紐なしバ  
ンジーで済ませてやるよ。やさしいな俺。本当なら弱火で焼き続け  
たいんだがジジイの肉の匂いなんて嗅ぎたくないのでパスってこと  
で」

腐れジジイの首を鷲掴みにして溪谷のほうへ投げる。あの間隔は  
もう味わいたくない。内臓がふわってなって下には猛獣以上の凶暴  
さを持った奴らが口を開けて待っているとかもう抵抗しても無駄だ。  
あのジジイに出来ることはない。

あーすつきりした。こつちが動けないからって蹴り飛ばしやがっ  
て。暴れてるみんなのところへ行く。

「よお久しぶり、みんな」

「おお陽介、久しぶりじゃな。……………誰じゃ?」

「ゼクトくううん!？」

ジリジリ後ろにさがるゼクト。2年間髪を全く切ってなくてリア  
ル貞子になってたの忘れてた。

「おう陽介、お得意の銃はどうした。テメエ誰だよ!？」

ラカンもですかい。名前呼んどいて直ぐ誰だとか言われるとか。

「陽介ぶじだつ……………貞子か、それほど珍しくもない。神鳴流奥義…

…」

「待ったああああ！！ 俺妖怪とか幽霊じゃないから！！仲間の事をそんな簡単に忘れませんか！？」

「ああ、本物か。紛らわしい」

「何気に詠春が一番ひどい」

俺を見るなり技を繰り出そうとする詠春。納得できない。

「先生、お仲間の攻撃に容赦がないっす！！ 助けてほしいっす…  
………かすった！ 今殲滅魔法が掠ったっすううう！！」

ヘルガは火がついたようなスピードで走り回る。ダーラは隅っこで小さくなってガタガタ震えてる。

「陽介は少し休んでたらどうだ？ 動くのもひさしぶりだろ？」

「ガトウの優しさが心にしみる。あ、たばこ持ってる？」

「ほら、好みに合うかは知らんが」

ガトウが差し出した煙草をくわえ、火をつけてもらう。

「あー2年ぶりだ。うめえ」

煙草を吸っている間にも6人は容赦なく殲滅していく。ゼクトは千の雷を連発して打ってるし、ラカン目は目からビームを出している。お前何者だよ人間じゃないだろ。ガトウは咸卦法の密度がいつもよ

り高い。その状態で居合い拳とか敵がもう泣いてるんだけど。詠春は雷光剣バンバン使って奥義も出血大サービスみたいなノリで使っている。

「で、アル？　なんで俺にも重力かけてんの？　これ600倍以上だろ」

「仲間になにも言わずにどこかに行き捕まったバカに対するお仕置きです」

「男にお仕置きされても嬉しくない。されるならお姉さんタイプがいいです……」

「フフ………実は私は女なのですよ」

「ないないないだろ、それはない。」

「ダウト。嘘ぐらい考えてついたららごうだよ」

「今はそういうことにおきましようか」

遠くにナギとアリカ女王が杖の上に立っているのが見えるのでそろそろ終わりにしよう。

「よし、終わりにしよう」

手を打ち合わせ地面につける。手をつけたときに青い光がほとばしる。地面が大きく動き兵士たちの体が傾く。

「なんだこれは！？」「地面が、こっちに……！」「うわあああああ」



地面から土が伸びてきて全ての重装兵の四肢を拘束する。

「おほ、陽介か？」

「俺しかいないだろ。他に誰ができるって言うんだ」

「このバグキャラめ、なぜこんなことができる」

「あれだよ、グニヨグニヨって感じの真理をみたからだよ。本当はこんなこと出来ないからね」

「このデバックできないバグめが」

「デバックできないバグってヒドイぞ！？ あ、でもガトウもゼクトも胃が痛いって顔してるし反論できない。むう……………」

「して陽介、あそこで泣きついておる2人はなんじゃ？」

「あ、こっち側っての忘れてた」

「助けてっす！！ ヘルプミーっす！！」

「それでお前たちはくつつく、結婚すると?」

「ああ、自慢の嫁だ!」

「ナ、ナギ! 恥ずかしいことを言うでない」

「ホントの事を言ってなにがだめなんだよ?」

「妾が恥ずかしいではないか!」

なんか甘ったるい空間ができてるんだけど。正直鬱陶しい。他のみんなも顔をしかめているから同じ気持ちなんだな。

「鬱陶しいからやめてくれないか」

「嫌なのじゃ」

「嫌だぜ!」

またいちゃつき始める2人。

………あ、切れちゃいけないモノが切れた音が聞こえた気がする。

「鬱陶しいからやめよって言うてるよな? な? な? な?」

「見なきゃいいだけの事だろうがよ」

「そっじゃそっじゃ」

ははッ、ハハハ。ハハハハッ、ハハハハハハハハハハッ!!

「おいナギなに言ったんだよ？」

「今すぐ原因を教えるのじゃ！！　これはマズいぞ！　目の光が消えておる！！」

「ああ、久しぶりに仲間が揃ったと思えばこれが」

「煙草がうまいな。しかし金がジェットエンジンをつけて飛んでいくんだよなあ。禁煙してみるか？」

あーハハハ。泣きそうだな。

「ナギ、このようなのは放っておくのか」

「そうだな！！」

またいちゃつき始める2人。

「年齢〓彼女いない歴のオ俺に対するあてつけですかア？」

「フフ……そのようですね。さくらんぼくん？」

「当てつけなんかじゃねーよ」

アルの言葉がグサツと刺さる。涙が出そう。

「年齢〓彼女いない歴〓1000年以上いない俺を気遣ってくれない？　ね？　ね？」

「え、陽介マジで！？ プププ、要するに童……モゲラツ！？」

「言わせねーよ！？ それ以上言ったら不能にして絶望した後には性転換させる」

「おいラカン！！ 目を覚ませ！！ 死ぬぞ！！」

「ねえどんな気持ち？ ねえいまだどんな気持ち？ 自分の目の前でいちやつかれてどんな気持ち？ ねえねえ。ねえってば。答えてよ、ねえってば。」

「ナアアアアアギイイイイクウウウン！！ 覚悟は十分かア！？」

「上等だぜ。いる奴といない奴の差を見せてやる！！」

「陽介、わしもじゃから！！ わしもできたことないから！！ おぬしと同じじゃから！！ ナギも煽るでない！！」

「へっ、シヨタお師匠の万年童………無詠唱で広範囲殲滅魔法！？」

「言わせないのじゃ。ナギ、おぬしはわしを怒らせた！！」

「次はどこに行くんだ？」

「そうじゃ詠春の故郷の日本に行くつもりではないか」

「私の故郷ですか。わかりました」

「その前にアレが落ち着くのを待たなければなりませんかね」

アルビレオが遠くで爆炎を上げる地点を見つめる。そこには3人が血走った目で相手を睨みながら魔法や炎、銃弾をばらまいていた。

「ホラホラホラア！！ どうしたどうしたどうしたア！！」

嫁の前でそんな姿見せるなんて情けねエなア！！ そんなんだから吊り橋効果のあるようなときにしかできなかつたんだろオ！？」「

「ほれ、どうしたのじゃさきほどの威勢は何処へ行ったのじゃ？  
ふむ、実はヘタレということかの」

「誰がヘタレだゴラあ！！ 『雷の暴風』！！」

「ゼクト、俺が防ぐ。特大の頼むわ」

「分かったのじゃ」

陽介が手を打ち合わせ地面に付けると、土が盛り上がり壁になる。

雷は土でできた壁に当たり消滅する。雷と同じように土でできた壁も崩れ落ちる。

「『燃える天空』!!」

「俺も追加しといてやるよ」

ナギの周辺に超音音の炎が発生する。陽介はフィンガースナップではなく手のひらをこすり合わせ発生する火花を大きくしナギに向けて火を連鎖させる。

「なめてんじゃ……ねえぞさくらんぼが!!」

「殺す」

「殺してやるのじゃ」

「終わりそうにありませんね」

「そうだないつ終わるかわからんな」

詠春が呆れた顔で答える。その隣では重装兵の鎧を着ているが頭の部分は取り外している2人が目を輝かせて爆炎のあがる地点をみつめている。

「すげーっすね、先輩」

「ああ、なにを食べたらあそこまで強くなれるのか……」

「あれはどう頑張ってもなれない領域だ。諦めたほうがいい」

「ですっすよねー。しかしすごいですよねー」

「あいつ銃しか使わなくせに人の太刀筋を完璧に真似するやつだからな。俺の修行時間を返してほしい」

詠春がもういやだというような表情を隠そうともせず顔に浮かべる。

「先生って剣も使えたんすね」

「らいつこおけん!」

「『紫炎の捕らえ手』!」

「ぞん……ま、けえええん!」

陽介はよその流派の技を惜しげもなく放っている。詠春以外の流派の人が見たら卒倒するような光景だ。そこにクルトが爆弾を投下する。

「でもナギさんも今は師匠やゼクトさんと同じですよ?」

この後は自分で考えるべし。

第19話 記録にないところ(後書き)

今回はびくびくしながら投稿します。

次はアスナが出てくるよ！ 楽しみにしてね！！



第20話 京の街で（前書き）

なんかグダアって感じですよ。

## 第20話 京の街で

「陽介、肩車」

「またか。ラカンの方が背が高いし、ガトウにやってもらったら飽きともらえるぞ?」

「ラカンは痛い。ガトウはくさい」

「俺もたばこ吸ってるんだけど」

「陽介の匂いは好き。ガトウのは嫌い」

「……………くさい? やっぱ禁煙するか」

京都に来てからアスナ姫は度々裾を引っ張って肩車を要求してくる。

助けに行つたときに最初に出会つたからか俺に懐く懐く。常にベツタリ。アリカ女王がチラチラと見てくる。そんなに信用ないか?

「おい、詠春なんだあれ!! 顔が真っ白なのが歩いてるぞ!?!」

「写真撮らせてくんねーか?」

「頼むからジツとしてくれ!! 警察が来てしまう!」

「ニンジャと言うのはいないようですねえ」

「この八ツ橋とかいうのはなかなかうまいのう」

舞妓さんを見て騒ぎ出すバカーズ。アルは珍しくキョロキョロとせわしなく辺りを見回す。ゼクトといえば買った八ツ橋とかをその場で食べて幸せそうな顔をしている。

「この緑茶というのもうまいのう。これがわびさびというやつかの？」

出された緑茶と八ツ橋のコンボでへニヤアと顔を崩すゼクト君。

「ねえ、ボク？ こんな所でなにしているの？ 大人の人はおらんの？」

「む？」

そんなゼクトにつられて人の世話が好きそうな着物美人さんが声をかける。

「そんなにおいしいの？ 八ツ橋」

「うむ、この緑茶にも渋みの中に甘みもあってまたおいしい」

「フッフ、そうなの。それにしても随分古めかしい言葉を使いはるのね」

「それは……」

「あ、ゼクトずりーぞー！」

へニヤアとしたまま評論家みたいに返すゼクトに口を袖口で隠し上品に笑う着物美人さん。そこにゼクトが舞妓さんとはなしてるの

を見つけてジャックが駆け寄ってくる。

「お師匠、知り合いか？」

それにつられてナギもやってくる。バカースが揃う。厳つい上半身裸の筋肉男が近づいてきたので、着物美人さんは少し逃げ腰になっている。

「日本に来た記念に写真撮らせてくれ！！ ハアハア」

これ以上は法律、道徳、見た目にもアウトだから止めることにする。

「アスナ姫、少し降りてくれ。あいつを止めてくる」

「わかった。遠慮はしなくていいから」

「元からそのつもりだ」

アスナ姫に肩から降りてもらう。粘るかと思っていたらすぐに降りてくれた。多分視覚的に嫌だったんだろう。

ジャックに近寄り側頭部に勢いをつけて飛び膝蹴りをかます。気で強化するのは忘れない。

「着物美人ハアハア……ガッ!？」

「はいどうも、ウチの馬鹿どもが迷惑かけました。スイマセン、もうこのようないことが無いよう、徹底しますので勘弁してください」

「ウチはなにもされとらんから大丈夫や。それよりその方は大丈夫

夫なん？」

気絶したジャックをほっといてひたすら謝る。優しい人みたいで笑顔で許してくれた。優しい人だ心配もしてくれるなんて。

「その心遣い感謝します。コイツは気合いでなんでも出来ると言ってる馬鹿なので爆撃うけても大丈夫です」

「フッフ、気合いでなんでも出来るですか。面白い方やね」

「陽介エエエ！！ なにをやったあああ！？ いまなら謝り倒せば……………」

俺が謝り倒しているのを見てダダダと駆け寄ってくる詠春。勘違いだ、俺はなにもやってない。ジャックは勝手に倒れただけだ。

「あら、青山さん。こんな所でどうされたんですか？」

「こっつ、近衛殿！？ どうしてここに！？」

「少し出歩いていただけです。もしかするとこの方たちがお仲間の方々？」

駆け寄る詠春に気づき声をかける着物美人。どうやら面識があるみたい。詠春の顔が真っ赤になりテンパっている。

「え、ええ。私の仲間です。これでも強いんですよ、私たち」

「そうですね。帰ってきたということは終わったんですね？」

「はい。無事戻りました」

「はい、おかえりなさい。お疲れさまでした。そうや、お仲間の方に挨拶をしませんでした、お仲間の方はどちらに？」

「ああ、少し待っていてください。

陽介、みんなを呼んできてくれ」

「はいよ。あとでその美人さんとの関わりを教えてもらうからな」

「美人なんていわれると照れちゃうじゃないですか」

詠春に言われたとおりみんなを呼びに行く。ゼクトとナギ、ジャック、アスナ姫はもういるので除外。アルは大仏の前で認識阻害魔法と浮遊魔法を使って飛びながら「おお！これがダイブツですか、素晴らしいです」とか言ってるのを発見したのでサマーソルトキックで撃墜。ローブを引っ張って連れて行く。ずいぶんと軽い。

ガトウを発見。店先で煙草を燻らしながら物色中。

「ガトウ、詠春が集まってくれだつてさ」

「陽介か。なんでまた急に？」

「なんかすげー着物美人と楽しそうにはなして仲間を紹介してくれつて言われてた。もげろ」

「そうか、あと誰がいないんだ？」

「アリカ女王だけだから先行つてくれゼクトがハツ橋食べてフニヤアとしてるからすぐわかるから」

「わかった」

ゼクトがフニヤアってしてるだけでわかったのか？ やはり、捜査官としての必須能力なのか？ そんなくだらないことを考えながらアリカ女王を探す。

いない。どこを探してもいない。ナギのやつ自分の嫁さんの手綱くらい握っとけよあの馬鹿。  
トボトボと詠春たちのところへ戻る。

「陽介、遅いのじゃ！！ 見よ、ゼクトが満腹になって寝てしまったではないか！！」

「こんの女王どこにいやがった。探しても探してもいないから誘拐されたかと思ったじゃねえか。アル、カメラだ」

「ナギについておった」

「はい、どうぞ。もう撮っていますよ」

ゼクトの寝顔を撮る。後でからかうネタに出来そうだ。というかアル、シヨタコン臭がにじみ出てるからやめれ。

「近衛殿、全員揃いました。私の仲間です」

「では、改めて。はじめまして、近衛花乃香です。どうぞよろしゅう」

「すげー、大和撫子ってやつか？ アリカがしても似あわねーな」  
自己紹介をし、礼をする着物美人さん。礼をする仕草も綺麗だ。

「それで、だ。詠春、この着物美人こと近衛嬢とはどういう関係だよ」

尋問開始い、酌量の余地はあまりない！！

「え、えっと、幼い頃からの知り合いでな……………」

「知り合いなんてよそよそしいです。青山さんとは許婚なんや」

「ちょ、近衛殿！？」

「死亡フラグというやつですね、詠春？」

「許婚ってなんだ？」

「うらやましいじゃないか詠春？」

「ドンマイ詠春。それ死亡フラグ」

「ほほう、こんな美人の嫁確定の人がいるのに自慢するのではなく隠して知り合いとは……………」

「よ、陽介？ どうした？ 腹でもこわしたか？」

「えーしゅん？ なんでだ？ 謝れよ、主に俺に。あ、近衛嬢少し詠春を借ります。生きて返しますので安心してください」

「あんまり厳しくせんといてなー」

首根っこを掴み引きずって見えない所へ必死で抵抗する詠春を連れて行く。はは、羨ましいなあ。



「ちょ、陽介なんでその手袋をつけて……目が死んでるんだけど！？」

「ハハハ、大丈夫ですたい。ちょーっち俺とお話しようジャマイカ。」

「言葉がおかしくなってるから!!！」

「ゼクトー見る見る」

「なんじゃ子供みたいに手を振り回して」

何枚かの紙切れを頭上で振り回しながら注目させる。ため息をつきながら俺の手元を見つめる。

「これなーんだ？」

「なっ!？」

「いやーゆるみきった表情したまま寝ちゃってたから。通りかかった人も和んでたぞ」

俺の手にあるのはゼクトの寝顔。涎を垂らしてる写真もあるし、遠くから撮った通りかかった人が和んでいるのもある。

「わ、渡せ！ 今すぐ渡すのじゃ！！」

ピョンピョン跳ねて俺の手から奪い取るうとするけど身長が足りない。ものすごい足りない。

「手を上にあげるでない！！ 下ろすのじゃ！！」

「ゼクトくん、頬になにかあとがついてるけど何なんだ？」

「え？ ……こ、これはワザとつけたのじゃ。決して手を枕にしたからではないのじゃ」

頬に手をやって確かめるゼクト。残念だけど嘘ではない。ついでに口には八ツ橋についていた粉もある。

「あら、可愛い寝顔やね」

「お師匠のこんな顔始めてみたぜ」

「『火よ灯れ』！！」

ゼクトの指先から火が飛び出て俺の手にある写真を燃やす。

「熱っう！？ あ！ 写真が！！」

「フン、証拠隠滅じゃ」

顔を向けると誇らしげに笑うゼクト。だが甘い。

「ハハハ！！俺が予備を作ってないとしても？」

懐からさつきより多く写真を取り出し両手の間でバラバラとアーチをつくる。

「なん……じゃ……と……？」

「うほ、すげえ枚数。いつの間にかやったんだよ」

「フハハハ、俺にできぬ事はあまりない！！」

できぬ事って言うても時間移動や次元移動、無から物を創ったりする事ぐらいしかない。あ、でも超鈴音は時間移動してたっけ。

「フフフフフ、よかろう。陽介がその気ならワシも切り札を切る  
う」

なんか雲行きが怪しい。

「のう、皆。コイツ顔はいいよの？」

「ああ、ナンパでもすりゃあ直ぐに成功するよな」

「イケメンですね。ねえ、詠春」

「ああ、それも滅多に見れないような。なあ、ガトウ」

「憎たらしいくらいにイケメンだな」

「そうやね、日本人の顔やのにね」

「そうじゃな。無駄にナギレベルじゃな」

「……嫌いじゃない」「え？俺がイケメン？」

「ラカンは黙っておれ。そう、お主は滅多にいないほどじゃ」

ゼクトが黒い。真っ黒になってる。

「うん、嘘だね。笑えない冗談だな」

「自覚なしか……。まあよい、イケメンからもイケメンと呼ばれる人物のキマっている写真をバラまけばどうなるかの？」

ハイハイ、こっちも前世では近寄るなって言われてたんだ。騙されんわ。

「考えるまでもない、一躍人気者じゃ。さあ、アル。あのパネルを出すのじゃ」

なんでここでアルにはなすんだ？ 考えてることがわからない。

「アレですか。少しお待ちを……。よい、しょ……。と」

アルのローブの袖から明らかに大きさが違いすぎる一枚の板が出てくる。おい、それどっから出した。絶対おかしいだろ。

「じゃん」

「やかましいわー！ なんで星をつけたんだ」

「アル、見せびらかすがよい。絶望を味あわせてやるのじゃ」

2人か顔を見合わせニヤリと笑う。

「デレレレレレ……ハイ、こちらです」

口でドラムロールを言うな。痛い子認定だ。

「見るがよい！！ 寝顔と！！ 煙草を吸いながらキリツとしておる顔じゃ！！」

……あの写真の人カッコよくない！？ キヤーー！！

板には拡大された写真が2枚目並べて貼ってある。やっぱりそこから中にいる顔だなあ、パツとしない。

「うん、燃やす」

フィンガースナップ。板をめがけて炎をとばす。燃えず直前で消える。

「甘いですよ陽介。考えられるすべての対策をしていますから」

「上等だ。ならば！！ この写真をバラまくまでよ！！」

手にある写真を全てバラまく。俺の写真のせいで人が集まっていたので我先にと写真を取り合う。そして硬直する。

「なっっ！？ ならばこれじゃ！！」

ゼクトが板を出す。そこには俺が幸せそうに食事中の写真があった。

「お前なんてモノを！！ それならっ！」

「コレはっ！？ これでどうじゃ！」

「てめえそれいつ撮った！！ 次はコイツだ！！」

「ぐぬぬ、そうきたか！！ コレじゃ！！」

「アル、俺たちだけに認識阻害をかけておいてくれ。あいつらはかけなくてもいい」

「すでにかけてますよ。今のあの人たちと仲間だと思われたくありませんから」

「お前何気にひどいな」

## 第20話 京の街で（後書き）

どうも、ファイナルファンタジー ディシディアデュオデュオデュオ やってたらゴールデンウィークが終わりかけてました。

今回はただゼクトが生きてるよーってアピールしたかっただけです。 どうしてこうなった。俺には、俺にはギャグは無理なようです。

二回書き直しました。だいぶましになった方です。毎日更新される方は凄いですね。その文才がほしいです。

こっから先はただ意味のないことを書き連ねるだけなので飛ばしてオーケーです。

デュオデュオの12、13回目の戦いとレポートをバツチリクリアしました。ラスボスがね、もう馬鹿かアホかという強さでブラックコーヒーをがぶ飲みしてました。

しかし凄いですね。俺は最初に発売されたのは買っていないんですけど、あれちゃんと繋がってましたよね？ なんで前作でFFの主要キャラクターが全員出てこないと思ったたらあんな事があったからなんです。しかもウォーリアのことも予想外でしたし、ラスボスも予想外の人でしたし。ストーリーを考えた人ってすごいですよね。 先を見据えているんですから。皇帝のうぼあーがつぼりました。 狙ったんですかね？

というか俺、FF初めてなんですよね。 2ちゃんねるなどで偶に

目にしてたんですけどクラウドやセフィロスとかライトニングって  
いう人しか名前知らなかったんですよ。さらに名前は知っててもど  
んな人だとかどの作品に出たかなんて全くしりませんでした。でも  
やってるうちに止められなくなっていくの間にかクリアしてました。  
最近のグラフィックってすごいですよね。エンディングとか遠く  
から見たら実写ですもん。なんできれいな人をエンディングにださ  
なかったのか。なんか本編をやってみたくなりました。でも俺の家  
に据え置きハードなんて無いんですよ。ちくせう！ そうだクラ  
イシスコアって本編やってなくてもわかるんですかねえ？エンデ  
ィングすごかったです。何故かクラウドとスコールのやり取りが耳か  
ら離れません。ああ、ライトニングカッコいいよライトニング。  
ラグナの中の人ってゴットイーターのリンドウさんの人でしたよね  
？ ああ、リンドウさん貴方はなんでそんなにカッコいいのですか  
リンドウさん。

そろそろ切り上げときます。でない皆さんの反応が怖いので。  
そうそう、ヴェンのグラフィックが妙にムカつきました。なんでで  
しょうね。

ギルガメッシュ  
wwwwwwwwど  
ごぞの俺様と  
ちがってなぜ  
か憎めない  
キャラです。  
次はリヨウ  
メンスクナ  
ですかね。



第21話 ここまでは英雄の話（前書き）

グダッとしてペラッとしているお話。反応が怖い。

## 第21話 ここまでは英雄の話

「まったく、誰のせいだよ。なんで俺が警察に職務質問をされるんだ。というかあれタイーホ直前じゃなかったか？怖いオッサンと優しいオッサンが交互にきたし。」

「おぬしのせいしかあるまい」

「なんでだよ、ゼクトもやってたじゃないか」

とんでもない写真の公開を始めて30分後ポリスさんたちがやってきて「署に来てもらおうか」と強制連行。仕方がないじゃない。逃げようにも逃げられなかったんだから。

連行されて嘘を嘘で塗り固め騙しに騙して解放。なぜかゼクトは特上寿司を食べてたらしい。俺なんか水だったのに。どうやら誘拐犯がなにかに思われたらしい。ゼクトは特上寿司を食べ終えてから俺が知り合いだと話したらしいせめてもう少し早くしてほしかった。

「やっと戻ってきましたか。心配したんですよ？ 陽介がホモでシヨタコンで疑いをかけられていましたから」

署から出るとアルが待っている。

「誰がそんなことを言った」

「私です」

「やっぱりてめえか。あとで仕返してやる」

しれっと口元を吊り上げて笑うアル。仕返しはスペシャルハード決定だ。

「さあ、皆さんが待ってます、行きますよ」

「何処へじゃ？」

「もちろん詠春の家ですよ」

背中を向けて歩き出すアルを俺たちは顔を見合わせ、後をついていく。迷うのは勘弁だ。それとアル、そのローブをどうにかしろ。警官がずっと腰の拳銃に手を伸ばしてたぞ。

「それですねー、陽介ちゃん、聞いているのですかっ!」

「ちゃ、ちゃん？ まさかちゃん付けで呼ばれるとは思わなかった」

「アルって何歳？」

アルが酔ってるの始めてみた。目が潤んで頬も赤くなってる。んで酒臭い。酒臭いのも当然か。そこらじゅうに酒樽がゴロゴロ転がっているんだから。

アスナ姫の質問については答えられない。だっていくら見ても細

胞の劣化が見られないんだからわからない。

「さあ？ 何歳なんだろうな」

「ずいぶん長生きしてたり。不老不死？」

「あー、それは男女ともに人類の夢だからな。でもアルだからあり得るな」

「思い出しましたっ、陽介！ 私は女なのですよ！！」

いつかそんな事言ってたな嘘だろうけど。

「ハイハイ、嘘もほどほどにな。酔っ払いは水飲んで寝ようか」

「嘘じゃないですよっ。むむむーアスナちゃん、ちょっときてくださいっ」

「ん、わかった」

アスナ姫と外に出て行くアル。ヤバいくらいにヤバい感じがする。

「襲うなよー？ アルう」

「襲いませんー。私女ですからー陽介を信じさせようとするだけですー」

「身の危険を感じたら思いっきり股間蹴り上げろよアスナ姫」

首を縦に振りアルとアスナ姫と一緒に部屋を出て行く。さて、ここからどうしようか。詠春とナギはそれぞれイチャついてるから近

寄りたくないし、ガトウは1人で黙々とスルメを片手に飲んでいる。ゼクトは精神は身体に引きずられるようでもう寝ている。ラカンは

「陽介え飲んでるかぁー！」

「飲んでる飲んでる。もう酒樽3個飲んだよ」

「なんんで足りるかっ。まだ飲むぞ！ ナギも詠春もこい！」

かなりできあがって酒樽と瓶を持っているラカンは酒臭い。ナギと詠春もつれてきて新しい酒樽を開ける。

「おいジャック、どうしたんだよ」

「近衛殿と話していいか。ムサいのより麗しい近衛殿がいい！」

「うるせえ！！ 飲め！！」

2人の口に瓶を突っ込み一気に飲みをさせるラカン。急性アルコール中毒には……ならんか。こいつらだし。

「うーん、も、無理」

「あり？ 二人ともどうしたんだ？ そんな静かになって」

2人の目が据わってくる。ラカンはそんな2人から逃げようとしている。が、許すわけがない。俺も怖い。

「えーしゅん、やるぞ」

「ああ、このバカを酔わせてやる」

「ま、まあ待て2人とも。は、話せばわかる……ってギャアアアア  
！」

詠春に羽交い締めで動けなくされているところにナギが酒瓶を口  
につっこむ。

「ほらあほらあどどん飲めよお」

「カボガボガボ」

それより詠春何者だよ。強化を一切せずに強化して逃げようとする  
ラカンを身動き一つさせないとか。あ、五本目逝ったな。

「ホレホレスルメも追加してやるよ」

「あ、俺のスルメが」

「ちよ、カボガボ、カツボ！」

ガトウの手からスルメを奪い取りラカンの口にねじ込む。ガトウ  
はショボーンって顔で手とラカンの口にあるスルメを交互に見てい  
る。この騒ぎの中心のラカンはスルメを口に入れ、酒樽から直接酒  
を飲まされ動けなくなっている。

「さて、寝るか」

このままだと俺に飛び火する。ゼクトと同じように寝てれば巻き  
込まれる事ない……

ガギャアアアア！！

ハズだよな？

「詠春様！！ リョウメンスクナの封印が解かれて復活してしまいました！！」

「なんだと！？」

それって一応妖怪というか信仰もされてるズバリツ神様じゃないか。そんな化け物の封印を誰が解いたんだよ。神殺しになるかもしれないな。神を殺した生き物ってどうなるんだろ？

「今はまだ復活したばかりで動いてはいませんがいつ動き出すか……」

「そうか……おい、みんな起きろ！！ 暴れられるぞ！」

「ホラホラもつと飲めよお」

「ガボガボガボ……ぶるあああああ」

「スルメ。俺のスルメが」

「ZZZ……」

「すう……すう……」

みんなが自由奔放過ぎて辛い。俺は寝たふりだ。神殺してなんかやばい気がしない？

「陽介えええ！！ なにを寝てるんだああああ！ さっきまで起きてただろうがああああ！！ ほらお前らも逝くぞ！！」

詠春が叫び4人の服の襟をつかみ森の中へと走り出す。急に連れだされて状況が理解できていないナギが首がしまっているのを気にもせず詠春に質問を投げかける。

「なんだよえーしゅん、そんなに慌てて？」

「敵だ！！　ここで活躍しとけばアリカ様にいいところを見せれるぞー！！」

「おっしゃ！！　やる気出てきた！！」

おい馬鹿やめろ。神殺しになるぞお前。というか俺連れてかれてるけど本来のポジションは後方からの狙撃なんだけど。その旨を詠春に伝える。

「俺狙撃兵なんだけど」

「なにを言っているんだ、バリバリの前衛だろうが」

「え？　いや、マジで俺リヨウメンスクナと闘うの？」

そのままどんどんと森をかけ川を越えて湖へと到達する。湖にはリヨウメンスクナが立っている。

リヨウメンスクナとは昔、仁徳天皇の時代に飛驒に現れたとされる妖怪であり、前後に顔が二つあり、腕が前後一對の四本、足も前後一對の四本あったとされ手には弓矢、剣を持っている。動きは俊敏で怪力とされる妖怪で、一部の地域では信仰もある。

そのような化け物を怖がりもせず突っ込んでいく



「うっついいとこ見せてやるぜ!!」

「気持ちワリイ、うぶ」

「これ、イカじゃないか!？」「ガトウはいつまで引きずっているんだ!? そんなにスルメが気に入ったか!? 陽介も早く攻撃してくれ!!」

了解。ああ、これで神殺しか。あ、いやでも、封印するから殺しはしないのか。やる気出てきた。かなり久しぶりな気がする狙撃銃を取り出す。さらに強化パーツを装着する。世界最高の前衛がいるから安心して狙うことができる。

「『千の雷』!!」

「羅漢………インパクトオ!!」

「『極大雷光剣』!!」

「豪殺居合い拳、連打!!」

リョウメンスクナは動けないためモロに喰らってしまい、腕が二本取れ傷口は焼け焦げている。しかし、まだまだ倒れる気配や封印ができる様子ではない。

俺も加わり、さらに削るとしよう。

「デカいの出すから離れて耳を塞いどけ!! 巻き込まれてもしらねーぞ!!」

俺の声に気づき即座にその場から離れる4人。いままでは射線上にいたがご丁寧一直線に開いている。

魔法陣を組み立てる。銃身の根元から中心に点ができ、そこから円に1つ、2つ、3つと展開されていく。今回、転移はさせる必要がないので加速と障壁突破に魔法陣の容量を極振りにする。さらに

初めて使ったときは違って使える魔法陣が12個に増えた。監獄ではヒマを持って余していたので好きなだけ考えられた。

「さて、準備は完了、気合いも魔力も十二分。目指せ一撃、一弾入魂。」

喰らいつけ『獵犬』」

障壁突破の魔法陣を6枚通過し加速の魔法陣を6枚通過して、轟音をたててリヨウメンスクナの頭の両方の眉間を突き抜ける。

……ギヤアアアアアアアアアア！！

リヨウメンスクナの首から上が消える。吹き飛ぶのではなく、塵となる。

「いまだ、封印を……！」

「は、ハッ！」

詠春の号令で呆然とする待機していた術師たちが封印を行う。リヨウメンスクナといえどもあそこまでやれば暫くは一切抵抗できなйдらう。避難していたナギたちがこっちに向かってくる。

「すげえな陽介……！」

「ああ、これはスゴいよ。威力だけは。コストがハンパない」

狙撃銃につけられた強化パーツにヒビがはいり砕け散る。因みにこの強化パーツには大国の国家予算並の金がかかる。

「おい詠春、陽介」

ガトウが真剣な顔でこっちを見てくる。

「どうした？」

「1つ聞かせてくれ」

「なにがききたいんだ？」

しれっと、なにがおかしいと俺を見てくり。うん、いつもだったらねぎらって酒でも飲もうっていうよ。でも、でもね。

「なんでリヨウメンスクナの手を持つてんの？」

ガトウの後ろには太さが成人男性三人ぶんはある腕がドスン。

「スルメを作ってもらおうかと思ってな」

「待てまでマテマテまで待て。スルメの材料はイカで足は10本。ここまでいい？」

「ああ」「で、本題だ。リヨウメンスクナの手足の合計は？」

「八本」

「タコの足は何本？」

「八本」

「ここまでをまとめると、スルメのものとイカの足は10本、タコとリョウメンスクナの足は八本だ」

「つまり？」

「それを干して焼いてもスルメの味はしない!!」

「(、・、・、)」

ガトウの顔がショボーンとなる。期待が大はずれだったみたいだ。

「そ、そんな顔するなよ、俺が悪いみたいじゃないか。とりあえず戻ろう。戻って飲み直そう」

まだあの屋敷の冷蔵庫にスルメが残ってるといいなあ。

木に囲まれた場所にある家の中で俺は呟く。

「ふーん、ここもお前の拠点か」

「ああ、いいだろ」

「それよりこの写真はなんだ？」

小さなガクが2つあり、1つはナギ、詠春、アルが写り、もう1つは俺を除く紅き翼が写っている写真を見つける。おそらく魔法世界に行く前と俺が捕まっていたときのだろう。

「ん？ そうだ、おーいみんな写真撮ろうぜ！！」

「いきなりどうしたんだ？」

ナギの声にみんなが集まってくる。集まったみんなに目的を話す。

「これを見てくれみんな」

「集合写真じゃな」

「そうだぜ。一応これで全部終わったからまた撮ろうぜ！！」

「ふむ、それもいいかもな」

詠春が昔を思い出すように視線が遠くを見つめる。

「それならさっさと撮って解散しようぜ。はやくアリカとイチヤイチャしたい」

「見せつけてんのかゴラ？」

その後は写真を10回くらい撮り直し、ナギの満足できる写真を2つあった写真の中央に飾る。これで紅き翼は解散だ。長いようで短かったな。

「さてとスカイアースに戻るか」

「みな、死ぬでないぞ？」

「安心しろよゼクト。ここにいる奴らは簡単にはしなねえよ」

ナギの言ったことはもっともだ。この中で死ぬ奴がいるわけがない。

「じゃあな。また会おうぜ」

第21話 ここまでは英雄の話（後書き）

一応大戦は終わりなんですけど番外編みたいなのを挟みます？ 文才のない俺がギャグを書こうとしますけど、どうします？  
いないと思いますが、挟んだほうがいいという方は言ってください。  
努力しますので。

第22話 ここからは英雄の息子の物語（前書き）

フハハハハ！！　なんか手がスイスイ動くぞお！！



## 第22話 ここからは英雄の息子の物語

「陽にい、二通手紙がきてるよ。一つはスッゴい豪華だよ。紙は最高級ので匂いから察するにインクも最高級。封蝋も最高級のやつだもん。でも国王宛てになってるね」

「え？ だれから？」

書類を捌いているとリーシャがなにか手紙をもつてその手紙をすかし見ようとしながら俺に手渡す。

本当に誰からだよ。紅き翼のメンバーは念話とかの通信手段を持っているのに。

「えーっとねえ、近右衛門 近衛 って人からだよ。これが豪華なほうね。もう一つは、タカミチ・T・高畑 だって。あ、ボクタカミチって人知ってるよ」

「近衛？ 詠春の血縁者か？ んん？」

豪華な手紙を開く。そこには墨で書かれた綺麗な日本語が並んでいた。

『突然の手紙失礼します。私はマホラ学園長をさせていただいております近衛 近右衛門と申します。』

さて、この度このような手紙を送らせていただいたのは英雄、ナギ・スプリングフィールドの息子、ネギ・スプリングフィールドのことに關してです。近々ネギ・スプリングフィールドがウエールズにある魔法学校を卒業します。そして卒業後にマギステル・マギになるための課題としてマホラ学園で教師をさせるということになり

ました。

しかし、恥ずかしいことながら我が学園に属する魔法使いはプライドが高く、マギステル・マギの本質を間違った視点から見えております。例えばマギステル・マギは悪を倒すだけのものと勘違いをしている者もおります。他にも書ききれぬほどの例えがありますが紙の都合上ここまでにしておきます。

本題にはいりますが、そちらの国におられる英雄、火陰陽介殿の力を借りたいのです。火陰殿は賞金首から英雄になられた方。両方の立場をその身を持って体験しておられるでしょう。その視点からネギ・スプリングフィールドを教育してもらいたいです。

もし、火陰殿の都合がつかなら、後日マホラ学園に来ていただきたい。無理にはいいませんが、来ていただけると幸いです。

因みにこの件にはメガロメセンブリアは関与しておりません。私の独断です。

よいお返事を期待しております。

敬具』

ああ、もうそんな時期か。しかし、何故俺の居場所を知ってるし。

「ふーん、英雄の息子、ねえ。陽にい行くの？」

「タカミチからのと同じだろうし、行くしかないな」

最近はずっと国にいたし、息抜きにはいいかな。ナギとアリカ女王の息子がどんな風に育っているかも知りたいし。行くという主旨の手紙を書き始める。そのとき、リーシャが突然名案を思いついた

ように声をあげる。

「そつだ、ボクもマホラに行く!!」

「は？ あ、コーヒーこぼれた」

腕がビクツとなって注いでいたコーヒーがこぼれ、書いていた手紙が茶色に染まっていく。

「だからボクも陽にいとマホラに行くって言ってるの」

「それは、またなんでだ？」

他の3人もいるし、助手もいるから退屈とかはしないはずだけど。

「だってすぐ帰るって言ってもいつもなにかに巻き込まれて長い間かえってこないもん」

いや、それは不可抗力だ。死に方の人に子どもがすがりついて泣いてるのを見たら助けるだろ普通。でもまあ、今回は危険もないだろうし大丈夫か。

「よし、来たいなら来てもいいよ。危険もないだろうしな」

「ホント？ やったあ!! ボク荷物まとめてくるね!!」

俺の許可に飛び跳ねて喜びを表し部屋を駆け去っていく。そんなリーシャに一言。

「転げるなよー!!」

「キャンッ!？」

マホラ学園の世界樹の根元にある広場に人が集まっている。年齢や性別、服装などに纏まりはないことがわかる。老人もいれば中学生のような少年もいるし、着ている服には和服からスーツ、司祭服、ドレスなど統一感が皆無だ。一部には野太刀や銃、ナイフを持っている者もいる。各人が思い思いの格好で待機していると1人の老人が中央に進み出る。老人とは思えない足取りで進み出る。特徴的な後ろへ長く延びた後頭部、マホラ学園長だ。

「おほん、今日諸君に集まってもらったのには理由がある。英雄ナギ・スプリングフィールドの息子、ネギ・スプリングフィールドのことじゃ。知つての通り魔法学校を卒業した生徒には課題が与えられる。そしてネギ・スプリングフィールドにはここマホラで教師をやるという課題が与えられた!！」

「ほ、本当ですか!？」

「マジっすか」

「ふん、どうでもいい、帰る」

「ま、マホネットに書き込まないと。英雄の息子参上かな？」

「ああ、ネギ君に会うのは久しぶりだな」

「お嬢様に手を出したら斬る」

学園長の言葉に場は騒然とする。ナギ・スプリングフィールドはすでに死亡していると公式に発表されている。生きている間に子供がいたという噂もなかった。そのナギに息子がいて、その息子がマホラにくるのだ、この反応は当たり前だろう。

「そこで、諸君にはよりいっそう気を引き締めてほしい。英雄の息子がいる場所はマホラだとあまりばらさぬようお願いする。以上、解散！！」

学園長から解散の指示が出て各自が自分の意見をあげながら世界の樹の広場から去っていくとき突然それは現れた。

何処にでもあるような木と金属で出来た扉。そこらにある家にあるのならば少し高級という感想を抱くだけだろう。だがこの場には異質すぎる。さらに、一般人にはつかえない魔力が禍々しいほど放たれている。その扉が開かれ中から人が出てくる。

「はあ、なんでパツと転移できないかね？」

「しょうがないよ、核のエネルギーだけじゃ足りなくて魔力も使っているからこんな風になるんだよ」

声色からして男女一組だろうか。いや、その後ろからさらにもう一組扉から出てくる。

先程学園長の話を聞いていた人達は聞き覚えのない声に振り向き、禍々しい魔力そして人影即座に戦闘態勢にはいる。若干遅い者もいたがナイフや銃、十字架、杖、刀など様々だ。戦闘態勢にはいった人の中から黒い肌の男が声をあげる。

「貴様、何者だ!！」

「あれ? ここマホラだよな?」

問いかげに帰ってきたのは困惑した様子が見て取れる声だった。

「なあ、学園長はいるか? この前の手紙を見てきたんだが」

「学園長いたとしても貴様のような不審者に会わせる気はない!！」

とりつく島もない。武器を構えている大勢はゆっくりと包囲網をつくり範囲を狭めていく。そして攻撃に移ろうとしたそのとき学園長がやってきた。

「ガンドルフィーニ君待つのじゃ!！」

「学園長!?! 下がってください、おそらくあなたを狙っています!！」

「え? 学園長どこだ?」

顔を出した学園長に下がるように言うガンドルフィーニ。しかし学園長は無視をして扉から現れた男に近づく。

「こんな夜中にたずねてくるとは礼儀を知らぬようですね?」

「あ? なに言ってるの? 来いっていったのはテメエだろうが。」

学園長の皮肉タップリな挨拶に若干キレかける男。声には出さな

いが隣にいる女も一気に顔をしかめる。そして後ろにいた2人のうち1人は刀を構え、もう1人は懐から何かが印刷されたトランプに近い大きさの紙束を取り出す。

「ほう？　最近招いた人物はおらんのじゃがのう？　招いておらぬのに招かれたと？　奇っ怪奇っ怪真に奇怪じゃのう」

「ああ、そうそう。今から一週間前に俺に手紙が届いたんだがな」

「む？　一週間じゃと？」

男の言葉に眉を動かす学園長。この学園長一週間よりさらに少し前、ある有名な人物に手紙を出していた。

学園長の様子を気にも止めず着ていたコートのポケットに手を入れ中から紙を取り出す男。

「招いてないんだっいたら帰っていいよな？」

「そ、それは！？」

「俺にスカイアース国王から渡された手紙だけど？　なにか問題ある？」

男の顔の高さでひらひらと揺れる紙を見て顔が青ざめていく学園長。青ざめるなど生ぬるく真っ白になっていた。

「まさかあなたは」

「あんたが来てくれといった人物だ。まあ、招かれてないんだったら帰ってスカイアース国王に報告しないとなあ？　マホラ学園長は

自分が来てくれと手紙を出していたのにいざ、行ってみると招いてなどいないと言われました。私も戦争の被害に遭っている人たちを助けるのを止めて行ったのに、この対応は如何なものでしょうか。とね」

朗々と台本を読むかのように言った言葉にガタガタとふるえ出す。学園長は思う、とんでもないことをしてしまった。と。

「申し訳ない。こちらの勘違いじゃったようじゃ。まさかこんなに早く来ていただけるとは思わなかった。この無礼は私のできることならなんでも償わせていただきます」

学園長は謝りに謝る。自分の命も捨ててもいいという覚悟をもって。だが、その覚悟はむだとなる。

「いや、こちらこそすまない。少し感情的になりすぎた。早く来すぎたこちらにも非がある。水に流そう」

「そうですか。後々正式に謝罪させていただきます。ところで来ていただいたということは受けていただけるのですね？」

双方の謝罪に場の重苦しい雰囲気は一掃され、明るい雰囲気になる。もっとも、学園長はまだ堅いが。

「ああ。それにしても……」

男はぐるりと自分を囲んでいる人たちを見回し呆れた顔をする。

「なんだこりゃ？ 思っていたよりもかなりひどい」



「な、なにがですか？」

男になにかマズいことでもしたのかと不安になる学園長。

「その眼鏡をかけた細身の男、優男、シスター、その大男、超絶イケメン、その褐色黒髪の……ってマナ・アルカナか。あとは……おまえ、おまえ、おまえとおまえ。あとタカミチ。ちょっと来い」

「え？ え？ 前、ですか？ わかりました」

指を指し何人かを前に連れ出す男。いきなり連れ出されて困惑する人たちに男はニツコリ笑う。

「おまえら………合格！！」

「は？ なにがですか？」

突然合格といわれ訳が分からないといった表情をしている人たちから目を離し、その整っている顔に広がっていた満面の笑みを消す。そして目に侮蔑の色を浮かべる。

「あとはお前らマギステル・マギなんてやめる。むしろ魔法使いをやめる。記憶消して一般人にでもなれ」

「なっ！？ いきなりなにを！！」

「正義の意味を違えるような奴なんて魔法なんてを使うな」

「俺だつて少し違えてる直す余地があるような奴は合格にする。だがおまえ等はダメだ。間違いすぎ」

次々と出てくる言葉に耐えられずガンドルフィーニが叫ぶ。

「貴様何様のつもりだ！！ 初対面のやつにそこまでいわれる筋はない！！」

「それじゃあ学園長、少し試してみようか」

「……うむ」

「ガンドルフィーニとやら、お前は正義はどのようなものだと考える？」

突然不可解な質問を出す男。答える必要はないと思ったのか学園長に許可を求める。

「学園長、早くこいつを捕縛しましょう！！ 答えても意味がありません！」

「ガンドルフィーニ君、こたえるのじゃ」

しかし有無を言わさぬ口調で命令をする。

「しかし………わかりました。私は正義とはマギステル・マギのことだと考える。弱きを助け悪しきくじく。それが正義だ！！」

「ならば問おう。悪とはなんだ？」

「あ、悪とはこの世に存在してはならないものだ！！ 闇の福音のよつこ……」

「ならば問おう。明日の糧に飢え、その家族も飢えている人が僅かな食物を盗む。それは悪か？」

ただ淡々と男は質問を続ける。

「悪だ！！ 捕まえて服役させる！！」

「ならば問おう。その人が子どもならばおまえはどうする」

「子どもにはまだ未来がある、捕まえはしないが指摘くらいはする」

男の口がつり上がる。

「ほら尻尾を出した。場合によって態度を変える。それがおまえの正義だ。学園長、この中であのバカの息子を育てる？ バカいうなよ。スカイアースの十歳児の方がもっとはっきりした答えを出すぞ」

責め立てるような口調にぐうの音も出せない学園長。ガンドルフイーニがしびれを切らした。

「まずは貴様の名前を名乗れ！！ 話はそれからだ」

「おお、忘れてた。元世界最悪の賞金首で現英雄、スカイアース研究開発副室長。元紅き翼所属。火陰陽介だ。巷じゃ銃器使いなんて呼ばれてるな」

「なっ！？ なんで英雄がこんな所に」

「陽介？ まさか……」

「生英雄だあ。もう死んでもいい」

淡々と棒読みでつつかえることもなくいわれた言葉にネギ・スプリングフィールドが来ると知ったときより場は騒然となる。

陽介は騒然となった場に興味を示さず辺りを、それも空中をゆっくりと見回す。見回す先程は黒かったその目にはいつの間にか十字が浮かんでいた。

「しかし、なんだ？　かの結界は。ここは侵入者から住民を守るために結界があると聞いていたが、もう害しか及ぼしてねえぞ」

「ど、どういうことですか？」

陽介の言葉に学園長は動揺を隠しきれない。

「異常に対する認識の阻害。この阻害の強さだったら人が轢かれかけても笑いながら笑うくらいですまされんじゃないか？　他にも気になることはあるが確証がないから今はやめておく」

この学園では様々な考えられないことが常に起こっている。例えば自律的な行動が可能な見た目も人に限りなく近いロボットが街を歩いていた、街中で乱闘があったとしても止める人はおらず助長をする者もいるなどこの街の人間は異常に対する認識が限りなく甘い。

「さて、夜も遅い。俺の正体もわかっただろう。あとは俺と学園長で話す」

「うむ、この方は本物じゃ。安心して寝るがよい。ほれ、いったいたった」

学園長は手を軽くたたきながら納得出来ないが英雄と学園長に逆

らえるはずもなく立ち去る者たちを追い払う。  
そして学園長室に5人は入っていった。

第22話 ここからは英雄の息子の物語（後書き）

はい、原作直前です。

手がスイスイ動く！！

番外編其の弐（前書き）

なぜ陽介君が監獄から抜け出さなかったかかっていうお話。

## 番外編其の貳

ケルベラス監獄の闇の中に静かに隠密にされど迅速に動く人影が5つあった。服装は黒で統一され薄暗い監獄の中で視認するのは難しい。さらに黒い動きやすい服の上には防弾チョッキを着ており、非常に重そうだ。頭部は覆面で隠し、万が一見られても問題ないようにしている。暗視スコープも付けて視界も充分だ。会話は最低限、足音や衣擦れの音も一切出さず、看守に見つかることもなく姿勢を低くし進んでいく。

「待て。前方に2人。同時にやるぞ」

先頭の男が右手をあげると後続の人は一斉に止まる。男の視線の先には看守が2人。道を塞ぐように立っており立ち退く気配はない。先頭の男と2番目の男がどこからともなく狙撃銃を取り出し構える。この狙撃銃は見た目は旧世界の狙撃銃に見えるが中は最先端技術の塊だ。発砲時に音は出さず、弾切れはなくポケットに入れられるほど小さくできる。その狙撃銃を2人が構え照準をあわせる。

引き金を引く。音もなく放たれた弾丸は看守の鎧を紙のように打ち抜き頭へ着弾し看守は倒れる。

「殺ったな。いくぞ」

5人は進み始める。十字路を直進し右に曲がり直進し、一時止まって看守の目の見えないところを通って進む。まるで最初から目的地は分かっているように。右左直進直進左右直進。何個十字路を通ったか分からなくなるころに目的の場所が見えてくる。

十字路の陰から飛び出て周囲を確認する。敵はこちらを見ていな



い。

「クリア。敵が6人だ。ステルス迷彩で始末する」

先頭の男が懐から長方形の箱型の物を取り出す。ステルス迷彩だ。周囲の景色と同化し敵の眼を欺く究極の潜入任務アイテムだ。しかしこのステルス迷彩はまだ試作品で効果は10秒ほどしか持たない。それを使うのは今しかない。男は決心する。敵までの距離はおよそ15メートル。右手にナイフ、左手にハンドガンを持つ。ハンドガンの安全装置はずす。

スイッチを押し音もなく走り抜ける。 10

9

走る。目標まであと5メートル。 8

走り抜ける際に1人目を殺す。鎧の隙間にナイフを差し込む。空気が肺から抜ける音とともに倒れる。

7

2人目。大上段に振りかぶり上から下に切り裂く。 6

次。2人が近い位置にいる。首の隙間に刃をねじ込みながらもう一人の目の部分に銃口をあて引き金を引く。これで4人。 4

残り2人が仲間が倒れたのに気付いた。周囲を警戒している。だけど無駄だ。相手からこちらの姿は見えずこちらからは丸見えだ。心臓の部分を貫く。

引き抜こうとしたナイフが抜けない。ナイフの柄から手を離す。 2

あと1人。武器を振りまわして迂闊に近づけない。 1  
当たらない場所から狙いをさだめて撃つ。 0

ステルス迷彩の効果が切れると同時に残りの頭部を弾丸が撃ち抜く。ギリギリだ、危なかった。

「周辺クリア。目標地点に到達」

十字路の陰から4人が駆けてくる。休んでいる暇はない。まだ任務は完了していない。男は気を引き締め部下に指示を出す。

「3番、30秒で開ける。残りは周囲の警戒」

「了解」

3番と言われた男が扉にとりつき何かを始める。数秒も経たずに錠前が開く音があたりに響く。

「完了。ぬるすぎるね」

「ビューティフォー。任務中だ私語は慎め」

扉の脇に2人、反対側に1人が待機する。先頭の男は扉の前に立ち残りの1人が扉を開く構えをとる。4人が全員頷くというサインを出したのを確認した後先頭の男が小さく頷く。

扉を開き迅速に4人が中に突入する。1人は外で見張りだ。突入した5人は銃を視線の先に向けて安全確認を行う。

「クリア」

「こちらもクリア」

「同じくクリア」

「クリアだ」

確認が取れたところで銃をおろし、目の前で口を開けて呆然としている陽介に尋ねる。

「火陰陽介国王陛下ですね？」

「あ、ああ、おまえらは？ スカイアースのやつら？」

「はい、特殊部隊の者です。4人の方からこれを」

男は懐から円盤状の薄い機械を取り出し床に置く。床に置いた後円盤のボタンを押す。中心の透明な部分から人影の光、ホログラムが飛び出す。

『陽にい！！ なに捕まってんのさ！！ 捕まえに来た人を蹴散らせて逃げられたでしょ！？』

「いや、クルトが傍にいて逃げられなかったんだ」

『あ、なら仕方ないね。それじゃ、そこにいる特殊部隊の人たちについていってそこから抜け出してね』

「いや、やめておく。ここから抜けだしたらアリカ女王にも被害がいくしメガロメセンブリアの馬鹿どもが笑顔で攻め込んでくるだろ。魔力消失現象の時の避難民の救助で良く分かった。スカイアースは周りの国に信用が無さ過ぎる。攻め込んできたメガロメセンブリアの馬鹿どもを皆殺しにしたらより一層好感度が下がるからな」

『でも……』

「大丈夫だ。俺の心配よりこんな危険なところにきた奴らを優遇してやってくれ。それに俺は死なないよ。だから、安心しろ」

『……分かった。隊長いる？』

リーシャの言葉に隊長と呼ばれた男が近寄る。他の3人は思い思いくつろいでいる。

「ここに」

『作戦は成功。ただし目標の意志により目標の脱出は中止。繰り返す。目標の脱出は中止。各員生きて帰還せよ。迎えは1時間後降下地点だ』

「了解。それでは国王様、ご無事をお祈りします」

「ああ、健闘を祈る」

4人の敬礼に陽介もつられて敬礼をする。4人は一斉に動きだし、其処にいたという痕跡を一切なくした後、見張りと合流し闇に紛れていった。残ったのはのんびりとしている陽介と牢屋の隅でなにも移していない瞳で一点を眺めているアリ力だけだった。

「ああ、もつとうまい飯がでないかねえ？ このままじゃ腹が腐るよ。でも、メガロメセンブリアは潰したいな。老害が多すぎる。どうせこの先100年は変わらないんだらうな、はあ」

陽介がため息をつくとき天井から水が滴り落ちて石の床に当たる音があたりに響いた。

番外編其の弐（後書き）

あれ？ 隊長の活躍がほとんどだ。orz

マクミラン大尉の声いいよね。無敵だよ。墜落してきたへりにはものすごい弱いけど。

いつか陽介が監獄を抜け出した場合のバットエンドを書いてみたい。

### 第23話 マホラに到着

学園長室にはいり学園長に促されて俺とリーシャはソファーに腰掛ける。神裂とステールはソファーの後ろにたつ。俺の正面には学園長が座り、その後ろにタカミチがたつ。

「マホラ学園によっこそいらっしやいました。この度は私の無茶な要求に応じてくださりありがとうございます」

「ムチャクチャすぎる。仮にも英雄を顎で使おうとするんだから。陽には国王とかなり近いところにいるんだぜ？ それを手紙で呼び出すなんてブチギレられてドツカンやられて問題言いたくても言えないぜ？」

「ちなみにそのドツカンの規模は？」

学園長が恐る恐る尋ねる。怖いものみたさならよしたほうが。

「超長期宇宙移民船団護衛船艦ゲイボルグ。未確認生命体との交戦を予想して現地球の全戦力と交戦するシミュレーションを一万回おこなった結果、無被弾での勝利が9割。損傷1割未満無視可能レベルでの勝利が1割。敗北はない武装に加え、フルパワーで地球を2つに等分出来るパワーと精度を持った重粒子反応砲を3機搭載している。それをマホラに向けて……」

「あれ？ 儂、とんでもないことをしてた？ もしかしてもしかするとマホラ壊滅の危機だった？」

学園長の顔から脂汗が滝のように流れ出る。後ろに立っている人とタカミチの顔からも滝のように流れ出ている。よしたほづが良かったに。

「マホラと言うより地球の危機って言ったほづがいいぜ。あ、これ機密だった。忘れて？」

「忘れなかったらどうなるのかな？」

タカミチも地雷を踏まなくてもいいのに踏んじまったな。

「んーまあ、常に監視状態でスカイアースに永久就職？」

「フオ、フオフオフオフオ」

「は、ハハハハハ」

乾いた笑いしかでない2人。学園長の笑いが少し気持ち悪い。もう可哀想なので本題にはいろう。

「さて、本題にはいろう。俺はなんの為によばれたんだ？」

「うむ、女子中学校の教師になってもらうのと夜に侵入者を捕縛もしくは退治してもらおうことじゃ」

「え？ 教師？」

聞き間違いである事を本気で願うような言葉が学園長の口から飛び出し、思わず聞き直してしまう。

「うむ、教師じゃ。得意な科目はあるかの？」



「化学なら専門家程度に……ってマジかよ!？」

「ハハッ、ワロス。陽にいが専門家なら専門家の奴らは中学生レベルだな」

「マジ、じゃ。それなら理科の教師に決定じゃの。他に聞くことはあるかの?」

有無を言わず強制決定? まあ、いいか。さて、取り立てのお時間です。

「夜のほうは別に報酬をもらえるよな?」

「もちろんじゃ。俺もそこまで鬼ではないぞ」

鬼ってよりぬらりひょんって言われたほうが違和感がないのは俺だけか?

「次。そちらの勘違いで武器を向けられたことに対する賠償は?」

「ヒョ!?!? いるのかの!?!?」

「ハハハハハ、当たり前じゃないか。俺たち2人は不老不死だけど不死身じゃないんだよ。それにリーシャはスカイアースで国王をのぞけば実質トップなんだぜ? それにスカイアースの科学もほとんどリーシャが発案してるけど、正義の魔法使いのところに行ったら殺されましたって言ったら今は、平和ぼけしてる全国民が開戦派になるよ」

なぜか知らんけど4人は国民からとんでもなく支持されている。

俺？ 英雄って事と世界を救ったってことで支持率100パーセントだけどなにか？

「なにをすればいいかの？」

どんな要求が来るか恐る恐る聞いてくる学園長。

「ふむ、そうだな。まずリーシャを魔法の類で傷をつけたり、誘拐やリーシャが拒絶する行為をとらない。次に研究ができる場所と資材の用意」

「それだけかの？」

「ああ、あとスカイアースを探らない、だ。まあ、安心していいよ。あそこのセキュリティはこの技術でハックするにはプロの中のプロか本物の天才じゃないと抜けないし、重要性が高いのにはダメージとウィルス大量に仕込んであるからな」

「まあ、それくらいならなんとかなるかの。一つ追加していいかの？」

安堵の表情を隠そうとしない。なんかあれだな。信用はできるけど信頼はできないな。信用も危ういけど。

「なんだ？ あまりに無茶なのは無理だ」

「この学園の魔法生徒と先生の考え方を少しでいかなおしてくれんかの？」

「ええー無理。だってさつきも頭堅い奴しかいなかったじゃん。魔

法使いやめろって言っただけで敵意を隠そうともしないし。それに信念や覚悟は教えてもらうものじゃない。自分でたどりつくものだ」

絶対無理。あいつら本当におかしいもん。自分が正義だと疑ってないもん。

「そこをなんとかっ!!あのような考え方から離してくれればよいから! 老人のお願いだとおもって」

「しょうがない、気が向いたらやるよ。」

「おお、頼んだぞい」

目を輝かせる学園長。そろそろここからでたい。あとタカミチの気づいてオーラがハンパない。けどあえてスルーするのが大人の対応。

「よし、それじゃ!!」

学園長が立ち上がった俺に驚きながら問いかける。

「い、家とかはいいののか?」

「いいよ、これ以上要求するものなんだし。さ、いこうか」

3人を先に追い出し扉を閉める直前にタカミチに顔をむける。

「大きくなったな、タカミチ。見違えたぞ」

「っ!?!?」

なぜか息をのむタカミチの声を後ろに扉を俺は静かにしめた。

「ああああ、ここにしばらく住むとかマジかよ。頭がおかしくなる気がするんだけど」

「もともとおかしいと思いますけど?」

「おう………ねーちんヒドくないか?」

学園長室から出た俺が発した言葉に返ってきたのはなかなかきつい言葉だった。返してきた女の名前は神裂<sup>かんざきひおり</sup>火織。一応建前では留學生<sup>りゅうがくせい</sup>って事になっているけれども、連れてきたのには理由がある。リーシャの護衛だ。リーシャは頭こそ素晴らしいが肉体の方は一般人以下だ。だからもう一人の男ステール・マグナスとコンビを組んでもらった。これでリーシャの守りは完璧。けどまず第一に俺に手を出そうとする奴がいるのか。

「ヒドくないです。頭が正常な人はゴキブリが出たからといって殺虫剤を詰めたバルカン砲を取り出したりしません」

「僕も神裂に賛成だよ。君は結構おかしいよ」

「ボクもあれはちょっと怖かったよ」

いや、一匹いたら三百倍はいると思えていわれてるじゃん。本当は爆撃したかった。

と、その時目の前に立ちはだかる人影。広場で合格だった周辺にキラキラが見える超絶イケメンだ。服装はジーパンにシャツを着ているだけ。顔は暗くてよく見えないけどどこかで見たとような気がする。

「こんばんは。いい夜だな。英雄さんにだけ少し聞きたいことがあるんだかいいか？」

「ああ、少し離れる。2人とも頼むぞ」

超絶イケメンの後を追って歩く歩く歩く歩く。しばらく歩いてたどり着いたのは世界樹の根元。

「ここらでいいか。早速質問をさせてもらう。まずあなたは本名が火陰陽介か？ 名前を変えたりしてないか？」

深刻な声色で聞いてきたのは俺の名前。変える奴もいるだろうけど俺は一切変えてない。

「ああ、火陰陽介だ。親からもらった名前をそう簡単には変えない」

「次だ。あんたはこの世界の出身か？」

「……………わからない。と言うより答えられないと言ったほうが正しいな」

俺はこの世界で生まれたわけじゃない。神に連れてこられただけだ。

「最後だ。今から言う言葉に心当たりが無いなら誰にも話さないで

くれ」

「わかった」

言葉を切る男。俺は即座に答える。

「月代流刀術という言葉に聞き覚えは……………」

「どこで誰に聞いた。今すぐはけ。ドタマ撃ち抜くぞ、あ？」

銃を突きつける。月代流刀術。この世界にあつてはならない言葉だ。前世で完璧超人の幼なじみの家に密かに伝わる一子相伝の流派だ。幼なじみと俺の家は古くからある家で幼なじみが主君、俺の家が側近と昔からの関係だったらしい。あいつと離れられないのもこれがあつたからなんだよな。

この世界と前世は違う。完全に別物だ。なのに何故コイツは知っている。

「これを知っているってことは陽介なんだな！？ 間違いないよな！？」

「おい、答える。気安く下の名前で呼ぶな」

俺の反応に過剰な反応を見せる男。というか俺コイツの名前知らないな。

「月代水城 つきしろみずき っていえばわかるか！？」

どこかで見たとような顔と名前がピッタリと一致した。前世での完璧超人眉目秀麗の幼馴染だった。俺が死んだ理由がこいつと傍にい

る俺が邪魔だからって言う理由だったのになんでここにいる。

「は？ 待て待て待て待て待てちょっと待て。どこかで見た顔かと思えばお前か水城！！ とうかなんでここにいる。え、え？ えええ！？ マシで！？」

「なんでここにいて言われても死んだからとしか言いようがないな」

更なる驚き。コイツが死んだ？ 八八ッ、太陽に生命体があるっていう発表のほうがよくばど信じられる。

「んなこと信じられるか！！ お前が死ぬのは地球が無くなる時だろうか」

「いやいや、どんな目で見てるんだよ、俺も心臓を刺されれば死ぬよ。ま、理由は心臓を一突きだったんだけどね」

「なんでよ？ お前に恨み持つてるやつはいないだろ」

「ハハハ、陽介を殺した子がいるでしょ？ その子が邪魔者はいなくなつたから私と付き合つてって言って来たからついたら刺されちゃつた」

「刺されちゃつた じゃねーだろーがこの大馬鹿野郎！！」

「なんでこいつも死んでるんだよ。にこやかにわらつてるんじゃないよ。」

「いやなんか、「あなたと一緒にいられないならあなたを殺して私も

死ぬー!!」っていう声が聞こえたと思っただら後ろからブツスリ」

「ブツスリ じゃねーよ!!!」

「それで気がついたら目の前に陽介みたいで陽介じゃない人を先頭にして後ろにいる背中に翼が生えた人たちが一斉に土下座してくんの」

「無視してつづけんじゃねーよ!!!」

「なんか1人が暴走して陽介と俺が死んじやったってことで陽介がいるところに転生させてもらったってゆーわけ」

「ゆーわけじゃねーよ!!! お前全く変わってねえなオイ!!! 1000年以上忘れてた記憶が鮮明に浮かんできたよコンチクシヨウ!!!」

人懐っこい笑みを浮かべて涙目になりながら笑う水城。コイツと話すときは1人じゃ足らん。ツツコミが。

「でさ、陽介が英雄ってホント?」

突然声をひそめて尋ねてくる。マホネット調べれば簡単にでてくるんじゃね?

「本当だぜ。ここだけの話だけど王様もやってるよ」

「ハイハイ、嘘もほどほどにね」

「嘘じゃないんだけど」「はーっ!!! こんなに笑ったのは久しぶ



りだよ。この世界に陽介がいてよかった。また明日も会うだろうし、よろしくね」

心が晴れるような笑みを浮かべて一方的に言い切り歩き出す水城。その背中には前世でいつも見ていた小さいようにで本当はなんでも包み込むような背中だった。声もかけられずに俺はただその背中を見つめていた。

そして関係のないことを思い出すのだった。

「ヤベ、宿とってない。野宿か？ いや、俺は良くてモリーシヤががが」

### 第23話 マホラに到着（後書き）

さあ、次ぐらいで誰かとバトらせよう。

ひおりとステールだよ！！かおりとステイルじゃないよ！！

幼なじみも殺されたというご都合主義。もう一人才リキャラを出すよ！！

月代流刀術ってなにさ。

第24話 出会い、戦い（前書き）

グタアとしたお話

## 第24話 出会い、戦い

俺の朝は結構早い。平日は5時には起きて城を歩き回る。でも今いるところは極東の島国日本の世界樹がある学園だ。散歩の替わりに探索といこう。今は夏。朝のひんやりとした空気が気持ちいい。朝早くに起きて散歩をする老人、ランニングをする若者、新聞配達の若い子。

「おはよーございます」

朝にいる人はいいい人たちばかりだ。それよりさっきから気になっている風切り音が聞こえる方へ足を向ける。一つ思ったんだけどこの音、真剣の音じゃね？

「ふっ、はっ、はぁ!!」

真剣、しかも野太刀を持っているから一応草陰に隠れる。裏の人間かただの刀剣マニアか。中学生くらいでサイドポニーの女の子だ。誰だったかな？ どこかでみた記憶があるんだが。

女の子が野太刀を大きく振りかぶり、振り下ろす。刀剣から気が螺旋状に飛び頬を掠る。

「たぁ!! 斬空閃!!」

「うおおお!? 今のかすった!! なにこの子がかわいい顔してます  
ごい物騒なんだけど!!」

「動くな!! 何者だ!!」

首に当てられる鉄のヒヤリと冷たく何物をも切る固い感触。ぶつちやけ首に刀当てられてます、はい。

「よ、よよよよし、とりあえず落ち着いて俺の首からこの物騒な物をのけてほしいなあ、なんて思ったりしてないんだからね!」

どもった。しかもなんでツンデレ口調になったし。

「なにを言っているんですか。見られたからには口を封じるか口を封じるか黙ってるように脅すだけです」

「なにこの子ホントに物騒!! っていうか同じことを二回も言うとかなに? そんなに俺を殺したいの!」

「さあ、あなたはどちらをとりますか? 命と白刃どちらでも私はいいですよ」

ホントなに!? 物騒すぎますよ!! 俺はもちろんここから反撃を狙いますよ。

「降参!! まいったまいりました!! 黙ってます、はい!!」

「そうですか。わたしも無駄に殺さなくて嬉しいです。黙っていてくださいね。黙ってくださいさらないと……」

きらりと煌めく刀身。銃刀法違反は何処にいった。法律、憲法カムバアアック!! 頷く俺をみて野太刀の刃を俺の首からひく女の子。その姿はかなり油断している。

「最後まで油断しちゃだめだぜ!!」

「え？ なっ、きゃあ!!」

野太刀を持った手元を蹴りあげ打ち上げる。突然のことに対応できず呆けた顔になる。その隙に落ちてくる野太刀をとり今とは逆に俺が刃を首に押し付ける。それにしても変な反応があると思ってよく見てみると妖怪とのハーフだった。珍しい、怖がられる存在とのハーフは山奥に引きこもって人との関わりを断つんだが……珍しい。

「ふむ、若いね。まだまだ精進が足りないな。あのくらいで動揺してるようじゃダメだな。ところで……」

「……なんですか」

鋭く俺を睨んでくる。普通の人なら怖がるだろうけど俺は全く怖くないな。子どものお遊びレベルだ。

「俺、君とどっかで会ったことある？」

「………ないはずですが？ それが何か？」

そっけない態度。すごい一瞬で嫌われたな。ないって言うてるけどどこかで出会った気が……

「そっいえばさ、さっきの技なんだけど京都神鳴流だよな？」

「………知りません」

「ダウト。斬空閃って言うてたじゃん。あれ京都神鳴流の技じゃん」

目をそらしてそっけなく答える。も バレバレ。サイドポニー、神鳴流……

「あ、桜咲刹那？ 詠春の後ろに袴の裾を掴んでこっち覗き込んだ」

唐突に脳裏に思い浮かぶ一つの風景。詠春の袴掴んでこっちを覗き込んでいるサイドポニー。

「なんで私の名前を……それになぜ長のことを……」

「君、昨日世界樹の広場に来てないでしょ」

驚き、さらに眼つきを鋭くする女の子。世界樹の広場に昨日は暗くてよく見てないけどいなかったはず。来てなかったかもしれないと言うと驚く顔をする。

「それでは、あなたは魔法使い側の……」

「うん、元紅き翼所属だよ。君は詠春の子ども……ではないね。とすると詠春の子の護衛ってところかな？ 違う？」

「え、紅き翼の……なんでこんな所に」

「ああ、俺教師になるらしいよ」

「そんな他人事な……」

ホント他人事なんだけどなあ。まさか原作介入するとは思わなかつ





.....心にトゲがザクザク刺さるぞい.....

「すぐに戻る。そこにいる老人に年寄りの朝は早いみたいだなんて言っといてくれ」

『ん、わかった。もう朝ご飯できてるよ』

「わかった」

電話をきり、持っている野太刀の刀身を持って柄を相手に向け、渡す。

「はい、あんまり振り回していると筋肉しかつかなくなるぞ、ほどほどにな」

「まだ足りないくらいです。私は弱い。」

顔にどこか暗い影がさす。やっぱりハーフのことで悩んでるんだろ  
うな。ここはアドバイスを.....

「一人で考え込むのもいいが悩みは人に言ったほうが楽になるぞ。  
打ち明けた悩みで離れるやつなんかその程度の人間だ。世界は広い  
し君は若いんだから気に病まないほうがいいよ。それじゃ!」

「.....」

黙り込んで考える子に背を向け、きた道を戻る。答えを出すのは自分だ、俺が手を出すことじゃない。せいぜい悩め。悩んだ分だけ楽になれるから。

学校に近い買った家に来た道を通って戻る。玄関には学園長のわらじ。なんとという時代錯誤。

「ただいまー。学園長がなんだって？」

「おかえりー。ボクにも教師をしてほしいんだって。ボクはいいけど陽にいの許可を取りに来たんだってさ」

「おはようじゃ。リーシャくんのことなんじゃがどうかの？」

ニコニコと笑いながら話し始める学園長。朝から元気だな。

「理由はなんだ？」

「フオフオフオ、教師が1人定年でやめられてのう、その穴埋めにじゃ。リーシャくんはとんでもない天才なんじゃろ？ 是非と思つての」

「……………本当の理由は？」

「リーシャくんが研究所に閉じこもって研究しておるとよからぬことを企んでいるのではないかと考える者がいるかもしれん。教師にして顔を出すようにしておけばそのようなことは考えんかもしれんからじゃ」

ねーちゃんやステールも留学生という建て前できてるから授業をサボるわけにもいかないし、どうしようかと考えていたんだ。リーシャもやる気を出してるしちよっどいい。

「リーシャがいいと言つならよろしく頼む。俺も悩んでいたんだ」

「フオフオフオ、こちらは無駄な争いを防げて幸いじゃ。それでは明日の朝7時に学園長室へ来ておくれ」

よっころしよと腰をあげる。そして重たそうに腰を上げたわりには軽すぎる足取りで玄関にむかう。あんたさっきの掛け声はなんだっただ。玄関から学園長の声が聞こえる。

「おお、そうじゃ。今日の夜11時に世界樹の広場に来ておくれ。正式に皆に紹介をするからの」

返事も聞かず立ち去る学園長。もし聞いてなかったらどうするんだよ。

「ねえ、陽にい楽しみだね！」

「なにが？」

「ボク先生なんて初めてだよ。ドキドキするよ」

「俺もだ。今から緊張してきた」

そのまま1日やけに機嫌がいいリーシャと1日中話すことになった。途中で2人も混ざりさらに話は盛り上がった。

久々に持ち出すコートに袖を通す。腰に短刀を二本差し、足にホルスターにはいつた4丁の銃をベルトで固定する。  
時刻は11時10分前。家のそばで待っている2人に声をかけ広場へむかう。

「来たか」

「来たぞ。これで全員か？」

学園長が3人が来たことに気づきまわりにいる人々を注目させる。周りにいた人々は昨日よりも少し多い。

「もう知っている者もおるかもしれんが新しい仲間が出来た。詳しいことは本人に話してもらおう。陽介殿、出番じゃ」

よく通る声を聞き、昨日質問された者は歯を噛み締め、昨日いなかった者はどんな仲間なのかと揃って目を見開く。

「火陰陽介だ。君たちが真っ先に考えるのは紅き翼だろう。その通りだ。元紅き翼にいた火陰陽介だ。ナギの息子が来るということで

学園長に呼ばれた。学園長からはナギの息子の補助だけではなく君たちの歪んだ考えの矯正も頼まれている。覚悟しておけ」

いつもの雰囲気はなく、元賞金首、紅き翼に所属してただけはあるプレッシャーがまわりの人々にのしかかる。気が弱い者はすでに気絶しかけている。

だが重苦しい雰囲気は一瞬で崩れ去る。

「と、まあ威圧したがこれからは同僚だ。堅苦しくならず話しかけてきてくれ。な？」

プレッシャーは消え去り笑顔の陽介が目立つ。そこに学園長が口を挟む。

「さて、皆にも精進してもらったため英雄の実力を見せてもらうとしよう。そうじゃな……誰がいいかの。1人ではダメじゃろうな」

陽介と誰を戦わせるか悩む学園長。仮にも英雄、元賞金首。生半かな実力ではあつという間に終わってしまう。そこに黒い肌を持った男が出てくる。

「私にもやらせてください。だいたい本人かどうかも怪しいです。私が見極めて見せます」

昨日陽介に自分の考えを否定されたガンドルフィーニだ。その目には自分の憧れていた英雄の1人が自分の考えている正義を否定しない。そして否定するからこの目の前にいる男は偽物だという思いがありありと見える。

「そうじゃの、タカミチくんに戦ってもらおうかの。他の者は離れるがよい」

学園長は同じ紅き翼に所属していたタカミチと戦わせることを選んだ。タカミチも紅き翼の1人、実力は同じくらいだろうという考えをもって。

この決定に納得いかないのはガンドルフィーニだ。

「なぜです学園長！！ 私も戦わせてください！！」

目の前にいる英雄を名乗る偽物を打ち砕いてやりたい、その一心で抗議する。だが返ってきたのは学園長の容赦のない言葉だった。

「ガンドルフィーニくん、何か勘違いしとらんか？ 火陰殿は儂がスカイアースに手紙を国王に宛てて送って来ていただいたのじゃ。火陰殿が望んで来たのではない。例え偽物だとしてもスカイアースから来た方じゃ。弱くはないじやろう。

それ以前にガンドルフィーニくん」

学園長の滅多に開かれぬ眼があがる。

「お主程度の強さで600年以上賞金稼ぎから逃げ続け世界を救った英雄に勝てると思っておるのかの？」

学園長の言葉はガンドルフィーニにとって聞きたくない話だ。賞金稼ぎから逃げてきたといっても全てと戦ったわけではないだろうし、最終決戦でも外で悪魔たちと戦って大した強敵はいなかったと聞く。それに途中でどこかへ行つたと聞く。逃げて体制を立て直したという噂もある。大したことはないと考えていた。

「正義は必ず勝つんです！！　これが真理です！！」

「……よかるう。ならばタカミチちゃんと火陰殿の闘いをみてまだそのようなことが言えるのならば闘うがよい」

その考えは口からこぼれおちる。学園長はあきれた表情で首を振る。

「火陰殿、タカミチくん準備をしてくれ」

「分かりました」

タカミチは主に居合い拳を使って戦う。そのためスーツのポケットに両手をいれ、構える。陽介は銃を使い臨機応変に中距離から近距離で戦う。発火布を使って作られた手袋をはめ、銃を持つ。

「それでは……始め！！」

その一声でタカミチが気で強化した腕を動かすと乾いた音とともに拳圧ができる。陽介の目は居合い拳の拳圧をはつきりと捉えており、拳圧が陽介に当たる直前に銃を持った右手を振る。また乾いた音がし、拳圧は消える。

「タカミチイ、舐めてるのかなア？　なに？　カツコオつけてエ様子見イ？」

陽介の目には落胆の色しかない。紅き翼として活動していたときにも陽介の強さは群を抜いており、タカミチもその強さはわかっていたはずだ。しかしタカミチは最初から本気を出さなかった。

「え、いや、そんな訳じゃ」

「偉くなつたねエ。たかがMMの評価でAA程度が様子見イ？よし、潰す」

陽介の雰囲気朝歩き回っていたときや、人と話していたときのは真逆になる。

陽介が両手の銃の銃床を打ちつける。火花が生まれ酸素を媒介としてタカミチの顔の周りを炎が囲む。

「なっ、これはっ!!」

「ほら早くどうかしないと酸素で死ぬよオ？」

炎はタカミチのスーツには燃え移らず、タカミチの顔の周りの酸素を炭化させながら燃え続ける。

「ハッ、ハッ、ハッ！」

「火陰殿、あれは大丈夫なのか？」

「大丈夫だ、問題ない。ギリギリのところまで消すから」

タカミチは動きまわり炎から逃げようとするが炎はタカミチの顔のそばで燃え続ける。それをみた学園長の問の答えはあまり安心できないものだった。

「……………ハア。話にならんア、タカミチくんよオ」

しばらくタカミチがなにか行動を起こすかと見ていた陽介だが咸卦法を発動させる気配も無いとわかると溜め息をつく。フィンガースナップをすると炎は消え酸素状態で気を失ったタカミチは倒れる。



「そんな事で倒れんなよ」

倒れかけるタカミチに陽介は急接近して腹に強力な蹴りを入れる。蹴りでタカミチの体は宙につき、世界樹の幹に叩きつけられる。叩きつけられた衝撃でタカミチは無理矢理意識を戻させる。

「ガッ!？」

「ほら前見る前エ」

陽介はタカミチを蹴った後両手の銃をタカミチにむけ、撃つ。それも何回も。意識が戻ったタカミチが見たのは自分に向けて飛んでくる銃弾だった。

「なッ!？」

銃弾は全てタカミチの身体スレスレのところに着弾し、世界樹の幹にのめり込む。タカミチが自分の身体スレスレに着弾した銃弾に目を取られていた隙に陽介がゆっくりと近づく。

「はい、チエックメイトオ」

陽介は銃口をタカミチの頭に押し付け口を開く。誰が見ても陽介の圧勝だった。

「そこまでじゃ!！」

「『治癒』ほら起きろ。」

学園長の声を聞いた陽介はすぐさまタカミチに回復魔法をかける。

「タカミチ何故最初から本気でこなかった。何故炎がまわりにあったときに咸卦法を使わなかった」

「それ、は、」

陽介の尋問にタカミチは口ごもる。

「それで、ガンドルフィーニくんもやるかの？」

「い、いえ！ 遠慮しておきます！」

2人のそばでは学園長のこれを見てまだやるかの？といった問に大きく首を横に振りながらガンドルフィーニが後ずさる。そのガンドルフィーニの様子を見て学園長は大きく頷き周りで見っていた人々にむけ声をあげる。

「うむ、2人とも良い戦いじゃった。皆もこの戦いを見て思うことがあったじゃろう。その事を頭にこれからも励んでくれい！ 解散」

ぞろぞろと解散していくなか未だタカミチと陽介は話していた。

「答えないのか？ まあいい。また聞く、そのときに教える」

「は、い」

押し付けていた銃をホルスターにしまい、手袋をとる。タカミチに背をむけ、陽介は歩き去る。ズルズル幹にもたれながら座り込むタカミチがその場にのこっていた。

「師匠、僕は……」

第24話 出会い、戦い（後書き）

どうも、ストレス性の胃痛でくたばってました。

マナ編本当に難しい。

第25話 2-A

「はい、これがクラス名簿。元気な子たちだけけど悪い子はいないから安心してください」

「ん、わかった」

2-Aの教室の前でタカミチに名簿を渡される。渡された名簿をそのままリーシャに受け流す。

「うわ、すごい。なあ陽にい、俺の見間違いじゃなかったら詠春の子どもがいるんだけど」

「ああ、木乃香君だね。詠春さんの魔法は知ってほしくないって意志でここにいるんだよ」

リーシャの口調はどうやら人前だと荒々しくなるらしい。まあ、ギャップがあつていいんだけどね。というか詠春も何考えてんのか。ここ、魔法使いがわんさかいるぞ。

「それじゃあ、陽介さん入ってください」

「あいよ。ひとつ聞いときたいんだが黒板消しは避けていいんだよな?」

少し開いてる扉を見上げると真っ白になった黒板消しがはさんである。なんだこれ。新手のいじめか?

「あ、は、は、もちろんですよ。中学生ですし、そこまでハード

ではないですよ。むしろ避けてくれないと……」

「え、なに？ 最後のほうが聞こえないけど」

「いえ、何でもないです」

「陽に早くしてくれ。ホントに緊張してきた」

リーシャに急かされて扉を開け、落ちてくる黒板消しを粉が舞わないように受け止める。よし、突破完了。そのまま中に入っていく。

グイッ！

「うおっ！？」

足元にロープが張ってありバランスを崩したところに水が入った、それもキリキリまで入ったバケツが上から落ちてくる。ギリギリ反応できてなんとか水をこぼさないように受け止めたと思ったら吸盤の矢じりの矢が飛んでくる。これ中学生レベルのトラップ？ バケツを振りまわし全ての矢を受け止める。

「さて、いきなりで悪いけどひとつ聞きたい。これ、新手的教師いじめ？」

「「おおおおおお~~~~~！！ 全部避けたあああ！！」」

「あれ？ 高畑先生だと思ったのに……誰？」

はい、歓声はいらぬから質問に答えてほしいなあ。はいってきた扉を見るとタカミチが苦笑いをしながら入ってきて、その後ろから

リーシャが続く。

「みんな、もう少し落ち着いてほしいかな。新任の先生が2人いるんだ」

「センサー！　もしかしくなくてもその2人？」

「私の出番がそろそろ来るっ！」

「それじゃあ陽介さん、自己紹介をしてください」

タカミチが止まらない質問を抑えながら自己紹介を勧める。さて、どんな自己紹介をしようか。

「今日から理科の教師になった火陰陽介だ。あの罨を作った奴は後で名乗り出てくれ。反省文を100枚程度で許してあげるから」

「同じく教師になったリーシャ・イボルブだ。イボルブと呼ばれるのは慣れてないからリーシャと呼んでくれ。早くここに慣れるようにしたいからよろしく頼む」

「おおー美男美女！　すごい！」

「一時間目は2人を知ってもらうために自由だから質問でもなんでもしていいよ」

教室がまた騒がしくなる。タカミチの言葉を聞いて殆どの子が一斉に質問をしてくる。そこにメモ帳を片手にマイクをむけてくるパイナップルのような髪形の子。のしかかる質問の波に困惑していた俺たちには救いの船に見えた。

「はいはい、ちょっとまったあ〜！ 火陰先生とリーシャ先生への質問は麻帆良のパパラッチこと朝倉和美が仕切らせてもらうよ！」  
さらに大きい波が来た。最悪だ。タカミチめこうなることをわかってたな。

「まずはジャブから！ 2人の出身地は？」

「んーそうだな、まあ日本ってことにしておこうか」

「じゃあ俺も日本ってことで」

俺がこの世界にきたのは転生してかなりあとだもの。しばらくは魔法世界でミンチになってたりしてたから。俺たちの答えに若干不満そうな朝倉。

「もうちょっとジャブで攻めるよ！ 出身大学はどこ？」

「ケンブリッジだ」

「ハーバード大学ってことになってる。どこでもよかったんだけどな」

「おお、世界大学ランキング上位の出身者がこの学園に三人も！？  
リーシャはそんなレベルじゃないがな。この答えには満足した様子だ。」

「少しずつ大振りにしていくよ！ 年齢と特技は？」



「28歳で特技がそうだな……まあ、シューティングゲームの類かな？」

「これまたリアクションのしにくい答えが……」

「他にないしどんなものがよかったんだよ」

嫌なものを見たような反応をする朝倉。認識範囲外からの狙撃なんて言えないだろう。

「リーシャ先生は？」

「……特にないな、うん」

「またまたあ、ホントはあるんでしょう？ ほらあ言っちゃまいなよ」

急に話を振られ困惑気味のリーシャに朝倉がマイクをぐいぐいと近づける。そういえばリーシャのそういう趣味だとか聞いたことないな。ずっと研究ばかりしていたしな。

「いや、ホントに無いんだってば！」

「ムムム……これ以上は無理かな」

朝倉はリーシャへの質問をあきらめる。自分に向けられたマイクが遠ざかっていくのを見てリーシャは安堵の息をつく。

「それじゃあみんなも気になっていることを聞きましょう！ 2人の関係

は？」

「家族か？」

「うん。家族だな」

いつの間にか陽にいつて呼ばれてたし、家族だろうな。だが朝倉はこの答えでは満足してないみたいだ。

「そーいう抽象的なのじゃなくて、恋人とか夫婦とか恋人とか恋人とか具体的なのがあるでしょーが！」

手を小刻みに動かし、叫び出す。よく見てみたら他の子も賛成のようで大多数が大きく頷いている。お前らまだ中学生だろうが。

「そつだそつだー全部ゲロっちまいなよ」

「ここだけの話にしておくからさー」

「さあ、ぜーんぶ吐いちまいなよ！」

周りも朝倉のようにヒートアップして「はーけ、はーけ」と大きな声でコールする。何人かは心底どうでも良さそうだけど。さて、どうしたものが。

「さあ、ハーーーハーーーハーーー！」

「これ聞いちゃう？ 長くなるよ？」

「いえいえ、かまいませんよ」

「聞いちゃう？ 長くなるよ？」

「どうぞお願いします」

「ホントに聞いちゃう？ 長くなるよ？」

「是非お願いしますよ」

「ホントに聞いちゃう？ かなり長くなるよ？」

「いいからいいから」

明らかに重い話の雰囲気を感じさせてうやむやにしよう作戦失敗。  
ある程度嘘を混ぜて話そうか。

「俺がまだ十代のときに道の隅にリーシャと他数人がいてな。いろんな面から見ても酷すぎるから引き取った。つまり義兄妹だ。残念だったな」

「えっと、ごめんなさい。遠慮無しに聞いちゃって」

空気が重く立ちこめる。誰かこの空気をどうにかすることは出来ないか！

「それじゃあ続けて質問行くよ！ 火陰先生はこのクラスで気になる生徒はいる？」

「それはどういふふうに捉えればいいんだ？」

「そうだねーまあ、先生の捉え方でいいよ」

「そうだな、まずその龍宮真名だろ、今日は来ていないエヴァンジェリンとあとは神楽坂明日菜かな」

真名は一応師弟関係だしな。エヴァンジェリンは聞き覚えがある。もしかしなくても闇の福音か？ 神楽坂はよく似てる。アスナ姫に。

オッドアイに、あの髪の色。とても似ている。

「おっーとご指名だよ2人も！なんでこの2人を？」

「龍宮は知り合いだ。というか、こーんな小さいうちから知ってる。ここにいるとは思わなかったけど」

手で小さい頃の身長を示す。

「で？ それでそれで？ アスナは？」

「瓜二つの人を知っているから。あの子元気かな、しばらく会ってないしな」

「あたしにそっくり？ そんな人いるの？」

「えーそれだけ？ 他には？」

「ない」

同じ点が多すぎる。あとで聞いてみようか。それにしてもこのクラス、露骨すぎないか？ 詠春の娘にその護衛、闇の福音、魔法教師の娘、財閥の娘その他いろいろいる。まさかとは思うが英雄を育てるためのクラスじゃないよな？ というか、ナギの子って2人いなかったか？

「エヴァちゃんは？ もしかしなくてもこれも知り合い？」

「ああ、知り合いだ。もっとも向こうが覚えているかは知らない」

もし覚えていなかったら恥ずかしいな。でもチャチャゼロは覚えているかな？

「ふーん、他に聞くことあったかな？」

「もうよくないか？ 時間ももうないしさ」

「そうだね、それじゃあ後はそれぞれで質問！」

朝倉の言葉で活発そうな子たちが雪崩のように近づいてきて質問を始める。なにこれ怖い。

チャイムが鳴り一日の最後の授業が終わる。着任初日の最後の授業を行ったのは2・Aだった。

「きりーっ、きをつけ れい」

「ありがとうございますー」

「おっし、おわったー！」

「つつかれた！」

「さて、かえってブログでも更新するか」

「木乃香ーかえろ」

「あ、神楽坂！ ちょっと聞きたいことがある、来てくれ」

神楽坂の声を聞いて、朝見たときから思っていたことを思い出す。アスナ姫なのか確かめないと。他人のそら似では納得がいかない。声をかけて手招きをする。

「なんですか？」

「いや、少しな。来てくれ、お茶でも出そう」

「はい……」

「せんせーアスナを襲わないでよー！」

「襲ったら首ちょんぱだからねー！」

何かやましいことをするかと思ったのかさりげなく怖いセリフを混ぜてくる生徒たち。俺そんなにあやしいか。

「おそわねーよ！ 俺は変態じゃない！」

「あははははは！ 冗談だよ！ さよならー！」

ダーツと走り去っていく生徒。頭をかきながら溜息をつく。

「はあ……ったく、元気がよすぎる」

「あ、あははは……」

苦笑いを浮かべている神楽坂と理科の準備室に向かう。理科の教師で良かった。普通教員だったら職員室だもの。マイルームが作れる。

「ほれ、適当に座ってくれ」

準備室に入り神楽坂に座らせ、正面に俺も座る。若干引き気味だ。

「そ、それで、聞きたいことって？」

「ああ、まず」

『アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフユシア』  
この名前に聞き覚えはないか？」

「え？ あ、アスナ・ウエ、ウエスパ？」

「『アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフユシア』  
聞き覚えはあるか？」

「ない……です」

「次だ『ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ』  
この名前は」

「ん？ んんんん？ なんか引つかかるなあ。でも知りません」

ガトウの名前に引つかかる。ふむ？ これは……

「『ウエスペルタイア王国』、『メガロメセンブリア』  
この二つはどうだ？」

「ないですけど……」

「次で最後だ『ナギ・スプリングフィールド』  
これはどうだ」

「全くないです」

あり？ おつかしいなあ……記憶封印の術式がこれでもかかって感じ  
で組んであったからアスナ姫かと思ったんだがなあ？ 壊すのは簡  
単だけどトラウマとかを封印してたらまずいしなあ……時間がたて  
ば分かるか。

「そうか、ありがとう。少し成績に色つけといてやるよ」

「ホントですか！？ やったあ！ それじゃあさよなら！」

ガッツポーズをしながら立ち上がり、扉を蹴り開けて走り去る神楽  
坂。そこまで喜ぶことか？

「うーん、エヴァンジェリンのところへ行ってみようか」

もしかしたら何か知っているかもしれない。そう思い、立ちあがり  
準備室を出る。





第25話 2-A (後書き)

久しぶりの投稿のクセになんという駄文。

次はエヴァちゃんと会うよ！ チャチャゼロと茶々丸もでるよ！  
多分。

6/15 サブタイトル修正しました。書いている段階のまま出す  
とか……それに2週間も気づかないとか……

## 第26話 封印解除、バレの伏線

「ここか……人はいるみたいだが……」

麻帆良学園内にひっそりと建っているログハウスの前に陽介が立つ。なんの迷いも無く扉にかけられている来客を知らせるベルの紐を引く。澄んだ音が響く。

「オイ、ご主人客だぜ」

「茶々丸、追い返してこい、いまぶよぶよで忙しい」

「了解ですマスター」

3人の声がし、1人が扉を開ける。

「どちら様ですか？ マスターは今ゲームをされているのでお会いできません」

「新しく担任になった火陰だ。少しはなしたいことがあってな」

「マスターに伝えておきますのでお話ください」

「それじゃあ闇の福音に会いに来たと」

「わかりました」

家の中に入っていく茶々丸。陽介は扉から少し離れ背を向け、懐から煙草を取り出しくわえ火をつける。煙が揺れ動き、あたりに特有

の匂いが立ち込める。

「ぷはー覚えてるかなあ？ いや、覚えてないはずがない。……なかつたらいいなあ」

陽介の声には自信があまりない。600年も前のことだ、自信がなくなるのもわかる。

「ここは禁煙だ。今すぐ消せ」

陽介の背後で嫌悪感を隠そうとしていない声がある。振り返るとそこにいたのは金髪碧眼の10歳程度の少女だった。表情は私不機嫌ですと語っている。その後ろには茶々丸が無表情で立っている。

「お？ ああ、すまん、今消すよ」

携帯灰皿を取り出しくわえていた煙草を放り込む。

「で、君がエヴァンジェリンだな。闇の福音とも呼ばれていたな」

「私のことを知っている奴が何のようだ」

エヴァンジェリンは陽介から距離をとり身構える。茶々丸も離れ、戦闘態勢をとる。

学園の中央部からはなれたこの場所にわざわざやってくるものはただの気まぐれで来た者か、エヴァンジェリンをこの学園から追い出そうとしている魔法関係者ぐらいしかいない。

「あらあ？ 随分と手荒な歓迎なこと。たかが二つ名を呼んだくらいで警戒しすぎじゃない？」

「警戒はいくらしても足りないさ。気を抜けば不死殺しの魔法が飛んでくるからな」

「真祖でも不死殺しで死ぬんだよな。その不死殺しを使うまでが大変なんだよ」

陽介は両手を頭の後ろで組み敵意がないことを示す。だがこれだけで警戒を解くことはない。今までこうやって油断したところを狙った輩はいくらでもいる。

「ふん、使わせる暇は与えんがな。チャチャゼロオ！」

「アイサー！ 久しぶりの肉だ！」

陽介の背後にあった草むらから緑色の髪をした人が肉斬り包丁を手に陽介に飛びかかる。その太刀筋は熟練され、相当な実力者でも避けることは難しいだろう。

「はい、残念だったな」

「あ？ ……うおっ!？」

「これくらいじゃやられねえよ。……おお、いい女」

鋭い太刀筋を陽介は視線を向けることなく体をずらし避ける。そしてそのままチャチャゼロを地面に倒し馬乗りになる。地面に倒れたチャチャゼロを陽介はマジマジと見つめる。緑色の髪に整った顔、出るところは出て引っ込むところは引っ込んでいる身体。

「あ、しまった、つい反応した」

「お？ どうかで会ったか？ 見覚えがあるぜ」

ついつつかりといったように喋る陽介を見てチャチャゼロの記憶に何か引つかかる。

「というか、君誰？ なんで俺のこと知ってるの？」

「あー？ 俺を知らねえのか？ 魔法界のナマハゲ的存在のエヴァンジェリンの従者、チャチャゼロ様だぜ」

「……嘘だ！」

歯をむき出し否定する。

チャチャゼロの昔の姿は小さな人形だった。600年前に会った陽介が知っている姿は当然人形のチャチャゼロだ。だが陽介が馬乗りになっているチャチャゼロの姿は若い美女。似てもつかない。否定するのも当然だ。

「嘘じゃねえって。……あ、思い出した。陽介だ。300年物の酒をくれた」

「あ、チャチャゼロだな、うん」

「よお、ご主人。いい加減警戒解けよ。本当に殺す気ならとっくに俺はやられてるぜ。それにご主人もこいつに会ったことあるぜ」

チャチャゼロのなかで美味しい酒を飲ませてくれた名前と記憶と顔が一致する。陽介も思い出すきっかけが酒というので納得する。昔

2人が酒を飲んだときチャチャゼロが話すのは酒やワインの話だけだった。

「なにを言っている。私がそいつに会ったことがある？　笑わせるな」

「いや、会ったことあるぜ。英雄だぜ？」

「英雄……あ、ああ、ああああ！！　火陰陽介か！！」

少し考え込み、一つのことを思い出す。いいたいことは様々あるが驚きがさきに来て言葉がでない。目を見開き口も大きくあいている。

「そうそう。思い出し」

「貴様、なぜもつと早く来なかった！！　ナギは死んで貴様はいつまで待ってもこないし！　チャチャゼロは酒をかつ喰らうわ、変な奴らと勉強しなければならなかったし！」

「は？」

「タカミチは先生面するし、ナギに落とす穴にはめられて玉ねぎとかき回されるわ、スカイアースに行っておまえの名前を出したらVIP待遇を受けるし、チャチャゼロの身体が本物そっくりになって私を見下ろすし！」

学園での不満から学園へいることになった元凶へ、従者が生意気なつた原因へと次から次に口から言葉が出てくる。ヒートアップしていき、陽介につかみかかり殴る。だが、吸血鬼の真祖といえど力の殆どを封印されているいま殴ってもダメージは全くない。

「チャチャゼロ、俺が封印を解きにくる？ 封印されてたなんて今知ったんだけど」

「マジかよあの鳥頭。伝えとくつて言ったのにバツクれやがったな。本当はご主人が学生を3年やったら封印を陽介が解きに来るって言ったのによ」

「マジかよあの鳥頭。今度会ったら殴る。まあ、俺が解くことになつてみたいだから解こうか」

「クラスの奴等からは見下ろされるし、幽霊が……今なんと言った？」

2人の会話の一部を聞いたエヴァンジェリンが反応し陽介につきみかかっている手を放す。

「マジかよあの鳥頭？」

「もう少し後だ」

「俺が解くことになつてみたいだから解こうか」

「それだ！ 本当に解けるのか！？ さあ、解け！！ 今すぐに！ 命令だ！！」

「……やだ」

惚れ惚れするような笑顔で陽介は拒絶の意を示す。当然エヴァンジェリンは驚き固まる。悪名高い闇の福音の名で今まで命令した相手



は険しい顔で攻撃してくるか、逃げるもしくは腰が抜けて動けなくなるのが全てだったが、笑顔で拒絶されるのは初めての経験だった。

「もう一度言う。封印を解け」

「やだね。どこに自分より年下で弱い奴の言うことを聞く必要がある？」

陽介は約1500歳、エヴァンジェリンは約600歳。およそ2・5倍差がある。

「それよりなんで命を救われた奴を忘れてんの？ チャチャゼロは覚えてんのに。バカなの？ 死ぬの？ 殺そうか？」

「……貴様あ言わせておけばいい気になりおつて、英雄だからと言つていい気になるなよ。」

「おいおい、そんなに熱くなんなつて。ご主人も思い出してくれよ。不死殺しをかけられて死にかけたときだよ」

一触即発の2人にチャチャゼロが割り込みなんとか和らげようとする。

「不死殺し？ いや、しかし、でも、そんな馬鹿なただの人間が600年以上生きているなんて……」

「残念だけど俺、不老不死なのな。神様印の」

「ということはまさか……」

「そう、600年前に瀕死の君を助けた

」

「貴様も吸血鬼の真祖か!？」

エヴァンジェリンのとぼけた回答にチャチャゼロと陽介の2人はそろって肩を落とす。同じしぐさをした2人を見てエヴァンジェリンは首をかしげる。

「ご主人、忘れてたの言うことは恥ずかしいことじゃないぜ? いい加減認めようぜ。陽介はご主人を助けた奴だよ」

「う……だって恥ずかしいじゃないか!」

「はいはい、思い出したんなら家に入れてな。封印解くから」

「あ、ああ。頼むぞ」

家にはいるエヴァンジェリンと陽介、チャチャゼロの3人。残ったのは1人状況が把握できてない茶々丸だけだった。

「火陰陽介……最凶最悪の元賞金首にして英雄。紅き翼の一員。最終決戦では仲間についていくことはなく外で他の仲間を援護……」

「さあ、解いてくれ。どれほどこの時を待ちわびたことか」

エヴァンジェリンの所有するダイオラマ魔法球の内部にある砂浜で彼女は封印が解かれるのを今か今かと待っていた。

「はいはい。そう焦るなよ。まずは見てみないとなんとも言えん」

陽介の眼がエヴァンジェリンを映す。陽介から見ると彼女の身体には魔力で出来た鎖がわざと絡ませたかのように固く何重にも絡まっている。ここまでなら何の障害もなかった。しかしエヴァンジェリンには何重にも絡まっっている鎖の上に術式の構成が明らかに違う術式が綺麗に巻かれている。考えられるのはナギに封印された後、誰かが魔法を重ねがけしたということだ。

「……」

「……どうなんだ？ 解けるのか？」

「解けるのは解けるが……」

言いにくそうに答える陽介をみてエヴァンジェリンはリスクが大きすぎるのかと考える。

「リスクが大きいのか？」

「いや、術式自体は簡単な構成だから問題ない。本来は不登校の子供を登校させるための魔法だからな。だけど、あ・の・バ・カ・は！ 術式の構成の理解もしてない状態で魔力に物言わせてかけやがったみたいだから馬鹿みたいに複雑になってるんだよ」

「他に理由があるんだな？」

「ああ、重ねがけされている。魔力の殆どがこの呪いにしか見えな  
い結界の維持に使われている。どう考えてもここの魔法使いたちだ  
ろうな」

考えられるのは学園長しかいない。エヴァンジェリンは顔に怒りを  
浮かべる。

「まあ、これをかけられたことは知らないんだろ？ なら解いても  
問題ないだろ。封印を自力で解いたって言えばいいしまさかエヴァ  
ンジェリンに隠れて魔力を横取りなんてしてないだろうなって聞け  
ばいいだろう」

「ふふははは！ 爺の顔を見るのが楽しみだな。それでは頼むぞ」

「ああ、はいおしまい」

にやりと笑みを浮かべるエヴァンジェリンにむけて陽介はフィンガ  
ーナップを2回行う。1度目の音で呪いを解き2度目の音でかさ  
ねがけされた魔法が解ける。エヴァンジェリンに魔力が戻り、あた  
りに風が吹き荒れる。

「戻ったぞ！！ 魔力が！ 力が！ 自由が！ 酒だ、酒をもって  
こい。祝い酒だ！」

「それに俺も参加していいのか？」

「もちろんだ。しっかりと祝ってくれよ」

「チツ、なんで俺が買い出しに行くことになってんだよ」

「お前が俺の出した超高級酒を30分で飲み干すからだろ」

夜遅くにコンビニを目指して歩く人が2人。チャチャゼロは若干不機嫌で陽介に愚痴をもらす。

「うまいんだから普通だろ。ぼけっとしてたら無くなっちまう」

「そのせいで夜遅くに缶ビール買いに走らされてるんだからな」

「ケケケ、作り物とはいえこんな美人と歩けるんだから幸せに思えよ」

らっしゅーせー

「籠持って来い。買い占めるから」

チャチャゼロは籠を取りにいき陽介は目的の品、缶ビールを探す。

「ビールビールう買い占め買い占めえ」

「ほらよ」

チャチャゼロから籠を受け取り棚からビールを無造作に3、4本つかみ取り投げ込むようにして入れていく。すぐに籠は一杯になり次の籠に入れ出す。

「お菓子お菓子、酒臭っ!?!」

陽介の後ろをパイナップルのような髪をした少女が通り、あまりの酒臭さに叫ぶ。

「お? おお、そんなに酒臭いか?」

「あれ? 火陰先生じゃん、なにしてんの?」

「朝倉じゃないか。酒買いに来たんだ酒」

「そこにある籠……どんだけっ!?!」

陽介は缶ビールが山のように入れられた籠を指差す。

「先生死ぬ気!?! こんなに飲んだら死ぬよ!」

「死なないって。酒は不老長寿の霊薬って太古から言われてるから死ぬわけがないって」

「適量の場合だからねそれ!! 明らかに急性アルコール中毒になる量だから!?!」

朝倉がツツコミを入れる間も陽介の手が止まることはなく、機械的

に缶ビールを籠に入れていく。

「良いじゃないか、明日休みなんだし」

「着任翌日にアルコール中毒で死ぬ教師って聞いたことないよ！」

「死なない死なない」

「おい、ビールだけじゃつまんねえからつまみも買っとこうぜー」

「籠に突っ込んで」

チヤチャゼロの姿が見えなくなった途端に朝倉の目が輝きだし、陽介に詰め寄る。

「誰！？ あの美人さん！ 知り合い？」

「げ。知り合いけどどうかした？」

「どんな関係？」

「首に刃物を当てられて、切りかかられて馬乗りになった関係」

「あの人ヤンデレ？ ヤンキーデレデレじゃなくては病んでるくらいデレデレの方？ というか面白そうなネタキター！」

「ヤンデレ？ なんじゃそりゃ？ あ、もう缶ビールない。しゃーない帰ろう」

山盛りの籠4つを軽々と持ち上げレジへ持って行く。

シヨツシヨツマツチクダサイ

レジで同じように山盛りの籠を持ったチャチャゼロと合流する。

「つまみ取ってきたぜ」

ダイタイ、ゴマンエンニナリマス

「あ、お釣りいりません」

「すごい太っ腹じゃん先生」

エー!? マジデ? ジャ、ジャアモラットコウカナ……

ポケットから札を取り出しそのまま店を出る陽介にチャチャゼロが後ろからついていく。そして朝倉が追いかけていく。

アジャジャシター

「それで朝倉、なんでこんな時間に出歩いてるんだ? 外出禁止だろっ」

「う……黙っててくれない?」

両手を合わせて陽介に頼みこむ。陽介は仕方がないと言った表情で溜息をつく。

「はあ、寮はどっちだ? 送っていくから」



「わかった先生がついてきてくれるなら安心だね」

今度は朝倉が前を先導し陽介とチャチャゼロが続いていった。  
遠くでは普通の風とは違う音の風が吹いていた

## 第26話 封印解除、バレの伏線（後書き）

どうも、上手く肉付けが出来ず2週間ほど唸っていました。

相変わらずの駄文で、三人称に挑戦しましたが次はおそらく陽介の視点になると思います。予定は未定といたしますし？

エヴァの封印は1000年近くも生きてれば20年も生きてないやつの魔法なんて簡単に解けると思いましたので、指パッチンで解除させました。

チャチャゼロは気の強いおねーさんみたいなイメージです。茶々丸が大きくなった感じかな？ そちら辺は読んでいる方にお任せします。

目指せ！ 次の投稿は3日後！！

第27話 分岐していく選択肢（前書き）

敢えてなにも語るまい

## 第27話 分岐していく選択肢

「はっはっはっ、クソ！ なんだってんだ！ どうして……」

「やっぱりこの街は異常だ。普通の街は夜にこんな化け物ではない。ちくしょう、なんでこんな事に。後ろを振り返ると刀を持ち、背中には黒い翼、鉤爪のような足、頭は鳥のような頭。他に人間には有り得ない巨体、上半身は裸。腰に布を巻いているだけ。極めつけは二本の角に鉄の棒。」

「嬢ちゃん、いい加減大人しく殺されてくれねえか？」

「まだ時間はあるが召還者の指示を達成できてない故」

「本音を言えば殺したくはないが見られたからの。許してな」

「ふざけるな、まだ死にたくない。やりたいことがたくさんある。普通の街で普通に仕事をして普通に食べて普通に普通の人と話したりしたい。寮に逃げ込めばあきらめるかもしれない。でも諦めなかったら。中心部の明るいところへ行けば何とかかなるかもしれない。でももう、限界だ。もう息が苦しい。」

「うわっ、きゃあー!!」

「やっと止まってくれたか。手間掛けやがって」

「ふん、一瞬で終わる。痛みはない」

何もないところに躓き転げる。足首を捻った感覚がある。どうしてこんな時に。鳥頭が腰に下げていた刀を抜き振りかぶる。ここで終わるのか？これがファンタジー物ならどうにかなるんだらうけど、ここは現実だ。そんな都合のいいことは起きない

「誰か、助けしてくれないかな……」

「先生またねー！ その人襲っちゃだめだよ」

「襲わない襲わない。子供はさっさと寝ろ」

朝倉が寮に入るのを見届けたあとエヴァンジェリンの家に向けてチャチャゼロと歩き出す。

「ったく、ほっとけばいいのによ」

「そういうわけにはいかんだろ。あいつは生徒で俺は教師なんだから」

さて、早くもどって飲み直そう。最近のはどんな味になってんのかな。

.....prrrrrrrr

「おい、携帯鳴ってるぜ」

「おう、誰だ？こんな夜遅くに。  
もしもし？」

『火陰殿かの？ いまどこにおるんじゃ！？』

電話にでると学園長の焦っている声が聞こえる。

「女子寮の近くだけどなんかあったのか？」

『そのの近くに関西の妖怪が入り込んでしまったのじゃ。対処して  
もらえんかの？』

「わかった。貸し三つだ」

『ほ？ 一つじゃないのかの？』

「甘えるなよ。俺が此処にいるのは英雄の息子を見てみるため。わ  
かってるか？」

無償で尻拭いみたいなことをさせられてたまるか。だいたい俺がい  
なかつたらどうする気だったんだよ。

『貸し三つじゃ。あとで報告をたのむぞい』

「ああ。チャチャゼロ先に帰っててくれ。ちょっと貸しを作ってく  
る」

「ケケケ、ヤダね。ここんとこ全く肉を斬ってねえんだ。斬り刻ませる」

チャチャゼロは口を吊り上げながら笑う。これならエヴァンジェリンに頼んだ方がよくないか？

「さて、どこだ……」

眼を使い周囲50キロメートルの動物以外の姿を探す。

「んで、どこにいるんだよ？」

「ガマンしろガマン。それよりお前どうやって戦う気だよ。手刀で斬るのか？」

「お、それいいな。やりかた知ってるか？」

「知るか自分で考え……いたぞ」

二つの反応を見つける。鬼と鳥族か、スタンダードな組み合わせだな。

チャチャゼロに目配せをして脚に力を込め、地面を蹴り、走り始める。

直ぐに妖怪がいる場所について見たのは鳥族の妖怪が刀を少女に振り下ろす直前だった。

「あの爺、一般人巻き込んでるじゃねえか！」

「ゴツいのがいるじゃねーか」

「誰か、助けしてくれないかな……」

瞬動で一気に近づき付いた勢いで体を回転させて蹴り飛ばす。烏族の妖怪は体がくの字になって吹っ飛んでいく。鬼の妖怪はいきなりあらわれた俺に驚いている。

「な、なんだ!?!」

「おい、お前生きてるか？」

腰が抜けたようにして座っている少女は目と耳を大きく見開き信じられない物を見た目をしていた。これが普通の反応だと思う。いきなり異形の生き物が表れて殺そうとするんだから。

「あ、ああ、生きてる」

「オーケー。それじゃあ目をつむってそこの緑色の髪をしたおねーさんにしがみついとけ」

返事ができるとは思わなかった。普通は気絶するか声もでないんだけど……普通っていう評価を変えた方がいいか？ そんな事より今は敵を倒すのに集中しよう。

「待ってくれ！ 教えてくれ、これはなんなんだ!?! 元々麻帆良



が普通じゃないのは知ってる。だけどこれはおかしすぎるだろ！」

「あー後でな」

心構えを戦闘用に切り替える。まず状況の確認。後ろに一般人がいるがチャチャゼロがいるので問題は無い。次に武装はこんなことになるとは思わなかったから無し。だが、必要ない。必要とあらば魔法や言霊も使うことにしよう。よって問題は無い。

次に敵の確認。烏族の1人はかなりの力で蹴り飛ばしたのでしばらく気にする必要はない。なので目の前の鬼に集中。おそらくかなり強い。一般的な魔法使いたちは苦戦するだろう。しかしそれも一般的な場合の話。多少てこずる程度だろう。

よって負けることはないだろう。それに危なくなればチャチャゼロに逃がすように言えば連れて行ってくれるだろう。集中しよう。

「さて、始めようか？ 手加減はしないから許してくれよ」

「……………がはははは！ 手加減する暇なんかやらんわ！ 覚悟せい」

「言ってる」

短く言い捨て近づき横からわき腹を蹴る。鬼は気付くこともできずに俺の蹴りをもろに喰らう。しっかりと当てたのを見て距離をとる。鬼のわき腹は抉られて肉が見えている。それを作った原因の俺の脚は当然血が付いている。

「グー！？ なんじゃこりゃああ！！ このガキ……………やりおったなあ！」

「あ、結構もろいなこれならすぐ終わるな」

鬼が自分の身体に起きた異変をやっと気付き声をあげ、顔が真っ赤になる。鉄棒を振り上げ俺のほうに地面を揺らしながら駆けてくるが遅い。

両手を地面につき両脚で顎を蹴りあげる。

「がっ!?!」

鬼の巨体が宙に浮いたところを追撃する。その浮き上がった巨体を両脚で挟み遠心力を使って一回転し地面にたたきつける。轟音が響き、地中深くまで埋まる。

「はい終わり。とどめは………ささなくてもいいか。どうせ還るだろうし」

「喰らえええい!!--」

「喰らわないって。なんで叫んぶんだよ」

いつの間に復活して戻ってきたのか後ろから大声をあげ、刀を振り上げたまま斬りかかってくる烏族。左足を後ろに突き出すとそのまま腹部に命中し、白目をむいて倒れる。

これで終わり。銃があったらもっと速く終われたんだけど、ないものねだりをしてもしようがないか。

「さて、どうしたものか。思いつきり見られてるしな」

「な、なあ、これからどうなるをだ? 火陰先生」

不意に先生と呼ばれ驚く。2 - Aの生徒か？顔をよく見てみる。

「えーと、2 - Aの長谷川千雨だったか？」

「そうだよ。それよりこれは一体全体なんなんだ？」

強い疑惑をもって俺の眼を見つめてくる。本当のことを話さなければ信じないと言った目。うやむやにして逃げることは簡単にできるがこの子、認識障害が聞いていないみたいだ。先天的なものだろうか。

「それは……今さっきの妖怪のことか？それともこの学園のことか？」

「あんだ、この学園のなにかを知っているのか！？」

目の色を変えて詰め寄ってくる。

「それじゃあまず聞こう。長谷川はこの学園に違和感を持ったことがあるか？」

「毎日だよ。あんな大きな木があってもギネスには載らない。普通はのるだろ。それにここにすんでる奴らもおかしい。学園の外じゃロボットが二足歩行をしたから大騒ぎ二足になつてるにここには完全に自立行動をするロボットがいる！極めつけはここじゃ人が車に牽かれそうになつてもただ謝るだけで済みます！違和感を持つなというのが無理だよ！」

顔を赤くし一気に言い切る。これはおそらく先天的なものだろうな。こここの結界の効力は凄まじい。効果を見るだけでも呪い級の反吐が

でるようなものだ。後天的なものならここまで違和感を感じることはない。苦労してきたんだろうな。

「そうだな。長谷川、魔法ってやつを信じるか？」

「……いままでは鼻で笑って一蹴するところだけど、あんなのを見せられた後だ信じるしかねえよ」

「そうか。そこまで受け入れているなら話は簡単だ。結論を言えば魔法はあり、魔法使いが存在する。この学園は魔法使いの一大拠点だ。そしてこの学園には一つの呪いとも言える魔法がかかっている」

「それは、まさか」

「そうだ。異常に対する認識の低下だ。そして長谷川。君は生まれつき精神に作用する魔法が効きにくい」

「それじゃあ、私がいままで、苦労してきたのは、全部魔法使いのせいなのかよ」

切れ切れに自分に言い聞かせるように話す長谷川。

「そうだ。君には権利がある。学園側の不手際で魔法を知り、学園側の認識の甘さから苦労してきた君には権利がある」

「どんな権利だ？」

「普通の魔法使いがこんな風に魔法がバレた場合、することはただ一つ。記憶を消すんだ。だか俺は違う。記憶を消すなんてことはない。ならばどうするか？」

決まっている。魔法に関わり危険な人生を送るか、見なかったことにして生きていくか、だ。これが一つ目の権利。君はどうする？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だんまりか。まあいい。二つ目の権利は魔法使いたちへ賠償の要求だ。金か、地位か、学歴か。魔法を使える彼らからすれば簡単なことだ。さあ、君はどうする？ さあ、さあ、さあ、さあ！」

長谷川は深く考えている。それもそうだ。いままでの世界観が僅かな時間でぶち壊されたのだから。

「・・・・・・・・先生、魔法に関わる選択をした場合私はどうなるんだ？」

「ほう、あえて危険な人生を選ぶか。君が関わると決めた場合更に選択肢が生まれる。この学園にいる魔法使いに魔法を学び盲信的な正義を振りかざすか、俺から魔法に関する歴史から武術体術技術魔法に符術、真言など様々なことを学び、自分でどんな生き方を選ぶか、どちらかだ」

「少し、時間をください。考える時間がほしい」

「いいだろう。ただし、一週間だ。一週間以内に決めてこい。質問ならいくらでも受け付ける」

ゆっくりと立ち上がり、俺に礼をしてフラフラと歩いていく。詰め込みすぎたか。まあ、選択肢はいくらでもある。その中から選ぶのは長谷川だ俺が関わることじゃない。

「ケケケ、なかなか酷いことをすんなあ。あの状態じゃまともを考えられないぜ」

「大丈夫だよ。あの子は強い。じゃないとここで異常なことを見ながら生きてはいけないから」

「ふーん……ま、俺は肉が切られて酒があれば言うことはなにもないけどな」

「おまえな、誰か知らんがせつかくもらった身体だろ？ もう少し他の楽しみを見つけるよ」

「は？ この身体はリーシャが造ってくれたんだけど？」

「え？ 初めて聞いたんだけど。リーシャなにやってんのさ。こんな肉斬り大好きな人に身体を造るとか」

絶対に0から造ってる。間違いない。あの子、こついうことに関しては絶対に妥協しないから。ここで人の気配を感じる。

「あの化け物共、どこに……」

夜の闇から表れたのはついこの間世界樹のところにいるガンドルフイーニとかいう男。

右手にナイフ左手にハンドガンを持ち、額には汗が流れ随分と不機嫌な御様子。

「君たち、早く家に帰りなさい！ ここは危険だ」

「ケケケ、俺からすれば？ ナイフとハンドガンを持つてるお前が

「一番危険なだけけど？」

おし、ナイスツッコミだチャチャゼロ。ガンドルフィーニは両手を後ろにやり隠そうとする。

「と言っても？ その危険の原因は？ もう倒したんだけどね？」

「なっ！？ どういうことだ？」

「おいおいつれないねえ。この間あつた人を忘れるのか？」

「き、貴様は！ 火陰陽介！？ なぜここに！」

けっこう近かつた距離がガンドルフィーニが一気に離れることで遠くなる。俺、なんか嫌われることをした？

「ここにいたらいけないのかよ。というか？ ここにいるのは？ あんたら正義の魔法使いたちの？ 尻拭いっていう」

「尻拭い？ 尻拭いだと？ 貴様に尻拭いなどされる必要はない！ 私だけで倒せた！」

「でも？ 一般人が？ いたら？ どうするっていう。まさか一般人の記憶を消すから大丈夫。とか思ってたないよな」

「それ以前に？ あんたの実力で足枷があるのに鬼と烏族なんかすぐに倒せる！ って思っているのかっていう」

「………待て、それならその一般人はどうした」

急に深刻な表情になる。ああ、そうか。魔法をバラしたらオコジヨにされるのか。

「ああ、オコジヨか。いやいや大変だねえ。然るべき対応をして帰したよ」

「そうか、良かった……」

「え？　なんで安心してんの？　俺の然るべき対応があんたの基準だとしても？　しっかりバラさせていただきましたっていう」

「な、なんとということを」

顔が真っ青になり、脂汗が出てくるガンドルフィーニ。

「とうか？　その一般人、この学園都市の結界の効果とうか、呪いが効いていなかったっていう」

「そんなことはない。結界は万能だ」

「……アツハツハツハツ！　本気でそんな事を言ってるの？　ああダメだこらえきれない。アハハハハハハ」

とぼけた答えに人目を気にせず思いつきり笑ってしまう。チャチャゼロもピクピクっ体を震わせている。

「なにがおかしい！！」

「いや、だってさ、結界を発動させるのに、世界樹の魔力を使うんじゃないくてさ、アハハ、封印されてるエヴァンジェリンの魔力を、



使わなきゃ維持できない結界のどこが万能なんだよアツハツハツハツ  
ッ」

「そんなバカなことがあるか！」

「学園長に聞いてみるよ。まあ、あの爺さん意外なくらい腹は真っ黒だから教えないだろうけど。」

そろそろ帰るわ。酒飲みたいし。それじゃあな」

荒ぶるガンドルフィーニを後ろにチャチャゼロと去る。

あれ？ ものすごい悪役っぽい？

帰宅途中

「ウオエエエエ！」

「汚ねえっ！　なんで吐いてんだよ！」

「いや、つうぶ、俺は格闘戦がダメなんだよウゲエエエエ！」

「汚いって言うてんだろこのバカ！」

「ウゲエエエエ！ウオエエエ！」

第27話 分岐していく選択肢（後書き）

陽介君がでっっていうになってるっっていう。超うぜえ……

長谷川千雨に魔法バレ。最初は朝倉にしようと思っていましたが動かしくかつたんで千雨に変更。

そして相変わらずガンドル君はいじられ屋。

第28話 翌日（前書き）

連続更新ですので27話をまた見ていない方は27話を読んで見てください

## 第28話 翌日

長谷川千雨に魔法の存在をバラシガンドルフィーニをちょっとからかった翌日の朝。

俺は学園長室の前に立ち、一息つく。

「ふう」

正しいノックの仕方に従って扉を2回叩く。

「開いておるよ」

「やあ、おはよう。まったくあんたは全てにおいて甘い。甘すぎる」

「ふお？ なにを言いたいかまったく分からんのじゃが」

「昨日、鬼と烏族と交戦した。一般人がいたが、幸い怪我はほとんどない。」

「だが、その一般人……彼女と言おうか。彼女は生まれつき魔法がかりにくかった。ここまでいれば分かるよな？」

「ふむ？ どういうことじゃ？」

大量に生えているひげを自慢げに撫でまわしながらなんのことやらというように首をかしげる。この爺、その髭永久脱毛どころかそこから脱毛が進行していくようにしてやるうか。

「もう年だと言ってもボケるにはまだ早いだろう。いい医者紹介し

「てやるうか？」

「ふお！？ わし、結構生きとんじゃが！？」

「……………」

「冗談じゃよ。記憶を消せばいいんじゃない？ ワシに任せなさい」  
ちよつと頭にきた。胸ぐらをつかみ宙に浮かせる。

「お前……………何様のつもりだ。お前らはいつもそうだ。バレたらまずいことがあるとすぐに消去消去消去消去、消去。人の記憶をなんだと思っている」

「おい、人の記憶とはなんだ。言ってみろ」

「わ、ワシにはお主がなぜそんなに怒っておるのがわからん  
じゃが」

本当にわかっていない顔で言い切る。

「人の記憶はその人そのものだ。分かるか。人の生涯は経験の積み重ねだ。記憶もまた然り。その積み重ねを消すというのがどんなことか分かっているのか」

以前スカイアースで行われた実験がある。クローン人間を使い、クローンの元となった人の人生と同じ環境、同じ対人関係、同じ同じ同じ。同じ尽くしてクローンが育った結果、人格、信念、性格全てが違った。

実験者は簡潔に『同じ姿形をしたヒトは簡単にできるが、目に見え

ない場所は同じにはできない。よってそのヒトをそのヒトであるとして決めていく要素に記憶という曖昧な物が最も大きな要素であるということが考えられる。』

そのため、スカイアースでは記憶をいじることを最大の禁忌としている。スカイアースでは脳の仕組みは解明され、その人の記憶と遺伝子のサンプルがあればヒトは脳に損傷が有ったとしても、体のほとんどもが無くなくなってしまっても元通りにでき、それまでと変わらない生活ができる。

「その人の人生を否定するということかのか？」

「そうだ。今後俺の目の前で記憶を消すなどと言うのならメガロメセンブリアごと潰す。

話がそれだな。彼女にはこの学園の呪いが聞いていない。世界樹が異常だということも、この学園が異常だということを幼い頃から知っていて心に傷を負っている」

「それは本当にまずいのう……まさか結界の効果が効かぬ人がおるとは」

「彼女には彼女が希望することをしろ。これは拒否させない。彼女の権利だ」

学園長に背を向け学園長室を出る。扉を閉めるときには力が入り罅がはいった気がするが無視する。ああ、イライラする。

## 第29話 決断？

「それで？ どうするんだ？」

俺は持ち込んだフカフカの椅子に座り長谷川に尋ねる。  
あの夜から一週間がたち、今日が最終日だ。この一週間長谷川はま  
ったく寝てないようで、目のしたには隈ができている。

「もし関わりたくないのならその魔法が効きにくい体質を変えてそ  
こらにいる奴らと同じように笑うこともできるが？」

俺が出した冷たい麦茶を右手に持っけていても飲むことはせず、目線  
は宙をさまよっている。

そりゃ悩むよな。自分の人生を今決めるんだから。慎重にならざる  
おえない。

「……………いま、決めなきゃダメなんだよな？」

「ああ、今、ここで決める」

だが、慎重すぎるのも考え物だ。たまには自分に素直になることも  
必要だ。

「先生、証拠を見せてくれないか？ あの化け物だけじゃいまいち  
信じられない」

「ふむ？ 証拠か。魔法の一つでも見せればいいか」



「ああ」

魔法を見せるといわれつもな。あんまり使わないというか使う必要がないから始動キーも決めてないしなあ。ちやちいの見せたら手品だと思われるしな。

「しょうがない、ついてこい。広範囲殲滅呪文を見せてやる」

「さて、やるぞ。しっかり目は開いておけよ」

「・・・・・・・・」

魔法球の地下研究所にある実験場の中心に立つ。長谷川は強化ガラスのむこう側に避難させている。仮にも殲滅という名が付いているんだ、これくらいは当然だ。

「『プラクテ・ビギ・ナル』。契約に従い我に従え炎の霸王 来たれ浄化の炎燃え盛る大剣 ほとばしれよソドムを焼きし炎と硫黄罪ありし者を死の塵に 『燃える天空』」

超高温の炎が実験場の床、壁、天井を舐めるように燃える。設置していたスプリングラーの電源はスプリングラーの性能が高くて、こ

の程度なら一分ほどで消火してしまうので最初にきっておいた。

「・・・・・・・・」

「それで納得できた？」

『納得せざる負えねえだろ！ どっから炎が出てきたんだよ、物理法則無視すんなよ！ 物理学者涙目だよ！』

「ホント学者泣かせだよ。でも、発生するプロセスはわかってるんだけど発生させる存在がなあ・・・・・・・・」

『しみじみ言ってるじゃねえ！』

長谷川の大声を聞きながら実験場を出る。もう限界。暑すぎて死ぬ。というか熱い。

さて、睡眠学習装置かその理論を探さないと。

「煙草煙草・・・・・・・・どこいった？」

「これだろ？ほら」

煙草が見つからず引つ掻き回してたら長谷川が見つけて投げってきた。なんていい子。涙がでそい。

長谷川はほつといて目当ての物を探すために研究結果の山を漁る。改めて成果をみたけど1000年の量は半端ない。記憶装置が山のように積まれている。3つ。実際は一つの山だけなんだろうけど、しっかり纏めてないからこの量になったんだな。ここから探すとかマジ鬼畜。

「おお、サンキュー。適当になんかやっててくれ。お前に知識を叩き込むための装置か理論を詰め込んだ記憶装置探すから」

「じゃあ、パソコン貸してくれよ。どうせあの山から探すんだ、時間がかかるだろ？」

「そこにある投影式ディスプレイの使っつけ。お前が使ってるくらべたらゾウとミジンコだ。……違う違う、それじゃない。そう、それだ」

「ん、なんとという非常識な……」

長谷川は投影された画像を見て啞然とする。  
さあ、探そう。

「んんん？ これは違う遺伝子のやつだ。これは兵器。生体兵器の理論、自己修復装甲でもない。強化骨格シミュレーション結果、強化人間の理論、完全自立型無人戦闘機」

「なんだこれ？ 容量がでかいこのファイル……」

「最強兵士計画？ 誰だこれ考えたやつ。必要ないだろそんな人がいなくてもパワードスーツと高感度センサーと人工知能使えばいいだろ。」

そんなことより睡眠学習装置の設計図は何処だ？」

目的の物がなかなか見つからない。本当にどこにあるんだ？どこかに持ちだしたわけでもないし誰かがここに入ったわけでもない。とすると機械の中に入ってるってことなんだろうけど。

「なあ先生、探してる物ってこれか？ 『らくらくお手軽寝ている間にあなたも天才の仲間入り！』 っていうのがあるんだけど」

「それだ！ ちょっと見せてくれ」

長谷川が持っているディスプレイを覗き込むと目的の物がそこに映し出されていた。無いところを探してたんだから見つかるわけがないよなあ。

さて、この装置を造るにしても多少時間はかかる。その間に長谷川の護身方法を考えよう。

「それで、お前は関わるといふ道を選んだわけだが、どこぞの幻想殺しみたいに説教して相手が考えをかえて戦わなくて済むわけじゃない。だから身を守る術を持っていなければならぬってわけだ。何かやりたいとかこれが出来るといふものがあるか？」

「……………体を動かすのは苦手だ」

「胸張つて言うことじゃないだろ。何かしてみたいとかいう物はあるか？ 超能力でも魔術でもいいぞ？」

「特にない」

即答。どうしてくれよう。柔術とか太極拳はできるけど俺が嫌いだ。あんなゆらゆらした掴みどころのないやつなんか嫌いだ。銃器はこいつが撃つたらずぐに肩が外れるかするだろうしな。

「どうしようか、どうしたものが、どうしてくれようか」

「先生はなにを使ってるんだ？ まさか俺は素手のほうが強えとか言わないよな？」

「ないない、知り合いにそんなやついるけど。俺は素手のほうが強いというわけじゃないな」

長谷川の言葉に1人の守銭奴でガチガチ筋肉質の知り合いが思い浮かんで突然懐かしくなってしまった。というかあいつに金貸したままだ。

「じゃあなんなんだ？ メリケンサクってわけじゃないだろ？」

「ああ、銃だよ銃。人類の知恵と試行錯誤の結晶。火薬や様々な気体の圧力を用いて、高速で弾丸と呼ばれる小型の飛翔体を発射する武器の総称。弾丸の運動エネルギーによって対象を破壊することを目的としており、狩猟や戦闘に用いられる武器で形態で大まかに分けると8種類、細かく分けるともっとある」

現代では戦争などで使われ、日本以外の国では銃による犯罪が後を絶たないがそんなのはそんなことに使った馬鹿が悪くて、ちゃんと使えば自己防衛の手段にもなる。

「わかった、もういいです。そこまでにしてください」

「そうか、それじゃあ何にする？ 今決めろよ。お前はいつ他の魔法使いが襲撃に来るかわからない都市に住んでるんだからな。1分1秒が惜しい」

「先生が決めてくれよ。選択肢があり過ぎて決めれないから」

優柔不断だなこいつ。そこまで俺に決めて欲しいというなら俺が決めてやるう。

「そうだな、暗器を使ってもらおうか。習得に時間はかかるが、攻め方もいろいろあるし、他にこれといったものもないしな」

「ひとつ聞かせてもらっていいか？」

類の筋肉をひきつかせながら恐る恐るといった感じで手をあげる。

「なんだ？」

「その暗器って言うのは小刀とか、針とか見つかりにくい物を使うってことだよな？」

「なにを言っているんだ？ 体のいたるところにあらゆる武器を潜ませ一流の技術で臨機応変に戦うってことだろ」

例えるならばめだかボ クスの宗像みたいな。ただし、武器の扱い方は素人ではなくて一流だけだな。

「終わった。私終わった。いつから世界はこんなにクレイジーになったんだ」

「少なくとも600年は固いな」

「そうですかい」

肩をすくめ諦めたように首を振る。まあ、諦める。これもまた人生だ。

長谷川がふと気がついたという様子で尋ねてくる。

「先生つて何者なんだ？」

「どういった意味でだ？」

「教師の先生もこんなオーバーテクノロジーな技術を持っている先生も、化け物を蹴り飛ばしていた先生もだよ。

「……全てが知りたい」

全てが知りたいとは………これまた大きくでたな。実際自分でも自分が何者か、なんて分かっていない。

回避不可能な出来事で死に転生した転生者？

チート能力保持者？

中立国の国王？

真理を知っている人間？

不老不死の人間？

体が燃え尽きても再生する化け物？

過去最高額の元賞金首？

紅き翼の一員？

麻帆良の魔法教師？

「知らん。自分で俺を観察でも監視でもして見つける。見つけたそれが俺だ」

「知らんって、少しぐらいいいだろ？」

「少しぐらいならいいか。  
化け物で賞金首で英雄で教師で国王だよ」

「……………さっぱり分かん。矛盾しすぎだろ」

さあ長谷川に持たせる武器を探しに行こう。少なくとも50種類くらいは持つてもらわないと。

長谷川に声をかけて武器庫へ向かうとしよう。

「長谷川、いつまでも考えてるんじゃない。武器取りに行くぞ」

「え？ 誰の？」

「おまえしかいないだろ。今日で潜ませ方はできるレベルまで上げるからな」

「というわけで、私は非日常へ足を踏み入れたのだった。  
……………じゃねえよ！不幸だああああ！」



## 第29話 決断？（後書き）

暗器とか厨二乙。

原作、32巻までしか読んでないけど、なんか将棋盤をひっくり返したような展開になったとかいう噂を耳にしました。

単行本を待とうか………

試験があつて時間がとれず、なぜか書こうとしたら続きが思い浮かばず………言い訳です。更新遅いつて言つてあるから大丈夫だよ？ ね？

今回の展開は誰もが予想してたはず。というかお決まりごとになつてる気がします。

次は千雨強化の様子が超が出るよ！

少し麻帆良に来てすぐのところを書き直そうと思つてます。具体的にはゼクトをいかなかったことにして、幼なじみの厨二設定を消去。そのくらいです。

PS3が欲しい………アーマードコア、エースコンバット、COD、バトルフィールド………なんでこんなに一気に出し。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1045r/>

---

魔法先生ネギま！の世界と銃器使い

2011年8月29日00時33分発行